

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第7集

日本住宅公団高坂丘陵地区

埋蔵文化財発掘調査報告

— VI —

桜山窯跡群

1982

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第7集

日本住宅公団高坂丘陵地区

埋蔵文化財発掘調査報告

— VI —

さくら やま よう せき ぐん
桜 山 窯 跡 群

1982

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



桜山窯跡群航空写真

序

埼玉県の首都圏に属する地域は、各種開発事業が進行し、目まぐるしい変化発展をきたしているところであります。

特に、首都東京から放射線状に延びる私鉄、国鉄各線沿いは、大小宅地開発事業が集中し埋蔵文化財行政との調整が最も多い地域であります。

日本住宅公団の開発もこの例外ではなく、東松山市高坂丘陵地区の土地区画整理事業もその一つであります。

当然、本地区内には多くの埋蔵文化財包蔵地がみられ、慎重に協議を重ねてまいりましたが、8ヶ所の遺跡についてはやむなく発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は、昭和52年に埼玉県教育委員会が日本住宅公団の委託を受けて実施し、整理作業は当事業団が委託を受けて行なったものであります。

本書は高坂丘陵地区土地区画整理事業地内の桜山窯跡群に関する報告書であります、刊行に当たり多くの方々から種々の御協力、御指導をいただきました。

ここに、日本住宅公団首都圏開発本部第二事業計画課、同埼玉西宅地開発事業所、東松山市教育委員会及び地元関係者の方々に改めて深く感謝いたします。

昭和57年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 五 郎

例　　言

1. 本書は日本住宅公団高坂丘陵地区土地区画整理事業にかかる、埼玉県東松山市大字田木に所在する桜山窯跡群（8号遺跡、52委保記第4—169号）の発掘調査報告書である（桜山古墳群を除く）。
2. 発掘調査は埼玉県教育委員会文化財保護課が調整し、日本住宅公団の委託により、埼玉県教育委員会が昭和52年度に実施し、報告書作成作業は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和56年度に受託し、実施した。
3. 発掘調査は埼玉県教育局文化財保護課第3係があたり、水村孝行、井上肇（現・県立博物館）、今井宏が担当した。
4. 出土品の整理及び図の作成は水村孝行、今井宏、岡村和子が主としてあたり、三沢京子、武田和世子、長田喜子、木下亘、飯塚武司の協力があった。
5. 本書の執筆は、横川好富、水村孝行、今井宏、井上尚明、岡村和子があたった。分担は次のとおりである。

横川 I—1

水村 I—2, II, III, IV—1, 2 (遺構), 4—(1), (2), V—1, 2, 5

今井 IV—4—(3)

井上(尚) IV—3, V—3

岡村 IV—2 (遺物), V—4

なお、出土遺物、粘土の化学分析については大沢眞澄氏、榎原雄太郎氏、成瀬正和氏、山路進氏、中村木の実氏にお願いした。

6. 本書の編集は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究第4課があたり、横川好富が監修した。

目 次

序

例 言

I 調査の概要	1
1 調査に至るまでの経過	1
2 調査の経過（日誌抄）	3
II 遺跡の立地と環境	5
III 遺跡の概観	11
IV 遺構と出土遺物	14
1 須恵器窯跡と出土遺物	14
(1) 6号窯跡	14
(2) 8号窯跡	22
2 墳輪窯跡と出土遺物	50
(1) 1号窯跡	50
(2) 2号窯跡	55
(3) 3号窯跡	58
(4) 4号窯跡	60
(5) 5号窯跡	66
(6) 1号～5号窯跡灰原	68
(7) 7号窯跡	85
(8) 9号窯跡	95
(9) 10号窯跡	100
(10) 11号窯跡	103
(11) 12号窯跡	108
(12) 13号窯跡	110
(13) 14号窯跡	112
(14) 15号窯跡	114
(15) 16号窯跡	116
(16) 17号窯跡	120
(17) 18号窯跡	123
(18) 19号窯跡	124
(19) B群南斜面下灰原	124
3 工房跡と出土遺物	134
(1) H—1号住居跡	134
(2) H—2号住居跡	140
(3) H—3号住居跡	140

4 集石遺構と出土遺物	155
(1) 1号集石	155
(2) 2号集石	155
(3) 繩文式土器	157
V 結語	
1 須恵器と埴輪の窯跡について	165
2 須恵器窯跡の操業時期について	171
3 工房跡と出土土師器について	174
4 形象埴輪と円筒埴輪について	177
5 まとめ	187
VI 付篇	190
1 出土遺物の化学的分析	190

第61図	14号窯跡出土遺物	114	第79図	H—3号住居跡	141
第62図	15号窯跡出土遺物	115	第80図	H—3号住居跡カマド	142
第63図	16号・17号窯跡	117	第81図	H—3号住居跡出土遺物(1)	143
第64図	16号窯跡出土遺物(1)	118	第82図	H—3号住居跡出土遺物(2)	144
第65図	16号窯跡出土遺物(2)	119	第83図	H—3号住居跡出土遺物(3)	146
第66図	17号窯跡出土遺物	121	第84図	H—3号住居跡出土遺物(4)	147
第67図	18号・19号窯跡	122	第85図	表土出土遺物(1)	150
第68図	19号窯跡出土遺物	123	第86図	表土出土遺物(2)	151
第69図	11号～13号窯跡灰原出土遺物	125	第87図	表土出土遺物(3)	153
第70図	B群南斜面下灰原出土遺物(1)	127	第88図	表土出土遺物(4)	154
第71図	B群南斜面下灰原出土遺物(2)	128	第89図	1号集石	156
第72図	B群南斜面下灰原出土遺物(3)	129	第90図	2号集石	157
第73図	円筒埴輪底部拓影	133	第91図	2号集石出土遺物拓影	158
第74図	H—1号住居跡	134	第92図	縄文土器拓影(1)	159
第75図	H—1号住居跡出土遺物(1)	135	第93図	縄文土器拓影(2)	160
第76図	H—1号住居跡出土遺物(2)	137	第94図	縄文土器拓影(3)	162
第77図	H—1号住居跡出土遺物(3)	139	第95図	縄文土器拓影(4)	163
第78図	H—2号住居跡	140			

図版目次

図版 1	遺跡近景（南より）	11号窯跡遺物出土状態
	遺跡近景（東より）	図版18 11号窯跡窯尻部付近
図版 2	6号窯跡	11号窯跡床面断面
	6号窯跡（煙道部より）	図版19 12号窯跡
図版 3	6号窯跡床面	12号窯跡遺物出土状態
	6号窯跡側壁	図版20 13号窯跡
図版 4	8号窯跡	13号窯跡遺物出土状態
	8号窯跡	図版21 14号窯跡
図版 5	8号窯跡（煙道部より）	同上（窯尻部より）
	8号窯跡遺物出土状態	図版22 15号窯跡
図版 6	8号窯跡遠景	同上（窯尻部より）
	6号・7号・8号窯跡（右から）	図版23 14号・15号窯跡
図版 7	1号窯跡	同上
	2号窯跡	図版24 16号窯跡
図版 8	4号窯跡	16号窯跡遺物出土状態
	4号窯跡遺物出土状態	図版25 17号窯跡
図版 9	5号窯跡遺物出土状態	18号窯跡
	同上	図版26 19号窯跡
図版10	1号～5号窯跡灰原遺物出土状態	19号窯跡遺物出土状態
	同上	図版27 窯跡群全景
図版11	1号～5号窯跡灰原遺物出土状態	B群全景
	同上	図版28 B群集中区全景
図版12	7号窯跡	B群集中区前庭部
	同上	図版29 H-1号住居跡
図版13	7号窯跡（窯尻部より）	H-1号住居跡粘土出土状態
	7号窯跡遺物出土状態（窯尻部付近）	図版30 H-2号住居跡
図版14	9号窯跡	H-3号住居跡
	同上	図版31 H-3号住居跡カマド
図版15	10号窯跡	同上
	同上	図版32 1号集石
図版16	10号窯跡（窯尻部より）	2号集石
	11号窯跡	図版33 6号・8号窯跡出土遺物
図版17	11号窯跡	図版34 8号窯跡出土遺物

- 図版35 8号窯跡出土遺物
図版36 8号窯跡出土遺物
図版37 8号窯跡出土遺物
図版38 8号窯跡出土遺物
図版39 8号窯跡出土遺物
図版40 1号・2号・4号窯跡出土遺物
図版41 1号・2号・5号窯跡出土遺物
図版42 4号窯跡出土遺物
図版43 7号窯跡出土遺物
図版44 7号窯跡出土遺物
図版45 7号窯跡出土遺物
図版46 1号～5号窯跡灰原出土遺物
図版47 1号～5号窯跡灰原出土遺物
図版48 1号～5号窯跡灰原出土遺物
図版49 1号～5号窯跡灰原出土遺物
図版50 1号～5号窯跡灰原出土遺物
図版51 1号～5号窯跡灰原出土遺物
図版52 A群出土遺物
図版53 A群出土遺物
図版54 9号・10号窯跡出土遺物
図版55 11号・12号窯跡出土遺物
図版56 11号～15号窯跡（中段右11号～13号
窯跡灰原）出土遺物
図版57 16号・17号・19号窯跡出土遺物
図版58 B群南斜面下灰原出土遺物
図版59 B群南斜面下灰原出土遺物
図版60 B群出土遺物
図版61 形象埴輪・耳
図版62 形象埴輪・1美豆良 2腕
図版63 形象埴輪・1腕 2鈴 3尻尾
図版64 形象埴輪・脚
図版65 H-1号住居跡出土遺物
図版66 H-3号住居跡出土遺物
図版67 表土出土遺物

2. 調査の経過(日誌抄)

〈4月〉 前年度に実施した桜山古墳群調査の際に検出された1号～5号窓跡を精査すると共に、斜面下の灰原確認調査を実施する。灰原は斜面下半の裾部から水田面近くまで伸びており、東西約45mの範囲に及んでいることが判明した。

〈5月〉 斜面部において遺構確認調査を実施し、3基の窓跡を確認した。東から6号、7号、8号窓跡と命名した。6号と8号窓跡は須恵器、7号は埴輪の窓跡である。3基は確認後ただちに調査にかかる。

3号窓跡に接して堅穴状の遺構が確認されたが、1号～5号窓跡の灰原を画する施設と判明。ここからは人物埴輪を含む多量の遺物が出土した。

6号～8号窓跡の調査もすすみ、各々床面に達した。8号窓跡の焼成部から壺、蓋等が出土し、予想以上に古い時期のものであることが判明した。

〈6月〉 斜面部及び肩部において遺構の限界を確認すべく、調査区を東に拡げる。その結果、焚口部が斜面にかかる2基の埴輪窓跡を確認し、9号、10号窓跡とする。さらに東ヘトレンチを伸ばしたが、沖積地に面した支丘の先端部分では何ら遺構は確認できず、9号窓跡を東限とする。ひきつづき西側の限界を確認すべく調査区を拡張する。それと並行して平坦部の遺構確認調査を急ぐ。

6号、8号の須恵器窓跡は礫層を掘りこんで構築されており、壁がきわめて軟弱である。両窓跡を完掘し、図取り、写真撮影を行なう。

〈7月〉 先月来行なってきた西側の限界確認調査の結果、西側では1号～5号及8号窓跡が本窓跡の西限であると断定した。

斜面部と併行して実施していた支丘平坦部での遺構確認調査で、6号窓跡と9号窓跡の間に重複する数基の埴輪窓跡が確認された。そこで、各窓跡の新旧関係を把握すべく、随所にセクションベルトを残し、慎重に掘り下げた。

〈8月〉 9号窓跡の西側に群在していた埴輪窓跡に11号～19号まで番号を付した。さらに周辺部を精査したが窓跡は発見できなかった。重複した窓跡の新旧関係の把握に全力をそそぐ。

6号住居跡を完掘、ただちに図取り、写真撮影に入る。同住居跡のカマドには6個体分の円筒埴輪が使われており、床面から鬼高期前半の土師器が出土した。

調査がすすむにつれ、11号～19号の窓跡は斜面に近い位置にある窓跡ほど古く、しだいに平坦面へ伸びていることが判明した。

平坦面にやり方を組み、集中する部分の実測を開始する。

〈9月〉 全測図続行、さらに個々の窓跡の図取り及び写真撮影を行なう。

平坦部と斜面部において、土壤のサンプリングを行なう。また、各窓跡をたち割り、床面下の観察及びセクション図を取る。

窓跡群全体の航空測量のため、清掃を行なう。航空測量終了後、全遺構のうめもどし作業。

(水村孝行)



第1図 周辺の主要遺跡分布図

II 遺跡の立地と環境

桜山窯跡群は東松山市大字田木字桜山1316外に所在する。交通の上からは、東武東上線高坂駅から南西へ約1.5kmの位置にあたる（第1・2図）。

埼玉県のほぼ中央部に位置する比企丘陵は、都幾川によって形成された沖積地、松山台地を境にして南北に区分される。一般に北側を北比企丘陵、南側を南比企丘陵（あるいは岩殿丘陵、物見山丘陵）と呼んでいる。本窯跡が立地するのは南比企丘陵の東端であるが、まず地質の面からみてみよう。同丘陵の下半部は第三紀中新世の都幾川層が基盤となっており、その上に鮮新世の物見山礫層が乗っている。礫の種類はチャート、砂岩、結晶片岩等が主体を占め、小児頭大から拳大のものが目立つ。本窯跡群の須恵器窯跡は同礫層を掘り込んで構築されている。したがって、側壁、床面等に礫が露出し、きわめて軟弱な窯体となっている。さらに、同丘陵地内に散在する縄文時代遺跡から出土する石器の原材に、前記3種類の石材が多用されている。このことは、該期の人達が居住地の周辺にある身近な石材を積極的に使用していたことを物語っている。

また、同丘陵地内には大小の谷が入りこみ、やや奥に入ると急斜な尾根を形成している。したがって、急斜面を形成する尾根上では、いわゆるローム層はほとんど流失し、丘陵先端部にみられる支丘の平坦面に残されているにすぎない。ローム層の上に乗る腐植土層も、標高の高い尾根上では未発達で、丘陵奥部では粘土化したローム層が露出し、表面に礫が散見されるところが多い。したがって、同丘陵地内の遺跡は、丘陵先端部に形成された支丘上に濃く分布し、平坦面の少ない奥部にはほとんどみられない。

さて、南比企丘陵の一角には物見山（標高136.5m）があり、ここから東あるいは南東へ派生する尾根は、順次標高を減じながら沖積地に達する。同山頂から南東へ伸びる尾根の東端に位置する本窯跡群では、平坦面での標高が28m～29mとなり、東に広がる沖積地との比高は約6mを測る（第3図）。

本窯跡群は、沖積地に向かって突出した舌状を呈する支丘の南斜面及び平坦面に所在する。埴輪窯跡に関連があると考えられる住居跡（工房跡）は、窯跡の北、東側の平坦面に確認された（第4図）。各遺構が所在する支丘の南斜面は約30度の勾配をもち、斜面下には狭少なテラス状の平坦面がみられる。南側には比較的大きな谷が入っており、わずかながら水田が営なまっていた。窯跡はこの谷の入口部から約110m程奥（西）へ入ったところに19基が群在している。周辺もくまなく精査したが、他に窯跡は確認されなかった。本窯跡群の乗る支丘上では、以前に弥生時代の集落跡、終末期の古墳群が調査されているが（小久保、1981），本書で報告する以外の関連遺構は確認されていない。したがって、ここで報告する2基の須恵器窯跡、17基の埴輪窯跡、3軒の工房跡はそれひとつまとまりある生産関係遺構として把握されよう。

さて、南比企丘陵及びそれに接する台地上には各時期に亘る遺跡が濃密に分布していることは周知のことである。それらのうちのいくつかは、当該地域を縦断する関越自動車道の建設、日本住宅公団による土地区画整理事業、こども動物自然公園の建設等の諸事業にかかり、記録保存のための発掘調査が実施されている。そこで次に、それら周辺の遺跡を中心に、本窯跡群から検出された諸

遺構、つまり縄文時代早期の集石遺構、古墳時代の生産遺跡を概観してみたい。

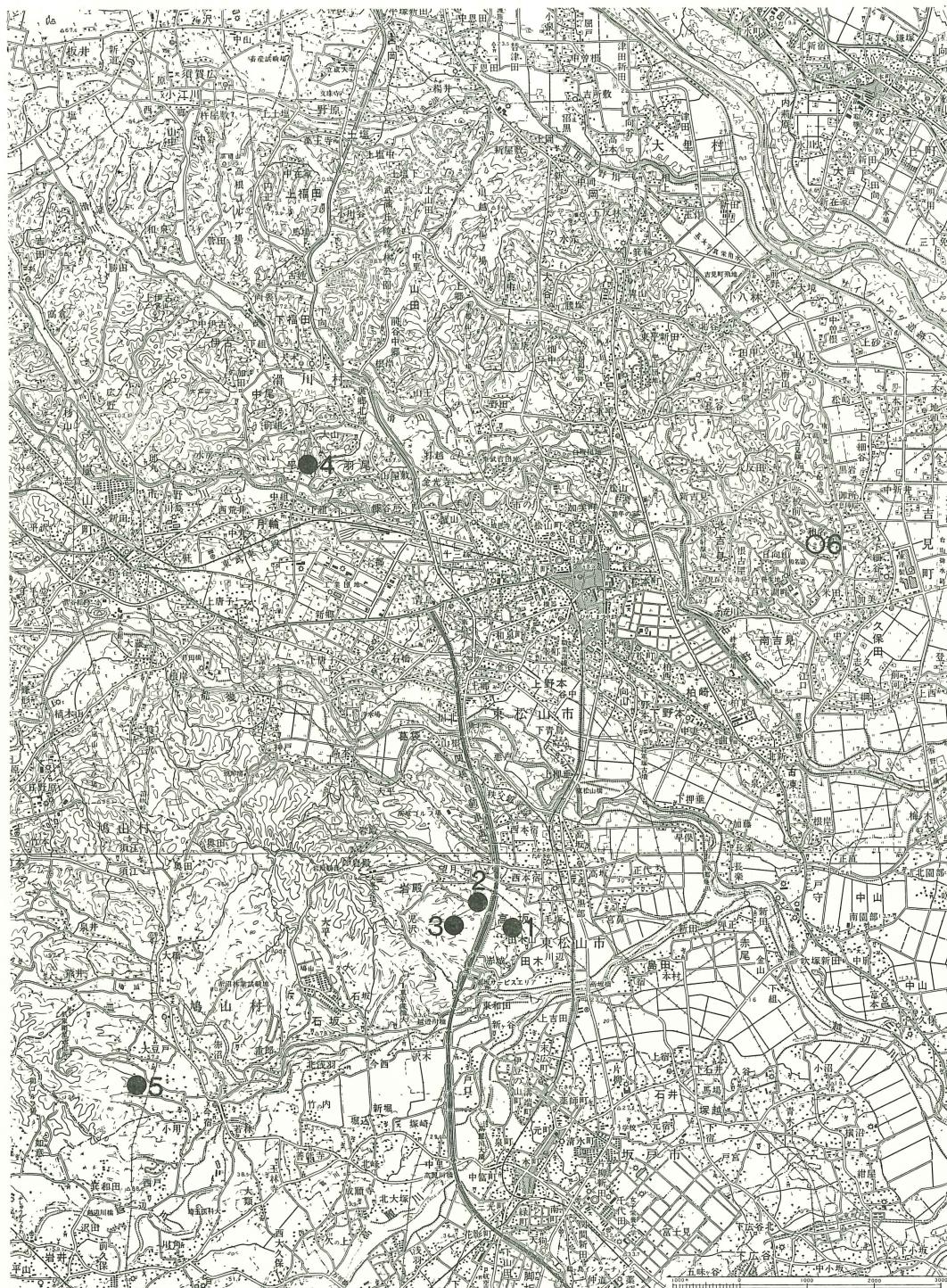
まず、縄文時代の遺跡をとりあげてみよう。本窯跡群からは、2基の集石遺構（第89・90図）が検出されている。2基は近接しており、窯跡の集中するところから北へ約50mほどの距離にある。前年度報告した桜山古墳群のうち8号、9号墳が所在した付近である。同古墳群調査時においても早期から後期にかけての土器、石器が出土しており、本集石の周辺から出土した土器群と同時期のものである。早期～前期の土器を中心であり、両者は本来一群をなしていたものと考えられる。

周辺で該期の遺構、土器群が検出された例として立野遺跡（今井ほか1980・第1図5）がある。集石遺構は1基で、条痕文系土器群が伴出している。早期の集石遺構が検出されたのは、現時点では2遺跡だけである。集石に用いられた石材は砂岩、結晶片岩が主体を占め、前記した物見山礫層の露頭から採取したものと考えられる。他に該期の遺構を検出した遺跡として緑山遺跡（1978年県教委調査・第1図4）がある。ここからは早期後半の炉穴が60余基検出されている。さらに、遺構こそ確認されていないが、大塚原遺跡（井上ほか1980・第1図7）からは条痕文系の土器群が、根平遺跡（今井ほか1980・第1図3）からは沈線文系土器群、条痕文系土器群が出土している。このようにみてゆくと、早期後半特に条痕文系土器群の出土が目立つ。本丘陵地内における縄文時代の研究、中でも早期のそれは諸開発が進行する以前は空白に近かった。ここ数年の間に、上記した諸遺跡の調査によってある程度まとまった資料が蓄積してきた。しかし、それらの資料について今ここで検討する用意はない。

さらに、上記した緑山遺跡において黒浜期の住居跡が2軒検出されていることは注目される。同遺跡は丘陵先端部からやや奥に入った狭い平坦地にある。周辺に該期の集落は確認されておらず、同丘陵地内における前期前半の代表的な遺跡といえる。この黒浜期の集落形成が周辺の早期後半に属する諸遺構、土器群などの関わりを持つのか充分な検討をするであろう。限られた地域内、しかも、地理的条件から居住空間が限定される本丘陵地内の集落の推移を考える時、興味ある問題が提示されそうである。さらに、集落は確認されていないが、いくつかの遺跡で諸磯期の資料がある程度まとめて出土している。さらに中期に入ると、調査されていないが、同丘陵地内には阿玉台期、勝坂期の土器を出す地点がそれぞれ一ヶ所ずつ確認されている。さらに舞台遺跡（井上ほか1978、1979・第1図2）からは加曾利E I、II期の住居跡が8軒検出されている。

以上、きわめて概略的に当該地域の縄文時代遺跡を通観してみた。断続的ではあるが、早期後半から中期まで足跡をたどることができる。縄文時代の研究についてはまだ緒についたばかりの当該地域においても、上記した資料を整理し、検討することによって種々の面で興味ある問題点が提示できそうである。なお、後期以降の資料も散見するがここでは触れない。

次に、本窯跡群の主体である古墳時代の窯業関係遺跡をみてみよう。本窯跡群の周辺で該期の須恵器窯跡が確認されたのは5遺跡である（第2図）。最も至近距離にあるのが舞台遺跡（井上ほか1978、1979・第2図2）で、本窯跡から北西へ約500mのところにある。鬼高峰期の集落を乗せる支丘の南斜面に2基の須恵器窯跡が検出された。いずれも等高線に直交し、並列して構築されている。窯跡の南と北は小支谷があり、平坦面での標高は約29mを測る。窯の立地条件は本窯跡と共に通する点が多い。主な出土遺物としては、壺、蓋、甕等があり、それらの資料の検討から7世紀後



1 桜山窓跡

2 舞台窓跡

3 根平窓跡

4 羽尾窓跡

5 小用窓跡

6 和名埴輪窓跡

第2図 周辺の古墳時代窓跡分布図

半に位置づけられている。

次に、本窯跡の西約700mのところにある根平遺跡（井上ほか1980・第2図3）をみてみよう。標高約55mの丘陵のやや奥まったところにあり、北東斜面に1基単独で検出された。壺、鉢、壺等が出土しており、7世紀初頭に位置づけられている。出土遺物はいずれも焼成が不良で、厚手である。上記した2遺跡は直線距離にして500m～700mのところに所在するが、後述するように本窯跡とは製作技術等の面から、直接的な系統関係は認められない。時期的にも近く、至近距離にありながら、各々系統を異にしていることは興味深い。

滑川村羽尾窯跡（高橋1980・第2図4）は、本窯跡群から北へ約7kmの位置にある。沼に面した南西斜面に1基単独で構築されており、3回に亘り改築が行なわれたことが確認されている。遺物は豊富で壺、蓋、高壺、甕等の須恵器が出土しており、6世紀後半の操業と考えられている。

さらに、物見山を西に下った鳩山村にも古墳時代に属する小用窯跡（高橋1977・第2図5）が確認されている。窯跡は1基で、個人住宅建設のため全壊に近い状態で、わずかに煙道部の一部が確認されたにとどまる。住宅新築時に土地所有者の方が須恵器を採集されており、古墳時代の須恵器窯跡であることが判明した訳である。出土したのは短頸壺と甕の破片で、7世紀前半に位置づけられている。同窯跡はいわゆる南北企窯跡群の分布範囲にある。当該地域は奈良・平安時代の窯跡が密集する地域として知られている。小用窯跡の発見で古墳時代にも窯跡が存在したことが確認され、その意義は大きい。

上記したように、比企地方において古墳時代に属する須恵器窯跡は5遺跡7窯跡である。各窯跡間の脈絡、系統関係の有無については後で触れるが、当該地域において須恵器生産が確実に6世紀代までさかのぼることができ、その後も断続的ながらも、須恵器生産が行なわれていたことが確認できた。上記した5遺跡を単純に古い順にならべると、桜山窯跡→羽尾窯跡→根平遺跡→小用窯跡→舞台遺跡となる。

一方、県北部児玉町のミカド遺跡（坂本1981）出土の須恵器から、本窯跡よりもさらにさかのぼる須恵器窯跡の存在が予想されている。しかし、現在のところ、埼玉県内では本窯跡群よりも古い時期の窯跡は調査されていない。今後は、さらに古い須恵器窯跡の存在を考慮に入れながら、上記した5ヶ所の窯跡及び出土資料の充分な検討が必要であろう。

次に埴輪窯跡についてみてみよう。最も至近距離にあるのが吉見町和名埴輪窯跡（金井塚1978・第2図6）である。本窯跡から北東へ7.3kmほどの位置にあり、一部が調査されている。検出された窯跡は4基であるが、他にも数基存在することが確認されている。また、4基はそれぞれ単独で構築されており本窯跡群のように重複していない。

同窯跡で生産された埴輪は、至近距離に所在する久米田古墳群や吉見丘陵地内に群在する周辺の古墳群等に供給されたと考えられている。

さらに、荒川を越えて約13kmのところには著名な馬室埴輪窯跡（塩野ほか1978）があり、同窯跡から東へ3kmほどの位置に生出塚窯跡（山崎ほか1981）が所在する。両窯跡はわずか3kmという近距離にあり、供給先その他の点で問題を提示している。

本窯跡群で生産された埴輪の供給先については後で触れるが、現時点では不明といわざるを得ない。

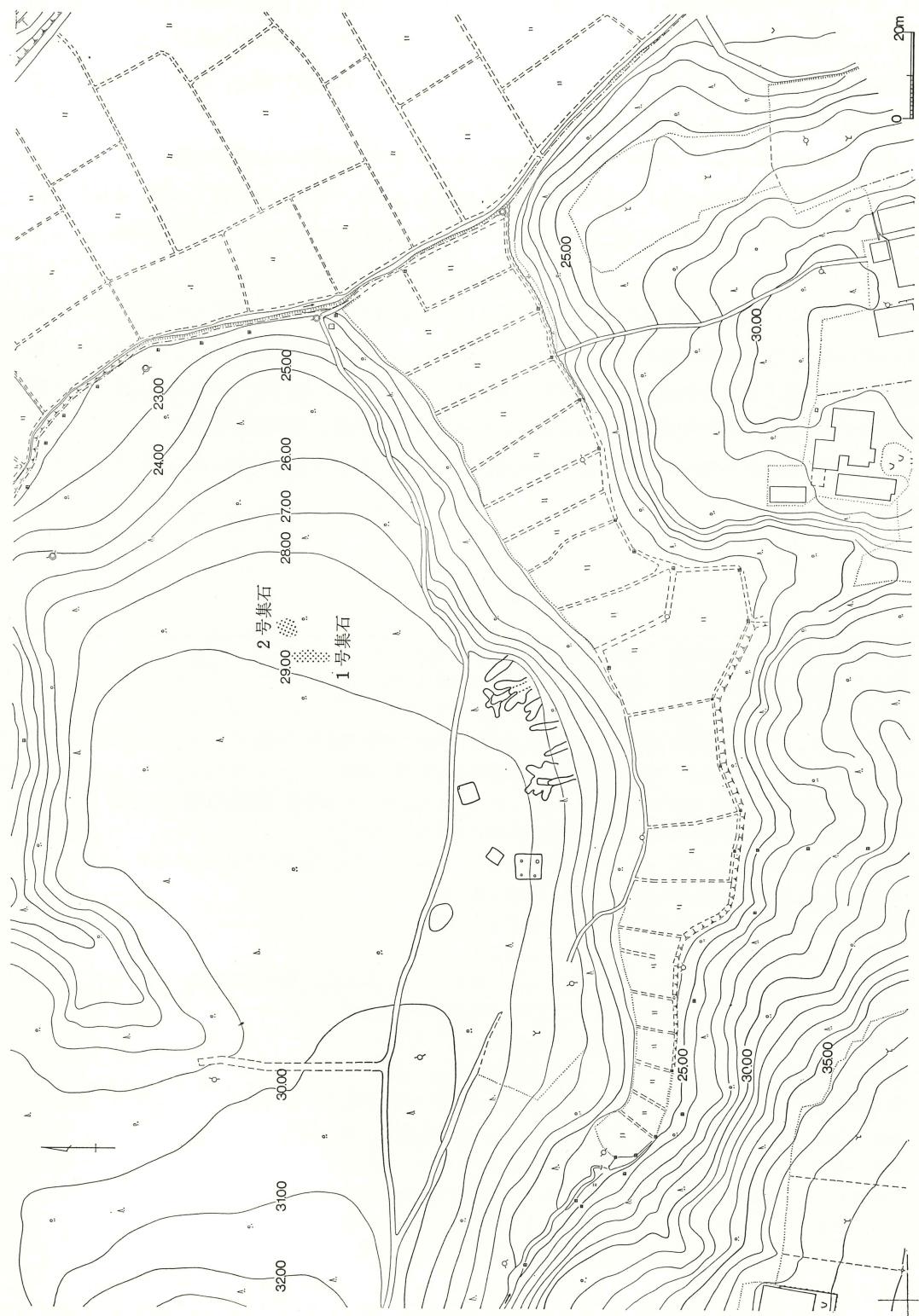
い。ただ県立歴史資料館所蔵の人物埴輪の1点が、本窯跡群出土の人物埴輪（第37図35）と製作技術、顔面の表現等がきわめて近似する。資料館所蔵の人物埴輪は、本窯跡群から約4kmのところにある附川古墳群（今泉ほか1974・第1図12）周辺から採集されたものである。短絡的に比較するのには無理があろうが、参考資料とはなりうるであろう。

また、本窯跡群からは3軒の住居跡が検出されている。うち2軒からは日常生活用具としての土師器と共に円筒埴輪が出土し、さらに床面上から白色粘土、焼土等が検出されている。埴輪窓跡に係わりのある遺構と考えて誤りはないであろう。しかし、住居跡から出土した埴輪と同形態のものは窯跡から発見されていない。これについては後述するが気になるところである。上記した3軒の住居跡を本埴輪窓跡と何らかの関連があるものとし、作業場的性格をもつ遺構と考えた場合、埴輪工人達の本来の生活の場は他に求めらければならない。上記した住居跡から出土した土師器は大略鬼高前半の所産と考えられる。周辺に該期の集落跡をもとみると、約500mのところに位置する舞台遺跡や坂本遺跡（1978年東松山市教委調査）等がある。本窓跡との関連の有無については、今後の分析に待たねばならないが、工人達の居住地は本窓跡群からさほど遠くないところに求めるのが妥当であろう。

(水村孝行)

引用・参考文献

- 井上 肇ほか「舞台」資料編 埼玉県遺跡発掘調査報告書第17集 1978
 井上 肇ほか「舞台」本文編 埼玉県遺跡発掘調査報告書第18集 1979
 井上 肇ほか「根平」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集 1980
 今井 宏ほか「児沢・立野・大塚原」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集 1980
 今泉泰之ほか「割山遺跡」 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 1981
 梅沢太久夫ほか「埼玉における古代窯業の発達(3)」『研究紀要』3号所収 埼玉県立歴史資料館 1981
 金井塚良一「柏崎古墳群」 東松山市文化財調査報告第6集 1968
 金井塚良一編「諫訪山古墳群(第一次発掘調査報告)」 東洋大学考古学研究会発掘調査報告第1集 1970
 金井塚良一「和名埴輪窓跡群の発掘」 吉見町史上巻 1978
 金井塚良一編『北武藏考古学資料図鑑』 校倉書房 1976
 栗原文蔵ほか「駒堀」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集 1974
 栗原文蔵ほか「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 1974
 小久保徹「桜山古墳群」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第2集 1981
 高橋一夫「比企郡鳩山村出土の須恵器」 埼玉考古16号 1977
 高橋一夫「羽尾窓跡発掘調査報告書」 滑川村教育委員会 1980
 坂本和俊ほか「金屋遺跡群」 児玉町文化財調査報告書第2集 1981
 塩野 博ほか「馬室埴輪窓跡群」 埼玉県埋蔵文化財調査報告第7集 1978
 塩野 博編「日本はにわ製作遺跡総覧」『歴史読本』21—11 1976
 水村孝行「桜山窓跡群の調査」 第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨 1979
 山崎 武ほか「生出塚遺跡」 鴻巣市遺跡調査会報告書第2集 1981



第3図 窯跡群周辺の地形図

III 遺跡の概観

本窓跡群は、物見山から南東方向へ派生する支丘の南斜面及び平坦面に所在する（第3図）。北と南には谷が入り、各遺構が検出された平坦面は舌状を呈して東に突出している。東側一帯は、九十九（つくも）川によって形成された沖積地が広がっている。支丘平坦面での標高は約29m、沖積地との比高差は約6mを測る。

調査にあたっては桜山古墳群調査時に使用した基本杭を使用し、斜面下にいたるまで10m×10mの大グリットを設け、必要に応じ2m×2mの小グリットに細分した。まず、斜面下の水田に接した部分を掘り下げ灰原の検出につとめた。確認された灰原から窓体を追求し、新しい窓から順次調査してゆこうとした。しかし後述するように、窓跡間の重複がはげしく複数の窓が灰原を共有している状態であったのでこれを断念した。そこで、斜面及び支丘平坦面を精査し、窓体及び関連遺構の検出につとめた。

その結果、古墳時代の須恵器窓跡2基、埴輪窓跡17基、工房跡3軒、他に縄文時代早期の集石2基が検出された。須恵器窓跡はいずれも斜面に構築されていたが、礫層を掘り込んでいるため、窓床、窓壁に小礫が露出し、きわめて軟弱であった。

埴輪窓跡で斜面にあるのは1基だけで、他はすべて支丘の肩部から平坦面にかけて築窓されていた。しかも単独で存在するのは2基だけで、他はすべて重複している。この重複関係は調査の結果、斜面に近いところに所在する窓跡が古く、順次平坦面に伸びていることが判明している。

さらに、1号～5号の埴輪窓跡と8号の須恵器窓跡との関係をみると、後者の方が古い時期に構築されていたことが看取された。

工房跡は3軒検出されたが、このうちH1号、H3号の二軒から土師器とともに円筒埴輪が出土している。特に後者からはカマドの両袖に計6個体分の円筒埴輪が使用されていた。また、白色粘土、焼土なども検出されている。

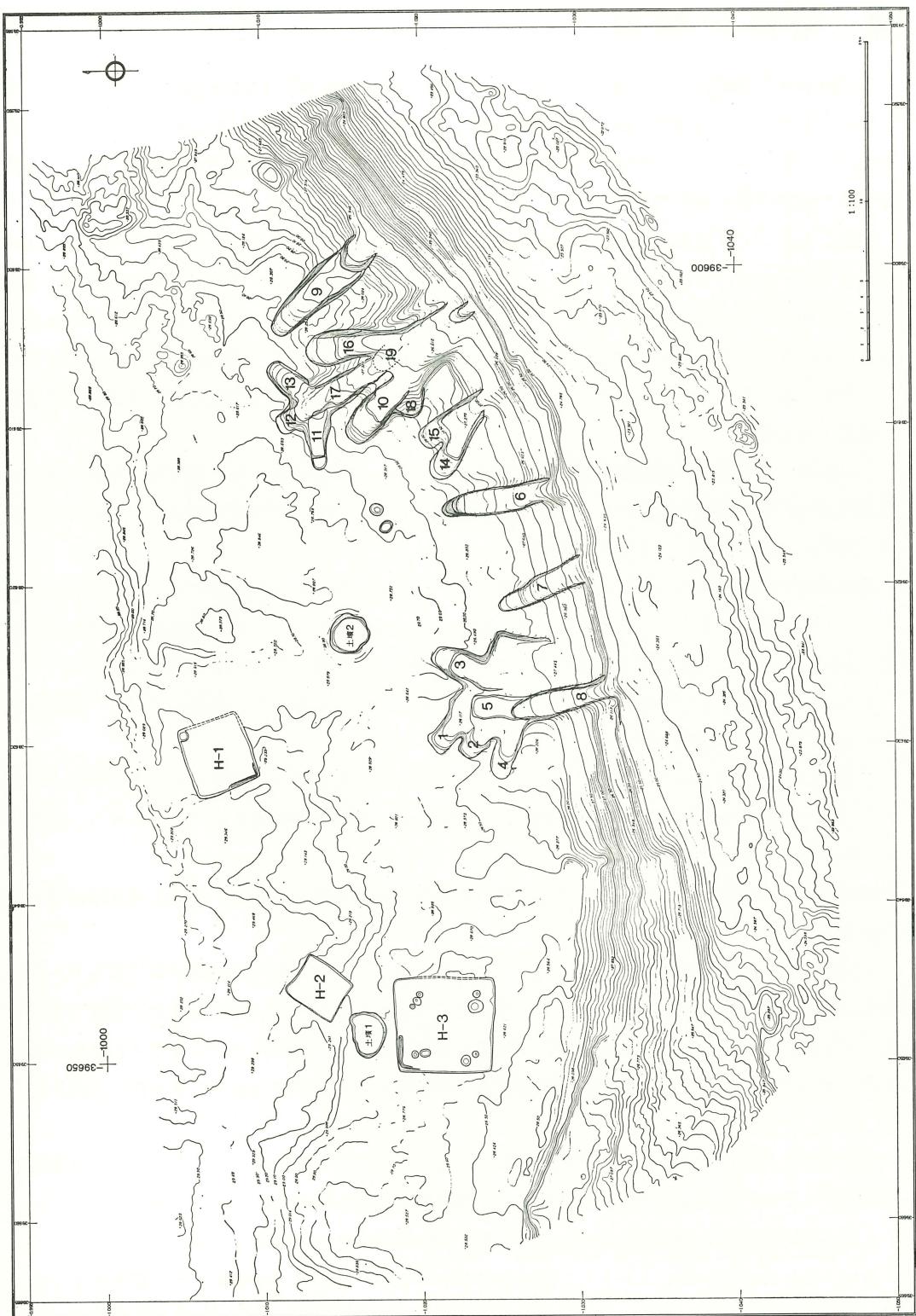
縄文時代早期の集石は2基あり、うち1基は野島期のものと考えられる。他の1基もほぼ同時期に属するものと考えられる。

本窓跡で検出された遺構、遺物は上述したとおりである。それら個々の概要は後述するが、窓跡関係の遺構は狭い範囲内に集中している。周辺をくまなく精査したが、他に関連する遺構は確認されていない。したがって、個々の遺構はそれぞれが狭い空間内で完結していると考えられる。各遺構間の関係については後述するが、須恵器窓跡と埴輪窓跡との直接的な結びつきは無いと考えている。

比企地方における古墳時代の須恵器窓跡についてはⅡ章で略述しておいた。今後、在地産須恵器の検討がすすめられてゆく中で、本窓跡出土の須恵器は重要な役割をはたすであろう。

また、埴輪窓跡と工房跡についても、新たな問題を提示したと考えている。

なお、第4図中に土壙1, 2として図示してあるものは、当初粘土採掘場と考え調査をすすめたが、調査の結果否定的な結論に達した。きわめて新しい時期の攪乱と考えられる。したがって本報告では遺構と認めず、説明も加えていない。しかし、化学分析の試料として両者の基底から粘土を

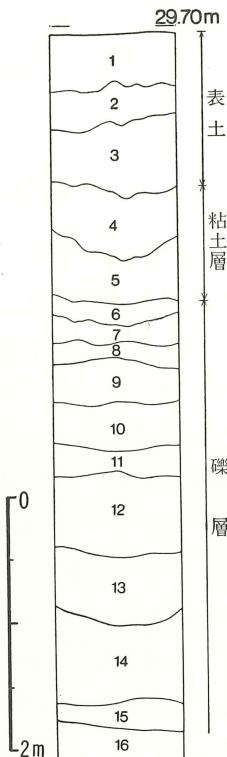


第4図 窯跡群全測図

採取している（付篇参照）。そこで、粘土採取地点として両者の位置を明示する意味で、便宜的に調査時（粘土採取時）の名称をそのまま用いて図示した。

また、本窯跡群の乗る支丘の土層図を第5図に示した。各層位は以下のとおりである。

- 第1層 暗褐色土（ボソボソしている）
- 第2層 暗褐色土
- 第3層 やや白味をおびた褐色土
- 第4層 淡白色粘土（鉄分、小石を僅かに含む）
- 第5層 淡白色粘土（4層より鉄分多く、小石少ない）
- 第6層 淡白色粘土（礫を多く含む）
- 第7層 やや赤味をおびた粘土
- 第8層 鉄分を含み、7層より赤い粘土
- 第9層 砂質の礫層、8層より黒味をおびる
- 第10層 砂質の礫層、9層より白い
- 第11層 砂質の礫層、10層より茶色をおびる
- 第12層 砂質の礫層
- 第13層 大きな石を含む礫層
- 第14層 黒い小石を含む礫層
- 第15層 14層と同じだがやや赤い
- 第16層 鉄分の多い赤味をおびた礫層



第5図 標準土層図

第5図に示した土層図にしたがって説明を加えてきたが、本図は1ヶ所で得られた観察結果ではない。当初、6号窯跡の北約10mの地点に2m×2mのグリットを設け土層観察を行なったが、礫層を掘りすすむ段階で周囲の壁が崩れ落ち、当地点での観察は危険を伴ない、事実上不可能となつた。そこで、8号窯跡の西約10mの斜面部に新たなグリットを設け観察を行なつた。第5図に示した標準土層図は両地点の土層図をつなぎ合わせて作成したものである。

第1層は一般にいう表土層で、第2、3層はいわゆるローム層である。縄文時代の集石遺構は第2層中に在り、該期の遺物も同層中に包含されている。

第4、5層は礫層の上に乗る粘土層で、化学分析試料として採取したのは両層の粘土層である。

また、平坦面に構築された埴輪窯跡は第層下部から第層上部までを掘りこんでいる。

第6層以下が礫層で、物見山礫層と呼ばれている。2基の須恵器窯跡はこの礫層を掘りこんで窯されている。

（水村孝行）

IV 遺構と出土遺物

1 須恵器窯跡と出土遺物

本窯跡群発見の端緒となった1号～5号窯が埴輪窯跡であり、出土した遺物もすべて円筒あるいは形象埴輪等であったことから、調査に入った当初は須恵器窯跡の存在に留意していなかった。しかし、斜面下の灰原を確認するために設けたグリットから須恵器が出土したことから須恵器窯跡の存在が予想されるに至った。そこで斜面にトレンチを設けて掘り下げたところ、3基の窯跡を確認した。3基の窯跡は5m～6mの間隔をあけて並列し、等高線に直交するかたちで構築されていた。東から順に6号、7号、8号窯と命名した(第4図)。調査の結果、7号窯は埴輪窯跡であり、残る6号と8号窯が須恵器窯跡であることが判明した。両窯跡は略12mの間隔をおいて検出された。規模については大差ないが、構造については若干の相違がみられた。また、両者とも礫層を掘りこんで構築されている。このことについては後述する。以下、各窯跡について説明を加える。

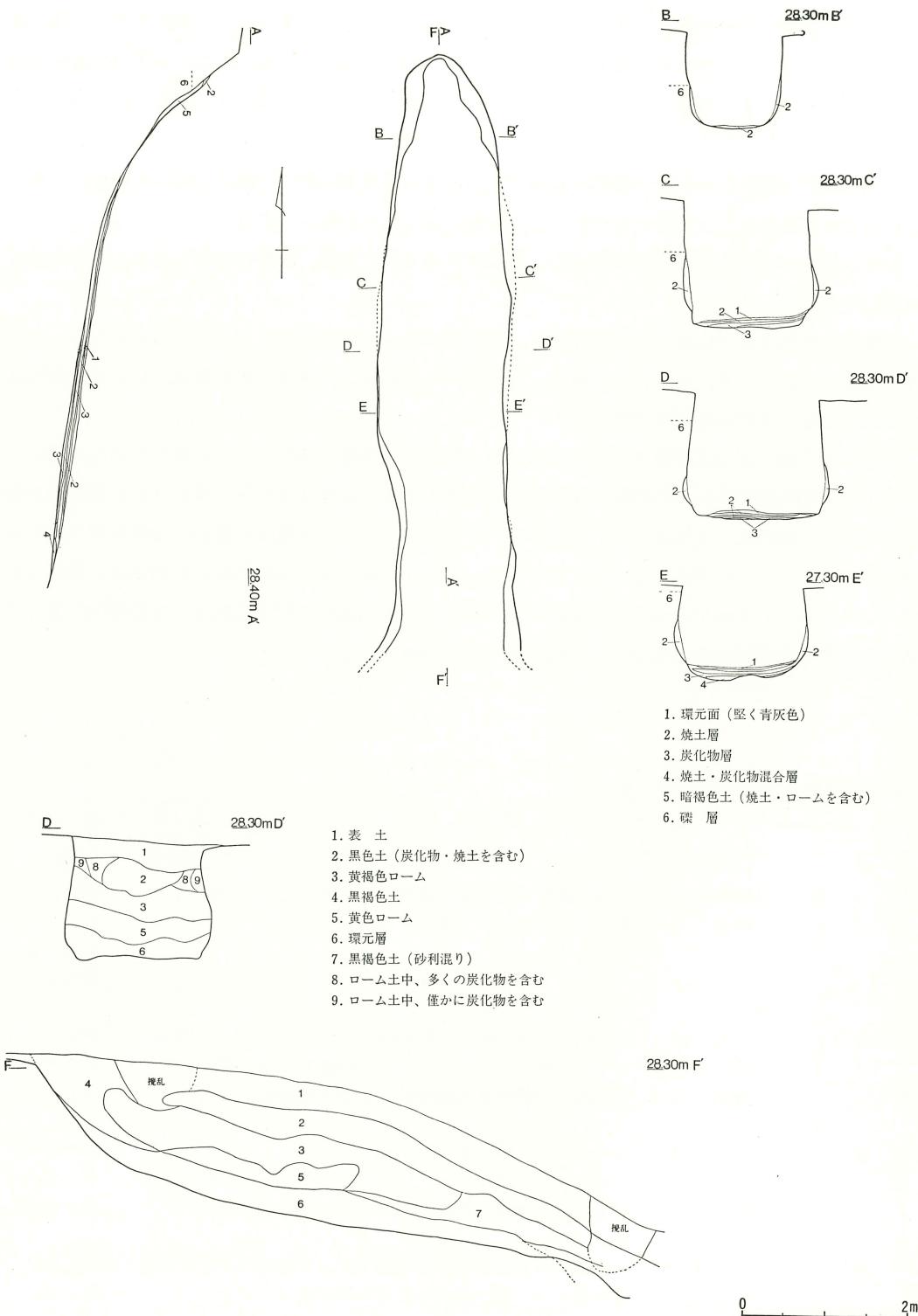
(1) 6号窯跡(第6図)

本窯跡群のほぼ中央に位置し、28度～30度の傾斜をもつ南斜面に構築されている。東側には埴輪窯跡である14号、15号窯が、西には7号窯がある。いわゆる半地下式無段登窯で、物見山礫層を掘り込んで築かれており側壁、床面には中、小の礫が露出している(写真図版3)。したがって、築窯に際しては、当初から相当困難な作業であったと考えられる。窯体の整形にあたっては、スサ入りの粘土で入念に仕上げられたものと思われ、またその痕跡も認められる。窯体は斜面の上部に構築され、煙道部は本来平坦面であった部分に位置している。

さて、本窯跡は全長が水平距離で6.65m、焚口部と煙道部を結ぶ斜距離が7.10mを測る。燃焼部から焼成部にかけて側壁はほぼ平行するものの、最大幅は焼成部中位にあり、煙道部、焚口部でやや幅を減ずる。焼成部での最大幅は1.50m、煙道部で80cmを測る。床面及び側壁は熱を受け赤色化した礫が露出し、きわめて軟弱である。特に側壁にその傾向が強く(写真図版3)、本来オーバーハングしていたと思われる部分も、掘りすすむ段階で礫がくずれ落ちることもあった。横断面をみると側壁はほぼ垂直に掘りこまれているようであるが、床面に近い部分がわずかに袋状を呈しており、焼成部の側壁はやや丸味を帯び弧をえがいて天井部に接続していた可能性がある。

また縦断面をみると、床面は焚口部から焼成部中位にかけて約10度の傾斜をもって直線的に伸び、焼成部上位に至り約30度に角度を増し、煙道部はさらに急傾斜となって地上に達する。焼成部の傾斜が約10度を測り、斜面よりも勾配がゆるく、しかも困難な作業ながら礫層をアーチ状に掘りこんでいることなどを考え合わせると、窯体の空間をできるだけ広く確保しようという意図が窺える。これは後述する8号窯とは若干異なるところである。出土遺物の器種構成からも両者間の相違が看取できる。

また、僅かではあるが床面に密着あるいはくいこんだ状態で甕の破片が出土している。これは軟弱な床面を補強するために、粘土と共に貼りこまれたものか、焼台として再利用されたものなのかな



第6図 6号窯跡

不明である。

天井部は崩壊しており現存しない。しかし、側壁の残存状態、他遺跡の状況等からゆるい弧を描くアーチ状を呈していたものと考えられる。天井の一部は窯体内に認められる。窯体内の遺物はほとんど落下した天井部の直下から出土する。覆土は下層が砂利で、上層がローム層とに大別できる。

前庭部は焚口部から約20度の傾斜をもってテラス状の平坦面に続く。斜面の裾部をわずかに削って地形を整形していると考えられるが、部分的なものであり不明瞭である。

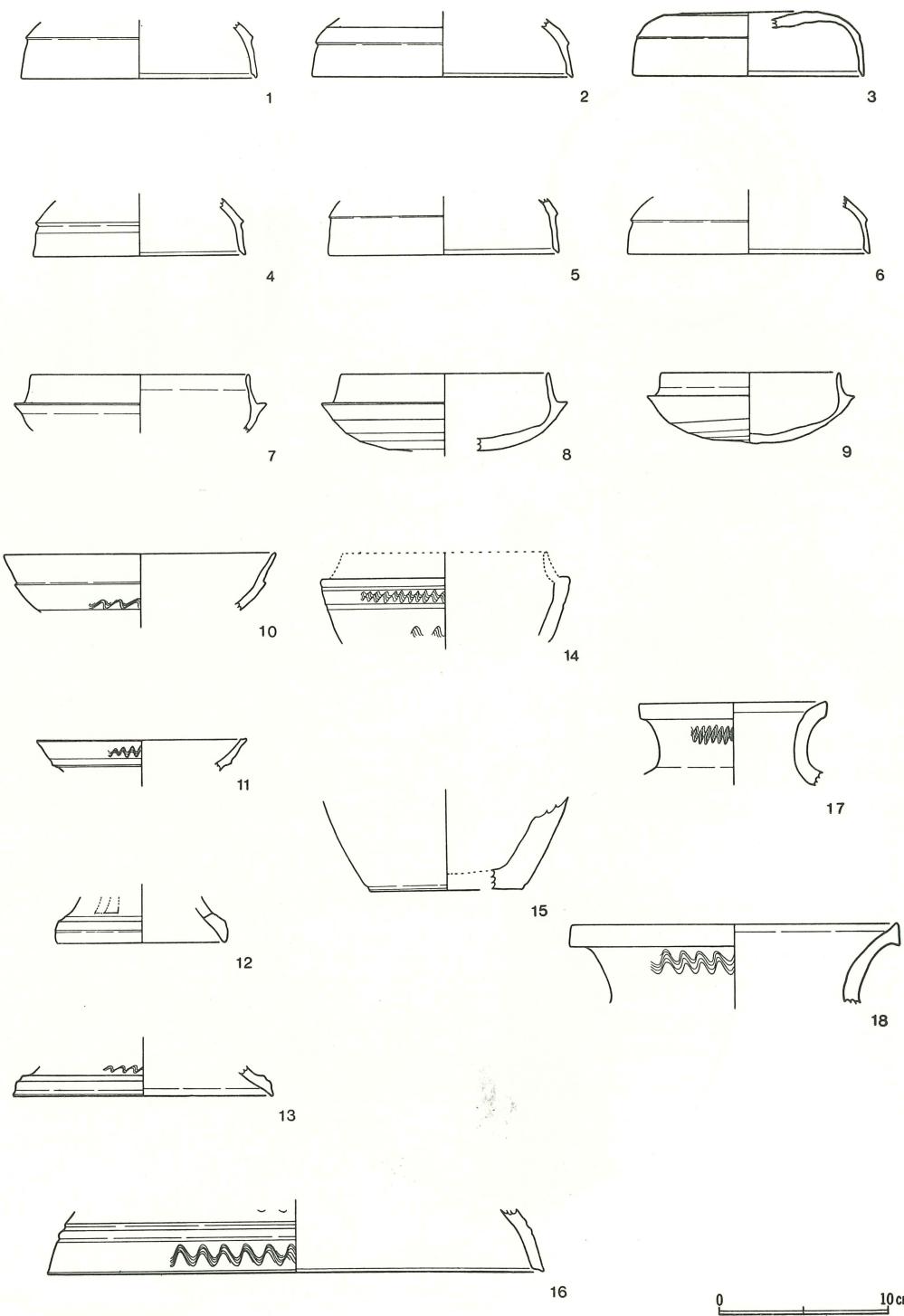
灰原は焚口部を中心に扇状に広がるが、末端部にゆくほど色調、層厚とも薄くなる。灰原からの遺物は少ない。

窯体内の遺物は8号窯跡に比べ少ないが、小砂利に混って床面直上、もしくはわずかに浮いた状態で出土する。壺、蓋、高壺、甕、器台、提瓶等がみられるが、隣接する8号窯からの出土資料に比べ、甕、器台等の大形製品が目立つ。

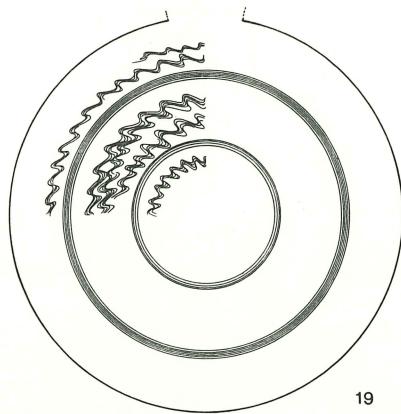
また、本窯跡の周辺及び覆土上層から若干の土師器片、埴輪片が出土している。これらの遺物は隣接する埴輪窯跡あるいは住居跡（工房跡）と関連するものと考えられる。つまり、本窯跡が放棄された後まだ窪地として残されている段階で、埴輪窯跡もしくは住居跡を構築する際の排土、不良製品の捨て場となった可能性もある。このことは後述する8号窯と埴輪窯跡との切り合い関係とも絡んでくるが、わずかではあるが須恵器窯跡の操業の方が大部分の埴輪窯跡よりも時間的に先行するということの傍証ともなろうか。主軸はN—23°—Wにとる。

6号窯跡出土遺物(第7図～9図)

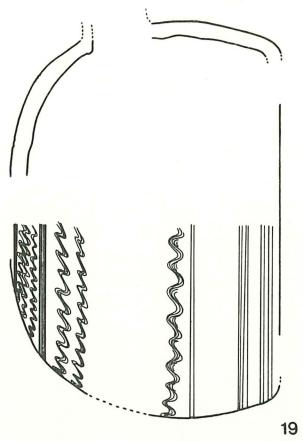
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	1	口径 14,0 口縁高 2,4 残高 3,4	口縁部はわずかに開き沈みに下る。端部にはゆるい沈線が走り、段をもつ。天井部との境にある稜は鈍い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ともヨコナデ。	小破片 胎土細かい。 焼成不良。 暗灰色。
蓋	2	口径 15,4 口縁高 2,0 残高 3,5	口縁部は外方に開き、端部はわずかに段をもつ。 天井部との境にある稜は鈍い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口縁部は内外面ヨコナデ。 天井部回転ヘラ削り。	砂粒を含む。 焼成不良。
蓋	3	口径 13,6 器高 3,8 口縁高 2,3	口縁部はわずかに開き、端部には内傾する段をもつ。口縁部と天井部の境に沈線がまわる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の多くは回転ヘラ削り 他の部分はヨコナデ。	焼成良好 8号窯No. 41と接合
蓋	4	口径 12,5 口縁高 2,0 残高 3,3	口縁部はわずかに開き、端部丸味をもつ。鈍い稜の下に沈線がまわる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	白色の砂粒を含む。 暗灰色。



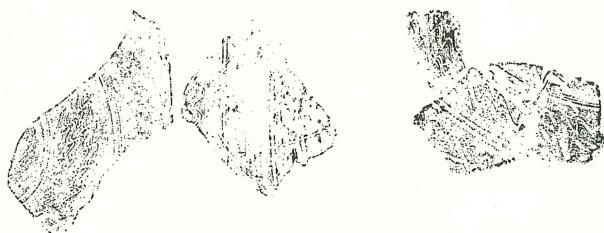
第7図 6号窯跡出土遺物(1)



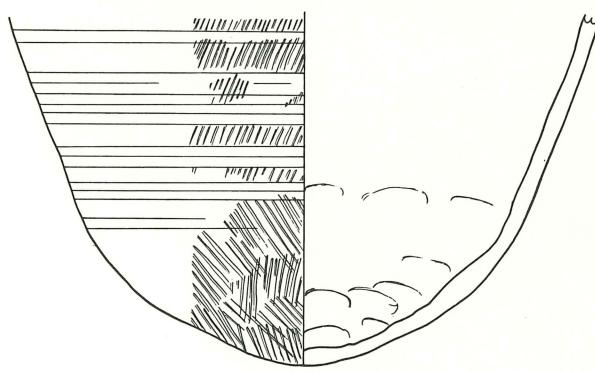
19



19



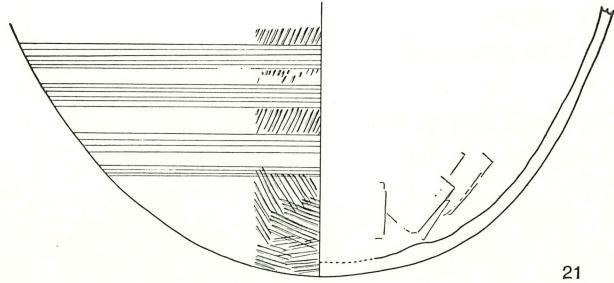
19



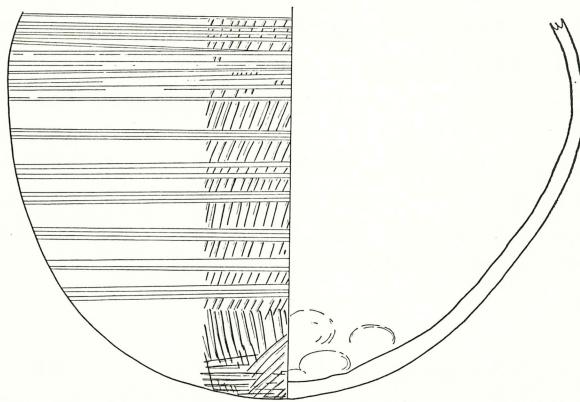
20

0 10cm

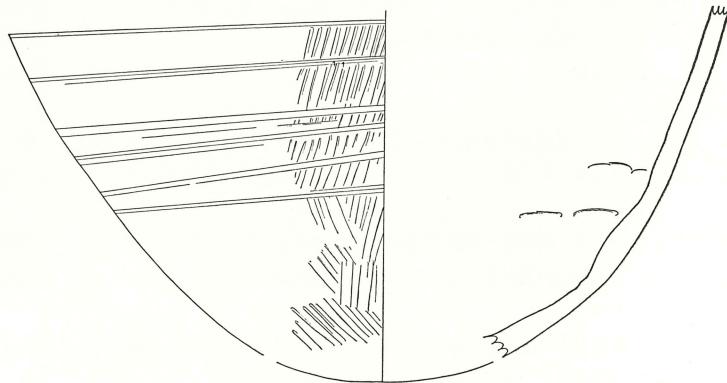
第8図 6号窯跡出土遺物(2)



21



22



23

0 10cm

第9図 6号窯跡出土遺物 (3)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	5	口径 13,6 口縁高 2,3 残高 3,3	口縁部わずかに開き、端部は細く仕上げる。 稜は鈍い。 天井部回転ヘラ削り。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	胎土細かい、 焼成良好。 内外面灰色。
蓋	6	口径 14,2 口縁高 2,0 残高 3,4	口縁部は下外方に開く。 稜はきわめて鈍い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ともヨコナデ。	焼成不良、生焼け。 内外面黄灰色
坏	7	口径 12,8 受部径14,9 残高 3,3	たちあがりはやや内傾し、端部は丸く仕上げる。 受部は水平にのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	焼成不良、生焼け。 内外面黄灰色
坏	8	口径 12,3 受部径14,5 器高 4,6	たちあがりは内傾し、端部は丸い 受部は水平にのび、端部は鈍い。 底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底体部外面の%は深いケズリの回転ヘラ削り。他はヨコナデ。 底部内面は風化。	胎土きわめて良好。 焼成不良、生焼けで軟質。
坏	9	口径 10,5 受部径12,2 器高 4,2 たちあがり 高 1,3	たちあがりわずかに内傾、端部は丸い。 受部は水平にのび、端部丸い。 底体部やや凹凸目立つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底体部外面の%弱は回転ヘラ削り 他はヨコナデ。内面底部ナデ、他はヨコナデ。	胎土良好、 焼成不良、 内面黒色、外 面黄灰色、 ほぼ完形。
無蓋高 坏	10	口径 16,2 残高 3,3	体部、口縁部とも上外方にのび、 端部は丸い。体部と口縁部の境に 稜をもつ。4本単位の波状文。	マキアゲ、ミズビキ成形。 波状文より下半は回転ヘラ削り。 他はヨコナデ。	胎土、焼成と も良好。 内外面灰色。
聰	11	口径 12,4 残高 1,9	口縁部は大きく開き、上外方への びる。端部内面はゆるい凹面をもつ。 口縁部に4本単位の櫛描波状文をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ともヨコナデ。	胎土、焼成と も良好。 内外面とも暗 灰色。
高 坏 (脚)	12	底径 10,0 残高 2,7	スカシは長方形と思われるが、何 方に開くか不明。	マキアゲ、ミズビキ成形。 裾部内外面ヨコナデ。	胎土、焼成と も良好。
高 坏 (脚)	13	底径 15,4 残高 1,8	有蓋高・の脚部、裾部で段をもつ 3本単位の波状文を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形 内外面ヨコナデ。	焼成不良。 床面直上。
有蓋台 付壺	14	径 14,8 残高 3,9	体部上位に1条の沈線がめぐる。 器厚は厚く、端部内側にわれ口があるで、破線で示したように、 たちあがりがあったかもしれない 沈線のすぐ上に5本の櫛描波状文 がまわる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内面ヨコナデ。	焼成不良。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	15	底径 8,9 残高 5,4	底部でわずかに段をもつ。厚手。	胴部外面ケズリ、内面ナデ。 底部未調整。	胎土、焼成とも良好。
器台(脚)	16	底径 29,6 残高 3,7	小片のため詳細は不明。 2条の沈線を挟んで上下に櫛描波状文。下段は6本単位。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	焼成不良。
壺	17	口径 11,2 残高 4,2	口頸部の小破片、外弯して上方に伸び、口縁直下に6本の櫛描波状文。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	胎土、焼成良好。 内外面灰色
甕	18	口径 19,3 残高 4,6	口頸部の小破片、外反して上方に伸び、端部で外方へ屈曲気味になる。口縁直下に5本の櫛描波状文。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	焼成不良。 床面直上。
提瓶	19		体部は円形で平ら、口頸部を欠く破片からの複元なので、全容は知りえない。 体部の片面及び側面に、沈線と波状文を交互にめぐらす。 肩部には2個1対の把手が付されていたと思われるが欠損している。	内面にシボリ目をわずかに残す。 他はヨコナデ。	焼成不良、生焼け。 黄灰色～灰色
甕	20	残高 18,6	胴上半部を欠く。丸底に近い。	胴部～底部は全面タタキの後、浅い平行沈線、底部付近はタタキ不規則。 胴部内面スリ消し。底部にはアテ具痕を残す。底部薄い。	胎土良好、 焼成甘く軟質。
甕	21	残高 13,5	胴部から底部への移行スムーズ。 丸底。	胴部外面タタキの後浅い沈線をめぐらす。底部はタタキをそのまま残す。胴部内面スリ消し。底部にはアテ具痕を残す。	胎土良、焼成不良。 内外面灰色 床面直上。
甕	22	胴部径30,3 残高 20,2	胴上半、口頸部を欠く。 胴部ほぼ中央に最大径かくると思われる。球体状をなす。 丸底。	外面全面にタタキ、後浅い沈線をら線状にめぐらす。 底部タタキをそのまま残す。 内面はアテ具痕を丁寧にスリ消す。	焼成不良。 床直と灰原の 破片が接合。 内外面暗灰色
甕	23	残高 18,9	胴上半、底部を欠く。	外面タタキ後浅い沈線。 内面部分的にアテ具痕が残るが、他はスリ消し。	焼成不良。

(2) 8号窯跡 (第10図)

6号窯の西約12mの位置にある。すぐ北側には5基の埴輪窯跡が群在する。6号窯と同様、南斜面の等高線に直交するかたちで構築されている。斜面の上半部分を斜面の傾斜に沿って掘りこんだ半地下式無段登窯である。側壁はほぼ平行し、焚口部で幅の狭くなる形態で、須恵器窯跡としては一般的なものであろう。

さて本窯跡の規模であるが、全長は水平距離で6.70m、煙道部と焚口部を結ぶ斜距離は7.09mを測る。最大幅は焼成部中位にあり1.80m、焚口部で1.40m、煙道部で約70cmを測り、規模は6号窯と大差ない。窯体は礫層を掘り込んでおり、側壁、床面が脆弱なのは8号窯と同じである。横断面をみても側壁が垂直かもしくは外側に開き気味に立ち上る。やはり、小砂利を多く含む礫層を掘り込んで築窯することは困難な作業であったのだろう。床面は燃焼部と焼成部との境できわめてゆるい段をもつが、焚口部から煙道部までほとんど直線的に伸びる。床面の傾斜は約19度、煙道部の奥壁は直立する。

天井部はすべて崩れ落ちており現存しない。天井部の一部は窯体内に認められ、遺物はその直下から小礫に混って出土する。出土状態は6号窯と同じである。このことは、操業途中で天井部がくずれ落ちた可能性を示唆するものである。窯体内からの出土量の豊富さ、生焼け気味のものが多い点などもそれを裏づけようか。しかし断定する材料を欠いている。天井部をささえる側壁が礫層であるということは、作業中にアクシデントが発生する要因を多分に含んでいる。

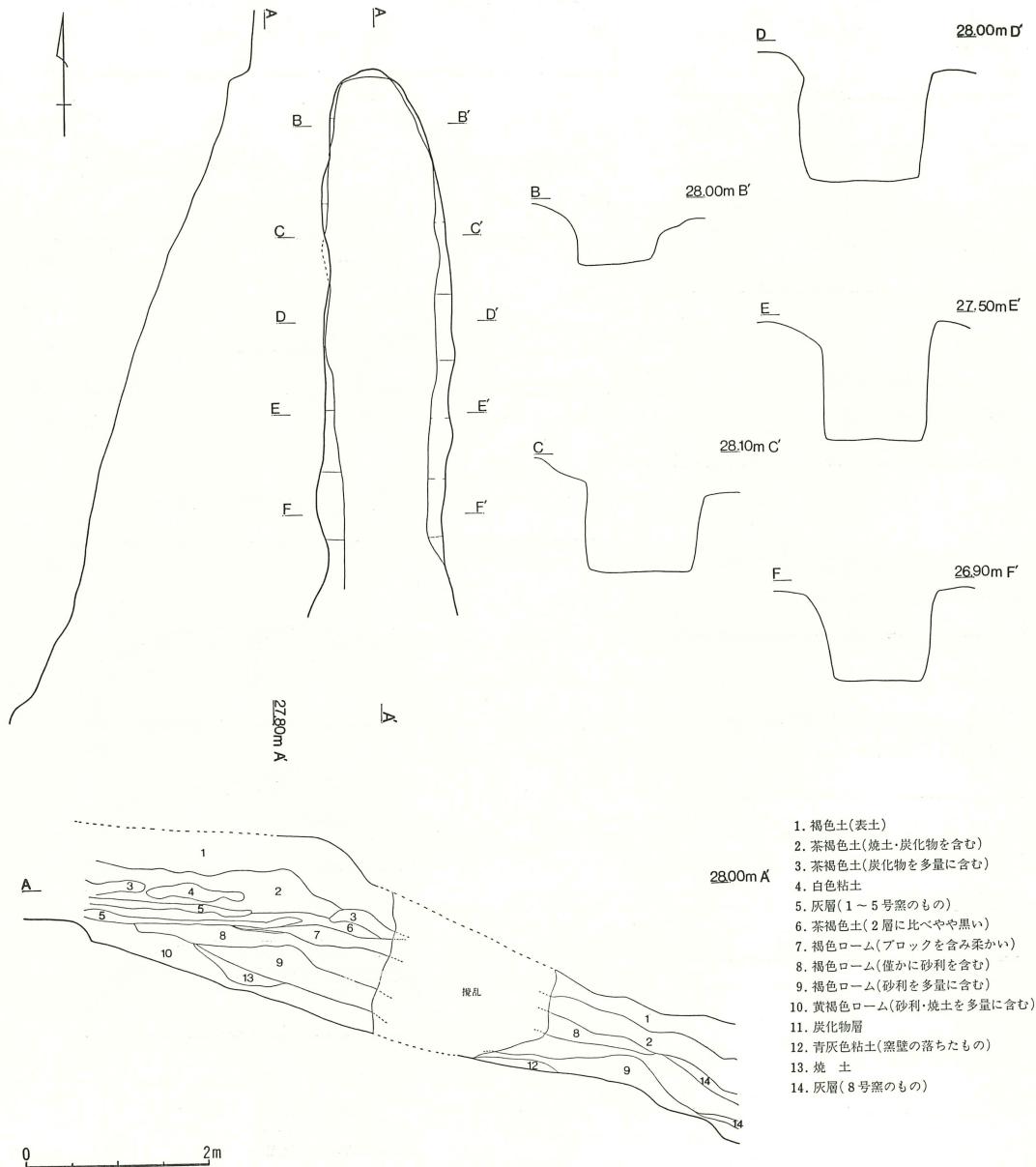
前庭部についても6号窯と同じで、約20度の傾斜をもってテラスへと続く。斜面の裾部を削って灰のかき出し部をつくり出している。

灰原は扇状に広がるが、末端部はかなり広範囲に亘る。遺物は多くない。東側にある7号窯と灰原が重なるが、新旧関係の把握はできなかった。

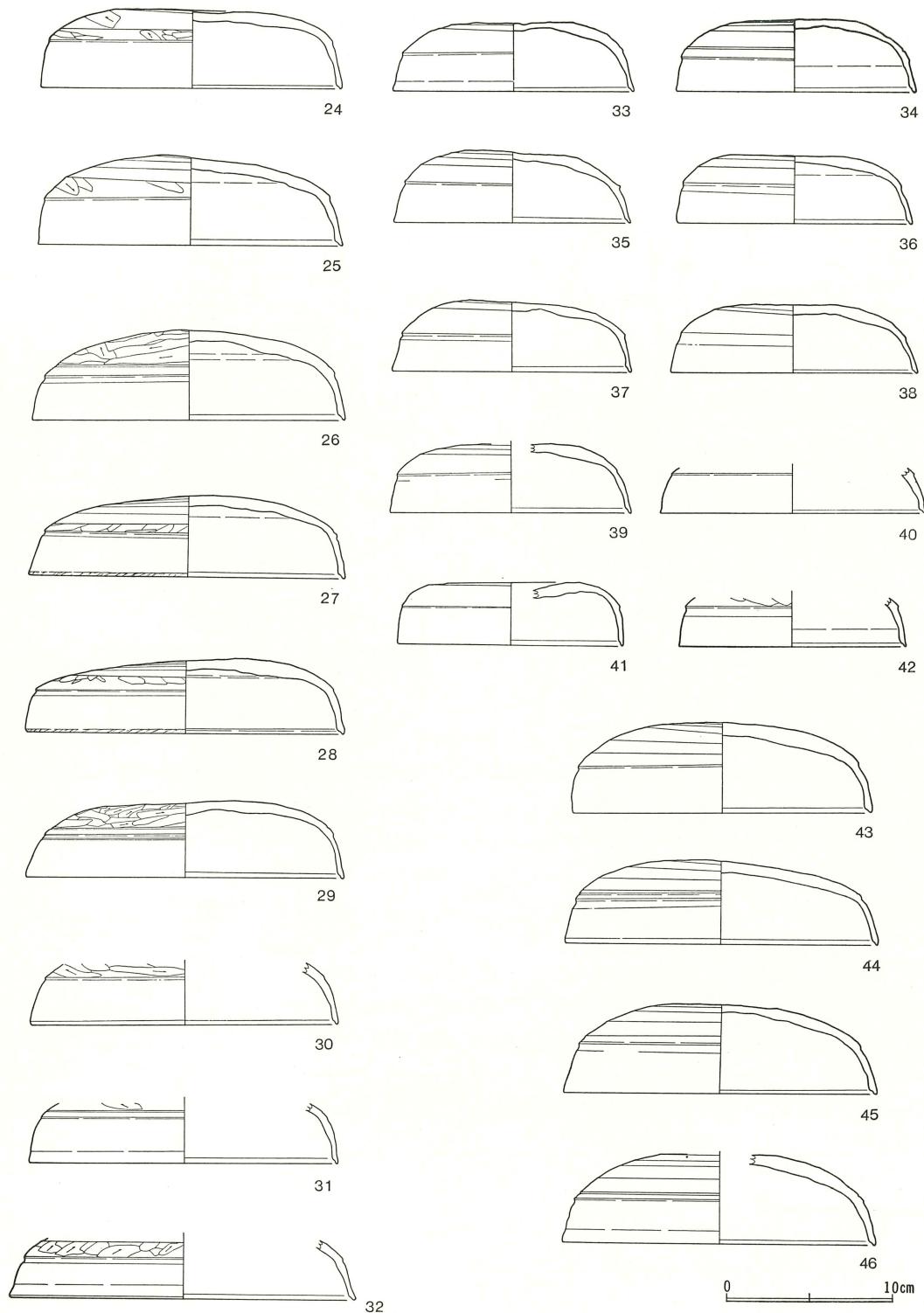
遺物は質量共に豊富で、蓋が最も多く他に壺、高壺、甕、壺、甕等がある。

また、本窯跡の焼成部上位から煙道部にかけての部分は1号～5号窯の灰原と重複している。縦断面土層図をみると、焼成部上位から煙道部にかけて薄い灰層が2枚認められる。しかもその灰層は窯体の傾斜に沿っているのではなく、1号～5号窯灰原部の床面と平行しており、灰層直下のローム層は、あたかも床面のように水平に堆積している。この状態は自然堆積とは考えられず、意識的にロームを用いて8号窯の窪地を埋めたものと考えられる。その行為は明らかに、1号～5号窯の灰及び不良製品を投棄するための空間を作り出したものである。この灰原部分の空間を確保する作業は、5基のうち最も古い4号窯の操業時には完成されていたと考えられる。

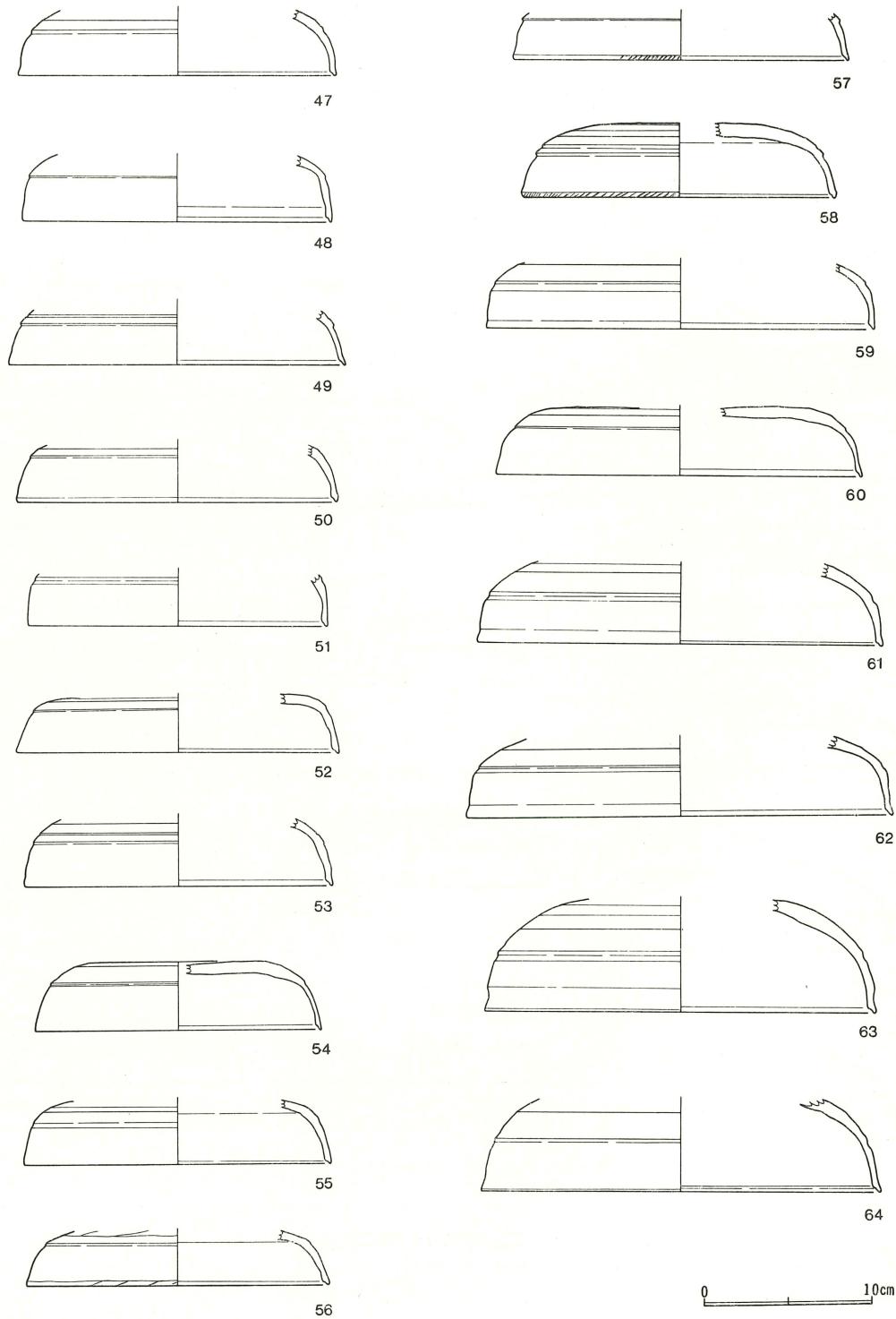
したがって、1号～5号窯と8号窯に関しては、後者の方が時間的に先行することは明白である。



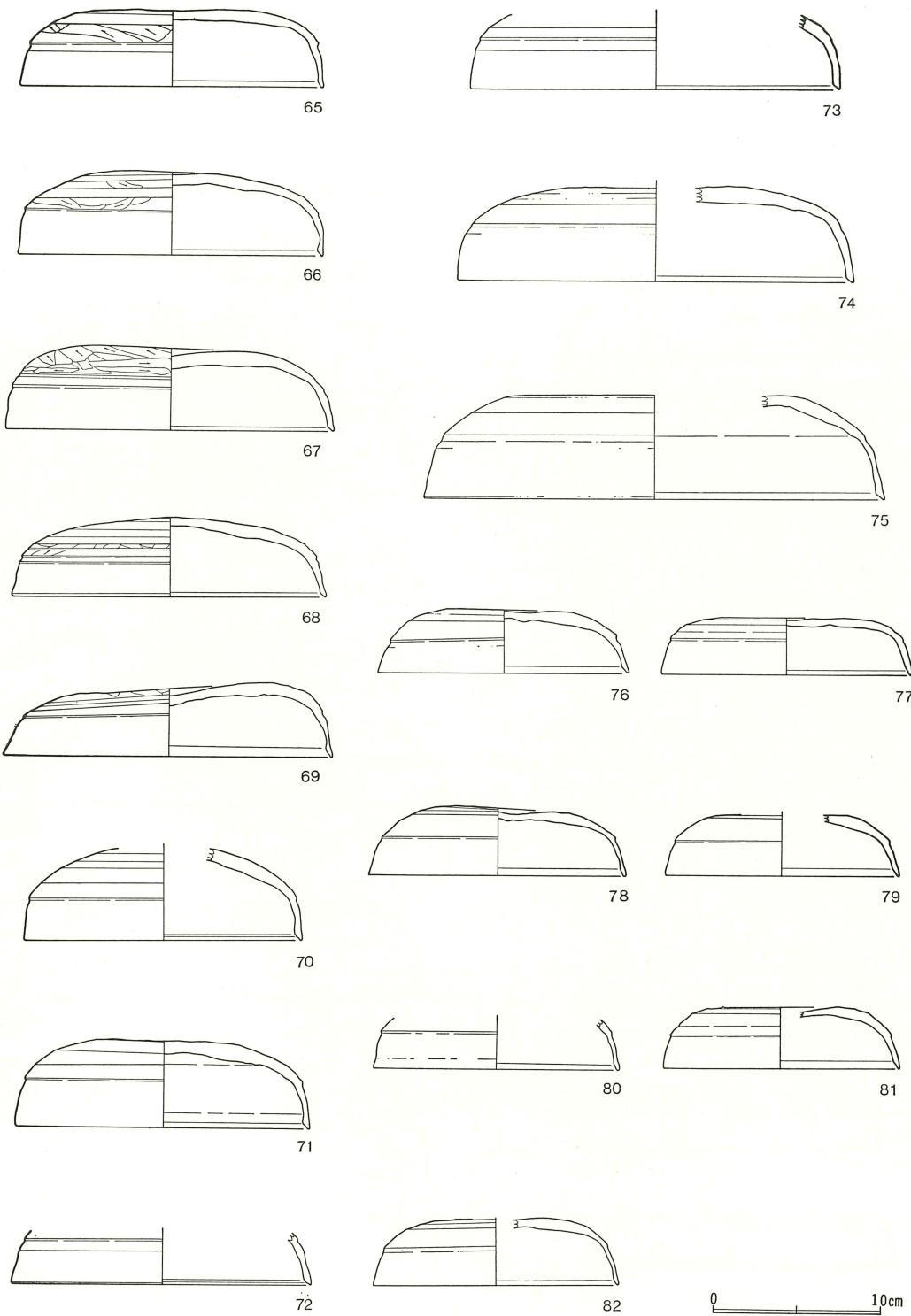
第10図 8号窯跡



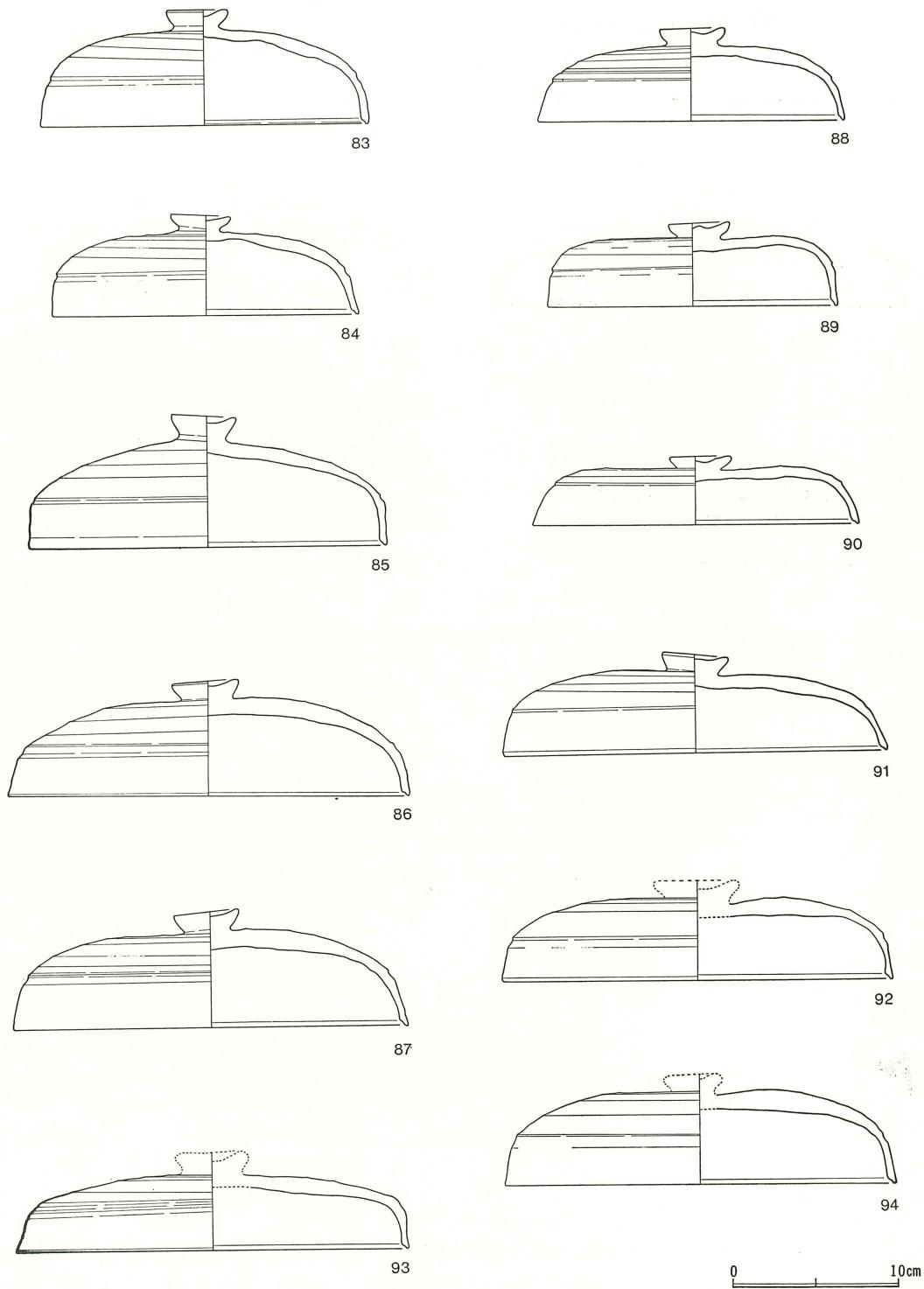
第11図 8号窯跡出土遺物 (1)



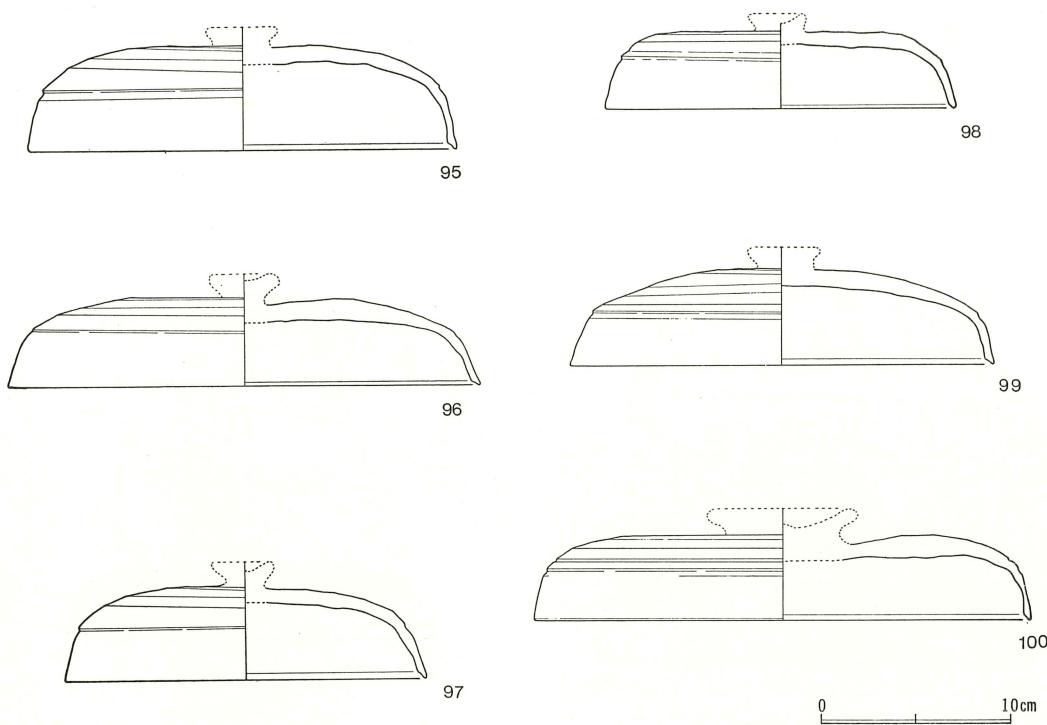
第12図 8号窯跡出土遺物 (2)



第13図 8号窯跡出土遺物 (3)



第14図 8号窯跡出土遺物 (4)



第15図 8号窯出土遺物(5)

8号窯跡出土遺物(第11図～18図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	24	口径 18.1 器高 4.8 口縁高 2.8	口縁はやや開き気味で下外方へ下る。端部内側に凹線がめぐり段をもつ。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部は手持ちヘラ削りの後回転ヘラ削り。口縁部外面ヨコナデ。内面は口縁部～天井部 $\frac{1}{2}$ ヨコナデ他はナデ。	胎土、焼成良好。 ロクロ逆時計回り 床面直上
蓋	25	口径 18.2 器高 5.2 口縁高 2.8	口縁は下外方に下り、端部はきわめてゆるい内傾する段をもつ。稜は鈍い。 天井部はやや丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部は不定方向の手持ちヘラ削りの後回転ヘラ削り。 口縁部内外面ヨコナデ。 天井部内面広いナデ。	胎土、焼成とも良好。 内外面暗灰色 完形。
蓋	26	口径 18.8 器高 5.4 口縁高 2.8	口縁部は下外方に下り開く、端部は内傾する段をもつ。 沈線をめぐらし、きわめて鈍い稜を作出する。 天井は丸味をおびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 丁寧な手持ヘラ削り内面はナデ。 口縁部内外面ヨコナデ。	胎土、焼成良好。 内外面灰色。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	27	口径 19.0 器高 4.0 口縁高 2.7	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段を有する。稜の上下に2条の沈線がめぐる。天井部は低く、やや丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面手持ちヘラ削り後回転ヘラ削り。内面ナデ及ヨコナデ。口縁部内外面ともヨコナデ	胎土、焼成良好。内外面灰色。床面直上。
蓋	28	口径 19.1 器高 4.4 口縁高 2.6	口縁部は下外方に下り、端部には内傾する段をもつ。稜は形骸化し、沈線を1条めぐらして稜をつくり出す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は手持ちヘラ削りの後回転ヘラ削り、内面はナデ。口縁部内外面ヨコナデ。ヘラ削りは丁寧。	焼成良好。ヘラ削りの方向は逆時計回り。
蓋	29	口径 19.2 器高 4.4 口縁高 2.5	口縁部は下外方に下る。端部はきわめてゆるい内傾する段をもつ。稜は2条の沈線でつくり出しが、形骸化している。天井は低く、丸味をおびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面の $\frac{1}{2}$ は手持ちヘラ削り内面は中心部分がナデ、他はヨコナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	胎土、焼成良好。若干焼ヒズミ有り
蓋	30	口径 18.5 口縁高 2.9 残高 3.7	口縁部は下外方に下り、端部には内傾する段をもつ。稜は1条の沈線でつくり出す。天井部欠損	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部は大部分が欠損するが、手持ちヘラ削り痕が残る。 口縁部内外面ともヨコナデ	胎土、焼成とも良好。床面直上。
蓋	31	口径 18.5 口縁高 2.8 残高 3.6	口縁部は下外方に下り、端部には内傾するゆるい段をもつ。稜は形骸化し、2条の沈線がめぐる。 天井部は大部分が欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面手持ちヘラ削りの後回転ヘラ削り。 口縁部内外面ヨコナデ。	胎土、焼成良好。床面直上小破片
蓋	32	口径 20.8 口縁高 2.5 残高 3.7	口縁部は下外方に大きく開く端部はわずかに内傾する段をもつ。稜は1条の沈線で作出され、形骸化している。 天井部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は手持ちヘラ削りの後回転ヘラ削り。 口縁部内外面ヨコナデ。	胎土、焼成良好。回転ヘラ削り方向逆時計回り。
蓋	33	口径 14.5 器高 4.1 口縁高 2.3	口縁部は下外方に下り、端部はゆるく内傾する段をもつ。稜は1条の沈線をめぐらして作出。天井部は低く、平らに近いが凹凸目立つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り、他はヨコナデ。内面中心部ナデ、他はヨコナデ口縁部内外面ヨコナデ。	焼成不良回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	34	口径 14.3 器高 4.3 口縁高 2.1	口縁部は下外方に下り薄手。端部は内傾する段をもつ。稜は鈍く、形骸化。天井部は低く、やや凹凸目立つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り、他はヨコナデ。内面中心部はナデ、他はヨコナデ、口縁部内外面ヨコナデ	焼成不良回転ヘラ削り逆時計回り。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	35	口径 14.2 器高 4.3 口縁高 2.5	口縁部は下外方に大きく開く 端部は薄手で、内傾するゆるい段をもつ。稜は鈍い。天井部は低く、やや丸味をおびる	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面%回転ヘラ削り、 他はヨコナデ。中心部ナデ。 口縁部内外面ヨコナデ。	焼成、胎土とも良好。回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	36	口径 14.2 器高 4.1 口縁高 2.4	口縁部は下外方に下り薄手、 端部は内傾するゆるい段をもつ。稜はきわめて鈍い。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面%回転ヘラ削り。 他はヨコナデ。内面中心部ナデ、他はヨコナデ口縁部内外面ヨコナデ。	焼成不良 回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	37	口径 14.4 器高 4.2 口縁高 2.3	口縁部は下外方に下り薄手、 端部は内傾するゆるい段をもつ。稜はきわめて鈍い。 天井部は低く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ形成。 天井部外面%回転ヘラ削り、 他はヨコナデ。内面中心部ナデ、他はヨコナデ口縁部内外面ヨコナデ。	焼成良好 回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	38	口径 14.8 器高 4.1 口縁高 2.4	口縁部は下外方に下り薄手、 端部は内傾するゆるい段をもつ。 稜は形骸化しており鈍い。 天井部は低く、平ら	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面%回転ヘラ削り。 内面中心部ナデ。他はすべてヨコナデ。	焼成良好 回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	39	口径 14.4 器高 4.1 口縁高 2.3	口縁部は下外方に下り薄手、 端部は内傾するゆるい段をもつ。稜は沈線をまわしてつくり出し、きわめて鈍い。 天井部は低く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面%回転ヘラ削り。 内面中心部ナデ、他はすべてヨコナデ。	焼成不良 生焼け。 回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	40	口径 15.9 口縁高 2.4 残高 2.8	天井部の大部分を欠く。 口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は1条の沈線をめぐらせて作り出す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口縁部内外面ヨコナデ。	
蓋	41	口径 13.6 器高 3.8 口縁高 2.3	口縁部は垂直に近く下るが、 わずかに外方に開く。端部内傾する段をもつ。稜は1条の沈線をめぐらせて作り出す、鈍い。天井部は低い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面%回転ヘラ削り、 内面中心部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成良好。 回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	42	口径 13.7 口縁高 2.4 残高 3.0	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は鈍く沈線をめぐらせて作り出す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面に手持ちヘラ削り状の痕跡があるが風化のために不明瞭。 口縁部内外面ヨコナデ。	胎土、焼成良好。 内外面暗灰色小破片。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	43	口径 17.9 器高 5.5 口縁高	口縁部は下外方に下り薄手、端部は内傾する段をもつ。天井部厚手。稜は鈍い。天井部はやや高く、丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面に手持ちヘラ削りを施した後回転ヘラ削り内面中心部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成良好。内外面灰色。
蓋	44	口径 18.8 器高 5.0 口縁高 2.6	口縁部は下外方に下り薄手、端部は内傾するゆるい段をもつが平面に近い。稜は鈍く、2条の沈線を作り出す。天井部は低く、丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面%回転ヘラ削り、内面中心部ナデ、他はすべてヨコナデ。	焼成不良生焼け。内外面黄灰色回転ヘラ削り逆時計回
蓋	45	口径 18.9 器高 5.3 口縁高 2.9	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜はきわめて鈍い。 天井部は高く、丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面%丁寧な回転ヘラ削り。内面、口縁部内外面ヨコナデ。	胎土、焼成良好。回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	46	口径 18.8 器高 5.4 口縁高 2.7	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。稜は先端部がやや鋭い。天井部は一部を欠くが、高く、丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面%回転ヘラ削り、内面中心部ナデ、他はすべてヨコナデ。	焼成不良回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	47	口径 18.7 口縁高 2.7 残高 3.9	口縁部は下外方に下り、端部は内傾するゆるい段をもつ。稜は鈍い。 天井部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部回転ヘラ削り。 口縁部内外面ヨコナデ。	焼成良好内外面暗灰色。
蓋	48	口径 18.3 口縁高 2.7 残高 4.0	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は鈍い。 天井部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部は磨滅しており、ケズリに関しては不詳。 口縁部内外面ヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。
蓋	49	口径 19.9 口縁高 2.5 残高 3.3	口縁部は下外方に下り薄手、端部はわずかに内傾する段をもつ。稜は明瞭だが全体的に鈍い。天井部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。残存部内外面ヨコナデ	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。
蓋	50	口径 19.0 口縁高 2.8 残高 3.4	口縁部は下外方に下り、端部はわずかに内傾する段をもつ 稜は1条の沈線で作り出すが不明瞭。天井部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部回転ヘラ削り。 口縁部内外面ヨコナデ。	胎土焼成良好回転ヘラ削り逆時計回
蓋	51	口径 17.8 口縁高 2.9 残高 3.1	口縁部はわずかに開いて下外方に下る。端部は内傾する平面をもつ。稜はきわめて鈍く1条の沈線をめぐらせて作出する。天井部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。口縁部内外面ヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。口縁部焼けヒズミ有り

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	52	口径 19.1 口縁高 2.5 残高 3.4	口縁部は下外方に下り、端部はわずかに内傾するゆるい段をもつ。稜はきわめて鈍く、1条の沈線をめぐらせて作り出す。 天井部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面回転ヘラ削り。他はすべてヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。焼けヒズミのため接合せず。
蓋	53	口径 18.3 口縁高 2.6 残高 4.0	口縁部は下外方に下り、端部は内傾するゆるい段をもつ。稜は形骸化している。稜のすぐ上に1条の沈線がめぐる。天井部は欠損。	天井部外面回転ヘラ削り。他はすべてヨコナデ。	胎土、焼成良好。床面直上
蓋	54	口径 17.0 器高 4.1 口縁高 2.9	口縁部は下外方に下り薄手、端部は内傾するゆるい段をもつ。稜はきわめて鈍い。天井部は低く、平ら。	天井部外面に手持ちヘラ削りを行なった形跡がある。後回転ヘラ削り。内面中心部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成良好。回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	55	口径 18.2 口縁高 2.7 残高 3.8	口縁部は下外方に下り、端部は内傾するゆるい段をもつ。稜はきわめて鈍く、形骸化している。天井部は欠損。	天井部外面回転ヘラ削り、他はすべてヨコナデ	胎土、焼成良好。回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	56	口径 17.9 口縁高 2.5 残高 3.2	口縁部は下外方に大きく開く端部はゆるい段をもつ。口縁端部外面にタタキ板によるおさえ痕がみられる。稜は形骸化しており、きわめて鈍い。天井部は欠損。	天井部外面手持ちヘラ削り 他はすべてヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。
蓋	57	口径 19.9 口縁高 2.3 残高 2.8	口縁部は下外方に下り、端部はゆるい段をもつ。端部外側にはタタキ板によるおさえ痕がある。稜は他のものに比較的鋭い。	口縁部内外面ヨコナデ。 マキアゲミズビキ成形。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。
蓋	58	口径 18.6 器高 4.5 口縁高 2.6	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。タタキ板によるおさえ痕が全周する稜はやや鋭い。天井部は低くやや丸味をもつ。	天井部外面は手持ちヘラ削り痕がわずかにみられる。 後回転ヘラ削り。他はすべてヨコナデ。 マキアゲミズビキ成形。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。天井部一部欠損。
蓋	59	口径 23.0 口縁高 2.8 残高 3.9	口縁部は下外方に下り、端部は内傾するゆるい段をもつ。稜はきわめて鈍い。天井部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井外面回転ヘラ削り。他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	60	口径 21.8 器高 4.0 口縁高 2.8	口縁部は下外方に下り薄手、端部は内傾するゆるい段をもつが、平面に近い。稜は鈍く1条の沈線をめぐらせて作り出す。天井部は中心部分を欠損するが、低く、平らに近い	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面回転ヘラ削り。 内面中心付近ナデ。他はすべてヨコナデ。	焼成不良 生焼け。 つまみが つく可能 性有り。
蓋	61	口径 24.2 口縁高 3.0 残高 4.8	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は太い沈線をめぐらして作り出す。天井部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面回転ヘラ削り。 他はヨコナデ	胎土、焼 成とも良 好。床面 直上。
蓋	62	口径 25.3 口縁高 3.1 残高 4.7	口縁部は下外方に下り、端部は外傾するが内側は内傾する平面をなす。 稜は鈍い。天井部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面回転ヘラ削り。 他はヨコナデ。	胎土、焼 成とも良 好。回転 ヘラ削り 逆時計回
蓋	63	口径 23.2 口縁高 3.6 残高 6.6	口縁部は下外方に下る、端部は外傾するが内側は内傾する段をもつ。稜は鈍い。 天井部は高く、丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 $\frac{3}{5}$ 回転ヘラ削り。 内面中心部不定方向のナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼 成とも良 好。回転 ヘラ削り 逆時計回
蓋	64	口径 23.8 口縁高 3.1 残高 5.4	口縁部は下外方に下る。端部はやや外傾するが、内側は内傾する平面を成す。稜はきわめて鈍い。天井部は大半を欠損するが、高く丸味をおびると思われる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面回転ヘラ削り。 他はヨコナデ。	胎土、焼 成とも良 好。回転 ヘラ削り 逆時計回 り。
蓋	65	口径 18.0 器高 4.5 口縁高 2.6	口縁部は下外方に下る。端部はやや内傾する平面を成す。 稜は比較的明瞭ながら、鈍い 天井部は低く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面手持ちヘラ削り の後部分的に回転ヘラ削り 内面中心部ナデ、他はヨコナデ。	焼成良好 回転ヘラ 削り逆時 計回り。
蓋	66	口径 18.1 器高 4.9 口縁高 2.7	口縁部は下外方に下るが、端部近くは垂直に下る。端部は内傾する平面を成す。 稜は鈍い。天井部は低く、やや丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面手持ちヘラ削り の後回転ヘラ削り。内面中 心部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼 成とも良 好。回転 ヘラ削り 逆時計回 り。内外 面灰色。
蓋	67	口径 19.5 器高 4.8 口縁高 2.6	口縁部は下外方へ下り、端部は内傾する平面を成す。 稜は鈍い。 天井部は厚く、低い。ほぼ平	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面不定方向の手持 ちヘラ削り。内面中心部ナ デ、他はヨコナデ。	胎土、焼 成とも良 好。内外 面灰色。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	68	口径 18.6 器高 4.7 口縁高 2.4	口縁部は下外方に下り薄手、端部は内傾する平面を成す。稜は1条の沈線をめぐらし、明瞭であるがやや鈍い。天井部は低く、やや丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面手持ちヘラ削りの後回転ヘラ削り。内面中心部ナデ、他はヨコナデ	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回
蓋	69	口径 19.6 器高 4.5 口縁高 2.2	口縁部は下外方に下り薄手、端部は内傾する平面を成す。稜はきわめて鈍い。天井部はヒズミがあり不明瞭だが平らになるであろう。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面手持ちヘラ削りの後回転ヘラ削り。他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回
蓋	70	口径 16.4 口縁高 2.5 残高 5.5	口縁部はわずかに下外方に下り、端部は内傾する平面を成す。稜は明瞭だが、やや鈍い。天井部は高く、丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面回転ヘラ削り。他はすべてヨコナデ。	焼成不良胎土良好回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	71	口径 17.5 器高 5.2 口縁高 2.9	口縁部は下外方に下り薄手、端部は内傾する平面を成す。稜は鈍い。天井部はやや高く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部厚く外面回転ヘラ削り。外面中央ユビナデ、内面中央ナデ、他はヨコナデ	胎土、焼成良好。回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	72	口径 17.8 口縁高 2.7 残高 3.2	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する平面を成す。稜はきわめて鈍い。天井部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。口縁部内外面灰色。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。
蓋	73	口径 22.0 口縁高 3.1 残高 4.4	口縁部は下外方に下り、厚手端部は内傾する平面を成す。稜は鈍い。天井部は大半を欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面回転ヘラ削り。口縁部内外面ヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。
蓋	74	口径 23.5 器高 5.6 口縁高 3.4	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する平面を成す。稜はきわめて鈍い。天井部は低く、平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部回転ヘラ削り、内面中央部ナデ、他はヨコナデ	焼成不良回転ヘラ削り逆時計回り。 つまみの付く可能性有り。
蓋	75	口径 27.4 器高 6.1 口縁高 8.8	口縁部は下外方に下り薄手、端部は内傾する平面を成す。稜は形骸化し、1条の浅い沈線がめぐる。天井部は大半を欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面回転ヘラ削り。他はすべてヨコナデ。	焼成良好回転ヘラ削り逆時計回り。 天井部焼けヒズミ有り。

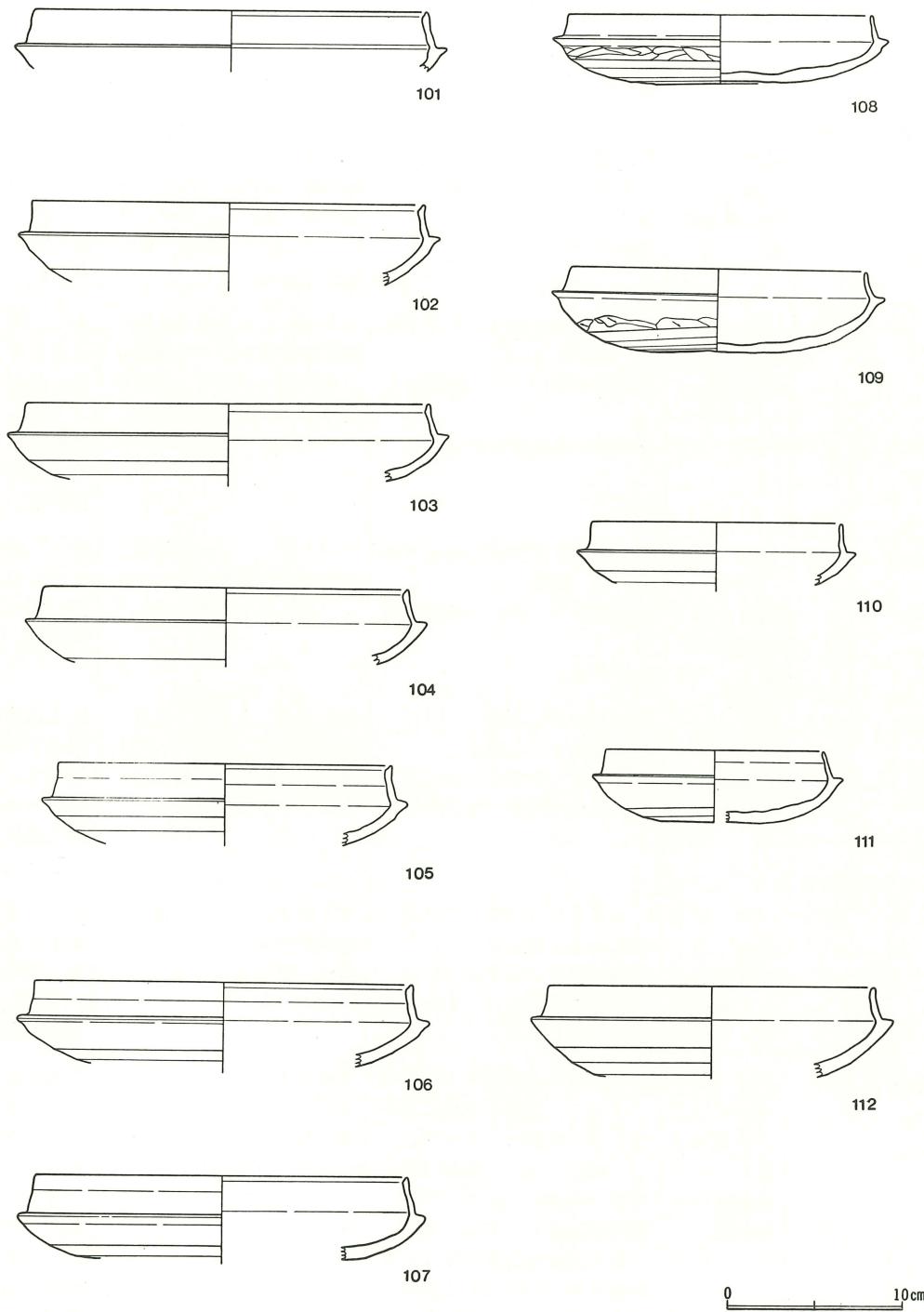
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	76	口径 14.9 器高 3.8 口縁高 1.9	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する平面を成す。 稜は明瞭だが端部は鈍い。 天井部は低く、中央部平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 $\frac{1}{3}$ 回転ヘラ削り。 内面中央部ナデ、他はすべてヨコナデ。	焼成不良 胎土細かく良好。 回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	77	口径 14.8 器高 3.4 口縁高 2.1	口縁部は下外方に下り、端部はわずかではあるが内傾する 稜は1条の沈線で作り出しが 鈍い。天井部は低く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 $\frac{1}{3}$ 回転ヘラ削り。 内面中央部ナデ、他はすべてヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回
蓋	78	口径 15.3 器高 4.0 口縁高 2.2	口縁部は下外方に下り薄手、 端部は内傾する平面を成す。 稜は比較的するどい。 天井部は低く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 $\frac{1}{3}$ 回転ヘラ削り。 内面中央部ナデ、他はすべてヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。
蓋	79	口径 13.9 器高 3.7 口縁高 2.1	口縁部は下外方に下り、端部 は丸味をもつが、わずかに内 傾する平面を成す。 稜は明瞭だが端部は鈍い。 天井部は低い。中央部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 $\frac{1}{3}$ 回転ヘラ削り。 他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。
蓋	80	口径 14.6 口縁高 2.2 残高 3.0	口縁部は下外方に下り、端部 はわずかに内傾する平面を成 す。 稜は明瞭だが端部は鈍い。 天井部は大半を欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 残部内外面ヨコナデ。	胎土細かく良好。 焼成不良内外面灰色。
蓋	81	口径 14.0 器高 3.7 口縁高 2.0	口縁部は下外方に下り、端部 は内傾する平面を成す。 稜は比較的するどい。 天井部は低く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 $\frac{1}{3}$ 回転ヘラ削り。 内面中央部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。
蓋	82	口径 14.6 器高 4.1 口縁高 2.2	口縁部は下外方に下り薄手、 端部は丸味をもつものの、わ ずかに内傾する平面を成す。 稜はきわめて鈍い。 天井部は中央部を欠損するが ほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 $\frac{1}{3}$ 回転ヘラ削り。 内面中央部ナデ、他はヨコナデ。	焼成不良 回転ヘラ削り逆時計回り。 内外面灰色。
蓋	83	口径 19.7 器高 6.9 天井高 5.9 口縁高 3.0 ツマミ径 3.7	口縁部は下外方に下り、端部 はやや厚く内傾する段をもつ 稜は鈍く、太い1条の沈線を めぐらして作り出す。天井部 は高く丸味をもつ、中央には 上面が凹むツマミがある。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 $\frac{1}{3}$ 回転ヘラ削り。 内面中央部ナデ、他はヨコナデ、ツマミははりつけ。	焼成不良 回転ヘラ削り逆時計回り。 覆土。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	84	口径 18.9 器高 6.0 天井高 5.1 口縁高 2.6 ツマミ径 3.6	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。稜はきわめて鈍く、1条の沈線をめぐらして、わずかに作り出す。天井部はやや高く、丸味をもつ。中央には、上面が浅く凹むつまみをもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り。内面中央部ナデ、他はヨコナデ。ツマミははりつけ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	85	口径 21.4 器高 7.9 天井高 6.4 口縁高 3.1 ツマミ径 3.9	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾するゆるい段をもつ。稜はきわめて鈍い。天井部は高く、丸味をもつ。中央部には、上面が浅く凹むツマミをもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り。内面中央部ナデ、他はヨコナデ。つまみははりつけ。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。焼けヒズミあり。
蓋	86	口径 24.1 器高 6.9 天井高 5.9 口縁高 3.0 ツマミ径 4.1	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。稜は形骸化しておりきわめて鈍い。天井部はやや低く、丸味をもつ。ツマミは上面が凹む。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り、内面中央部ナデ、他はヨコナデ。ツマミははりつけ。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。
蓋	87	口径 23.7 器高 7.0 天井高 5.9 口縁高 3.3 ツマミ径 3.9	口縁部は下外方に下り、端部は内傾するゆるい段をもつ。稜はきわめて鈍い。天井部は低く、厚手、丸味をもつ。ツマミは上面が浅く凹む。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り。内面中央部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。焼けヒズミあり。
蓋	88	口径 18.5 器高 5.6 天井高 4.5 口縁高 2.6 ツマミ径 3.9	口縁部は下外方に下り薄手、端部は内傾する段をもつ。稜は鈍い。天井部は低く、やや丸味をもつ、ツマミは上面が凹むが、中心部はわずかに高くなる。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面回転ヘラ削り、内面中央部ナデ、他はヨコナデ。ツマミははりつけ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回り。焼成部床直。
蓋	89	口径 17.4 器高 5.0 天井高 4.2 口縁高 2.3 ツマミ径 3.7	口縁部は下外方に下り、端部は内傾するゆるい段をもつ。稜は比較的明瞭だが、鈍い。天井部は低く、平ら。ツマミは浅く凹むが、中心部が高くなる。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り。内面中央部ナデ、他はヨコナデ。ツマミははりつけ。	胎土、焼成とも良好。内外面暗青灰色。
蓋	90	口径 19.7 器高 4.1 天井高 3.4 口縁高 2.5 ツマミ径 3.6	口縁部は下外方に下り、端部は内傾するゆるい段をもつ。稜はきわめて鈍い。天井部は低く、平ら。ツマミは浅く凹むが、中心部が高くなる。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面ツマミはりつけ後接合部ヨコナデ、 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り、内面中央部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回り。

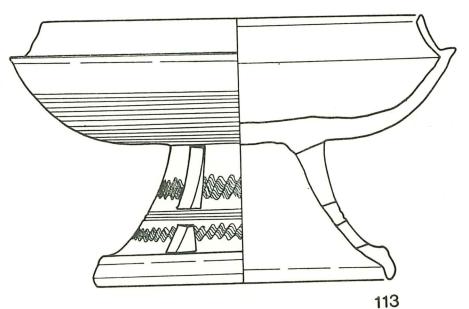
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	91	口径 22.9 器高 5.9 天井高 4.9 口縁高 2.8 ツマミ径 3.8	口縁部は下外方に下り薄手、端部は内傾する段をもつ。稜はきわめて鈍い。天井部は低く、わずかに丸味をもつ。ツマミは上面が浅く凹むが、中心部はわずかに高くなる。	マキアゲ、ミズビキ成形。ツマミはりつけ後、接合部ヨコナデ、 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り。内面中央部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回り。
蓋	92	口径 23.4 天井高 5.0 口縁高 2.7	口縁部は下外方に下り薄手、端部は内傾するゆるい段をもつ。稜は鈍い。天井部は低く、ほぼ平ら。ツマミ欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部中心ヨコナデ、外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り、内面中央部ヨコナデ、他はナデツマミはりつけた部分から欠損。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回り。全体的に焼けヒズミ有
蓋	93	口径 23.6 天井高 4.6 口縁高 2.4	口縁部は下外方に下り、端部は内傾するゆるい段をもつ。稜は不明瞭で、数条の沈線をめぐらしている。天井部は低く、やや丸味をもつ。ツマミ欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井中心部ヨコナデ、外面回転ヘラ削り。内面中央部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。焼けヒズミが大きい。
蓋	94	口径 23.6 天井高 5.6 口縁高 3.0	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。稜はきわめて鈍い。天井部は厚く、やや高い。若干丸味をもつ。ツマミ欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面中心部ヨコナデ $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り。内面中央部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回り。焼けヒズミ大きい。
蓋	95	口径 22.6 天井高 5.5 口縁高 3.2	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。稜は比較的明瞭。天井部はやや低く、平らに近い。ツマミ欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り。他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回
蓋	96	口径 24.8 天井高 4.7 口縁高 3.0	口縁部は下外方に下り薄手、端部は内傾する段をもつ。稜は形骸化し、不明瞭。天井部は低く、厚手。平ら。ツマミ欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面中心部ヨコナデ $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り。内面中央部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回
蓋	97	口径 19.0 天井高 4.8 口縁高 2.8	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。稜は鈍い。天井は低く、丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面中心部ヨコナデ $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り。内面中央部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	98	口径 18.4 天井高 4.1 口縁高 2.8	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は鈍い。 天井部は低く、平ら。 ツマミ欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面中心部ヨコナデ ½回転ヘラ削り。内面中央 部ナデ、他はヨロナデ	焼成一部 不良、胎 土良好。 回転ヘラ 削り逆時 計回り。
蓋	99	口径 22.3 天井高 5.0 口縁高 2.9	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は鈍い。 天井部は低く、やや丸味をもつ。ツマミ欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部中央ツマミはりつけ の際のヨコナデ、外面7/8 回転ヘラ削り、内面中央ナ デ、他はヨコナデ。ツマミ はりつけ。	胎土、燒 成とも良 好。削り は丁寧。
蓋	100	口径 26.1 天井高 4.5 口縁高 2.7	口縁部は下外方に下り薄手、 端部は内傾するゆるい段をもつ。 稜は不明瞭。 天井部は厚く、低い。平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面中心部ツマミは りつけ時のヨコナデ、4/5 回転ヘラ削り、他はヨコナ デ。	胎土、燒 成とも良 好。内外 面灰色。
坏	101	口径 22.4 受部径24.7 残高	たちあがりは内傾してのび厚 手、端部は内傾するゆるい段 をもつ。受部は水平にのび、 端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	胎土、燒 成とも良 好。内外 面灰色。
坏	102	口径 22.3 受部径24.0 残高 4.6	たちあがりは内傾してのび、 端部は段をもつ。 受部はわずかに下り気味にの び、端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部回転ヘラ削り、他はヨ コナデ。	胎土、燒 成とも良 好。灰原 出土
坏	103	口径 22.9 受部径25.2 残高 4.4	たちあがりは内傾してのび、 端部は内傾する段をもつ。 受部は水平にのび、端部は丸 い。底部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底体部下半回転ヘラ削り、 他はヨコナデ。	胎土、燒 成とも良 好。内外 面灰色。 破片。
坏	104	口径 20.7 受部径22.9 残高 4.3	たちあがりは内傾してのび薄 手、端部は内傾する段をもつ。 受部は厚く、水平にのびる。 端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底体部は欠損しているが、 わずかに回転ヘラ削りがみ られる。他はヨコナデ。	胎土良好 焼成不良 内外面灰 色。
坏	105	口径 19.1 受部高21.0 残高 4.6	たちあがりは内傾してのび厚 手、端部は内傾する段をもつ 受部は厚く、水平にのびる。 端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部は欠損するが、体部の 大半は回転ヘラ削り。他は ヨコナデ。	胎土、燒 成とも良 好。内外 面青灰色
坏	106	口径 21.5 受部高23.5 残高 4.7	たちあがりは内傾してのび、 端部は内傾する段をもつ。 受部は厚く、水平にのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底体部下半回転ヘラ削り、 他はヨコナデ。	胎土、燒 成とも良 好。

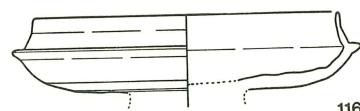
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	107	口径 21.3 受部径23.3 残高 4.7	たちあがりは内傾してのび薄手、端部は内傾する段をもつ。受部は厚く、水平にのび、端部は丸い。 底部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底体部下半回転ヘラ削り、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回
坏	108	口径 17.3 器高 3.9 受部径19.2 たちあがり 高 1.3	たちあがりは内傾してのび薄手、端部は丸い。受部は厚くわずかに下り気味に外方へのびる。 底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底体部は手持ちヘラ削りの後回転ヘラ削り。内面中心部ナデ、他はヨコナデ。手持ちヘラ削りの段階で形は整えられる。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回り。
坏	109	口径 16.8 器高 4.7 受部径19.0 たちあがり 高 1.5	たちあがりは内傾してのび薄手、底部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 底部はやや丸味をおびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底体部外面手持ちヘラ削りの後回転ヘラ削り。内面中央部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回り。内外面灰色。
坏	110	口径 14.2 受部径15.9 残高 3.5 たちあがり 高 1.6	たちあがりは内傾後直立ぎみにのび、端部は丸い。 受部は水平にのび、端部は丸い。 底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底体部残存部分回転ヘラ削り、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。
坏	111	口径 12.4 器高 4.1 受部径14.3 たちあがり 高 1.5	たちあがりは内傾してのび、端部は丸く仕上げる。 受部は厚く水平にのびる。 底部はやや厚手、丸味をおびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底体部外面%回転ヘラ削り、内面中央部ナデ、他は内外面ヨコナデ。	胎土良好 焼成不良 生焼け。 回転ヘラ削り逆時計回り。
坏	112	口径 18.6 残高 5.1 受部径20.8 たちあがり 高 1.8	たちあがりは内傾してのび、端部は丸く仕上げる。 受部は厚く、水平にのびる。 底部は欠損するが、丸味をおびると思われる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底体部外面%回転ヘラ削り、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回
有蓋高坏	113	口径 20.2 受部径23.7 环部高 6.6 器高 14.0 脚部径15.5 脚部高 7.4	坏部たちあがりは大きく内傾してのび、端部は内傾する段をもつ。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。体部は深く厚手。脚部は下外方にのび、裾部で屈曲し、端部は丸い。 2条の沈線をはさんで、上下段各1条の櫛描波状文を施す後上段長方形、下段台形のスカシを三方に切り込む。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏部底体部回転ヘラ削りの後、%カキ目調整。内面中央部ナデ。他はヨコナデ。 脚部は接合。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。 スカシの配置不均等。坏部脚部とも焼けヒズミ有り。



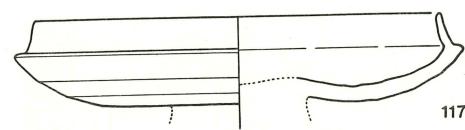
第16図 8号窯跡出土遺物 (6)



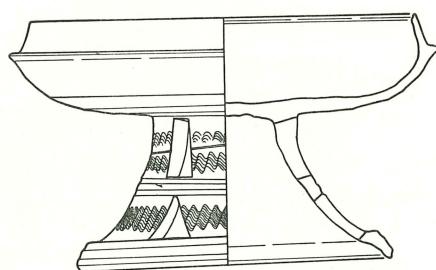
113



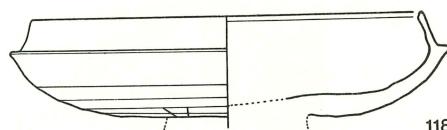
116



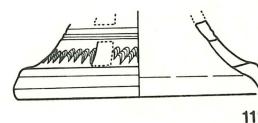
117



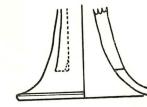
114



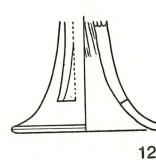
118



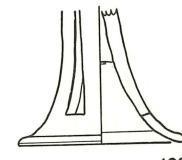
119



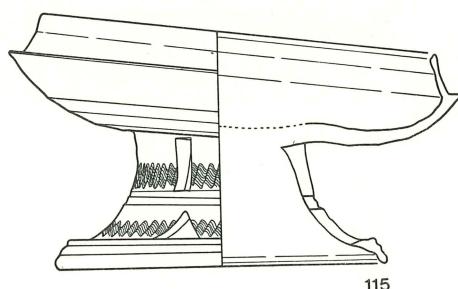
120



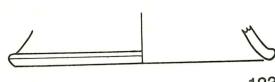
121



122



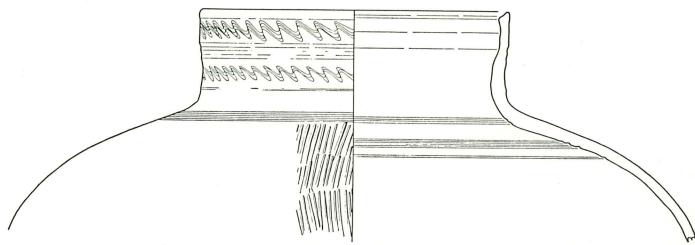
115



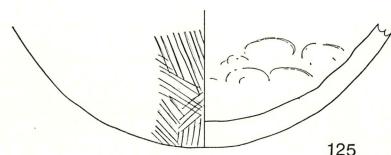
123



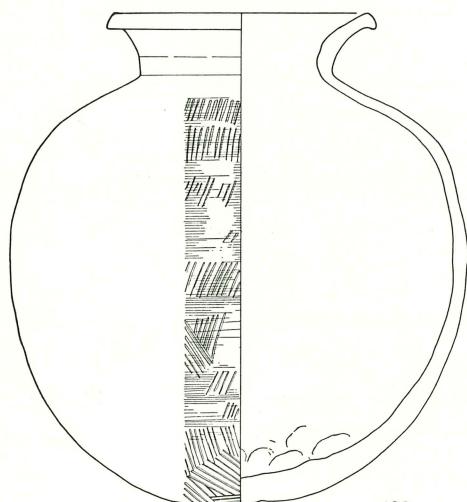
第17図 8号窯跡出土遺物 (7)



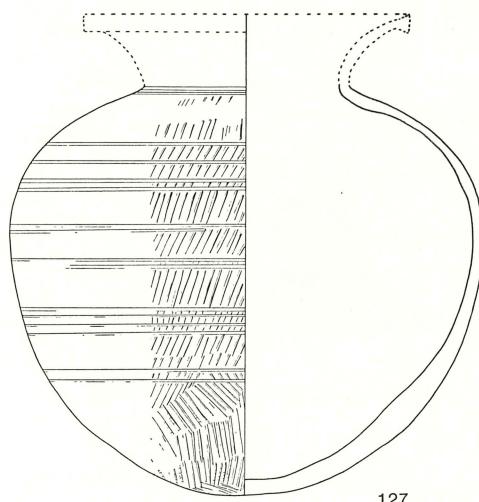
124



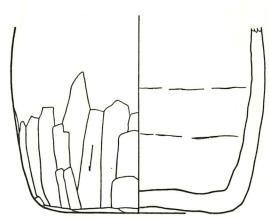
125



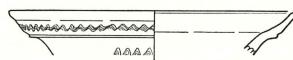
126



127



128



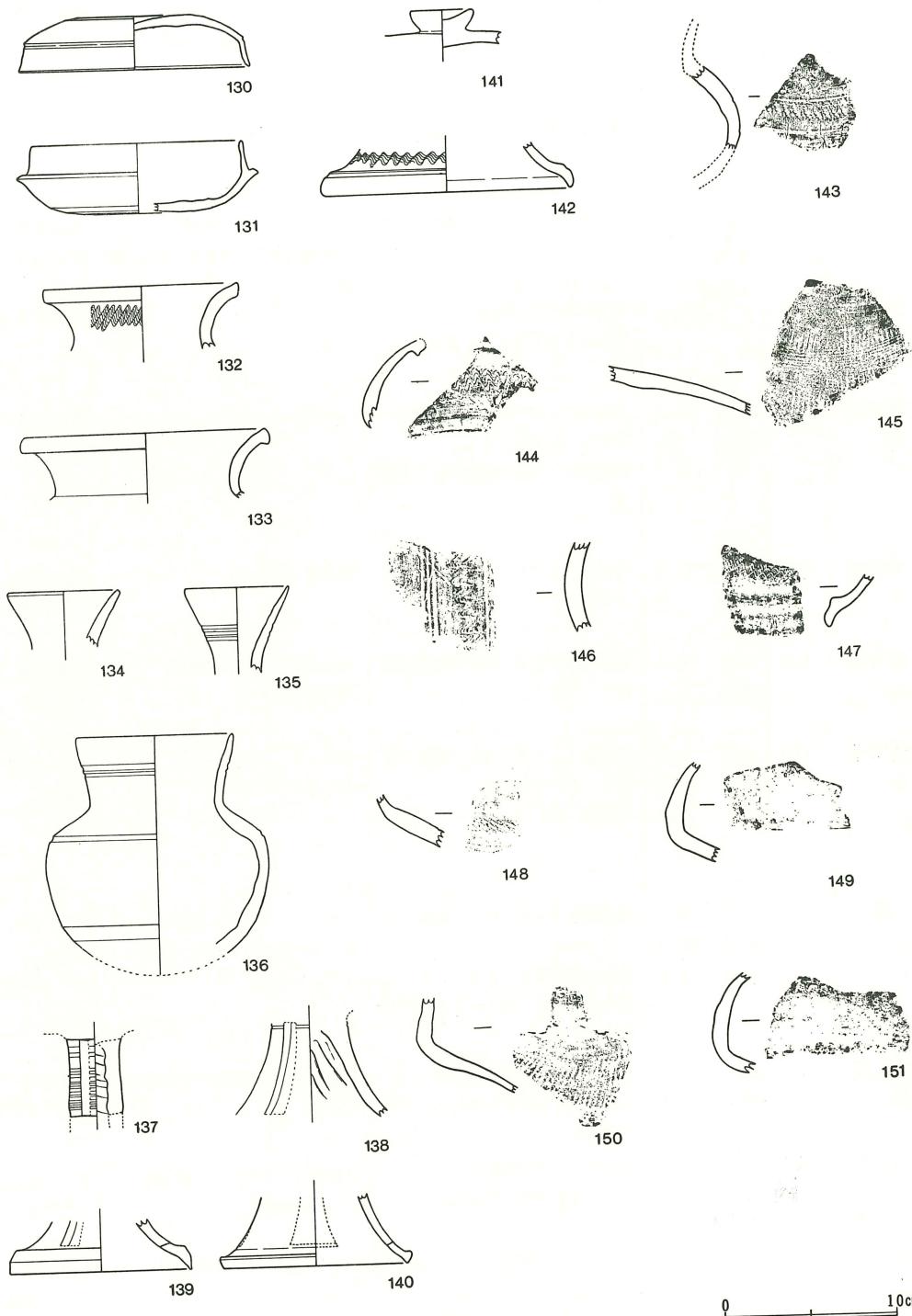
129

0 10cm

第18図 8号窯跡出土遺物(8)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
有蓋高 坏	114	口径 20.4 受部径22.9 坏部高 5.2 器高 13.1 脚部径16.6 脚部高 7.9	坏部たちあがりは内傾してのび、端部は内傾する段をもつ。受部は水平にのび、端部は丸い。坏部は深くやや薄手。脚部は下外方にのび、裾部でわずかに屈曲する。2条の沈線をはさみ上段は脚部を1周しない2条の櫛描波状文を施し、下段は全周する1条の櫛描波状文がみられる。スカシは上段長方形、下段三角形で三方に均等に開く。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏部底体部%回転ヘラ削り、内面中央部ナデ、他はヨコナデ。脚部は接合	胎土良好 焼成不良 生焼け。 回転ヘラ削り逆時計回り。 全体に焼けヒズミ有り。
有蓋高 坏	115	口径 20.9 受部径24.1 坏部高 5.5 器高 12.5 脚部径17.3 脚部高 7.0	坏部たちあがりは大きく内傾し、端部は内傾する段をもつ。受部は水平にのび、端部は丸い。坏部は深く、比較的薄手。脚部は下外方にのびやや薄手。裾部でわずかに屈曲する。2条の沈線をはさんで、上下段に各1条の櫛描波状文を施す。スカシは上段長方形、下段三角形で三方に均等に開く	マキアゲ、ミズビキ成形。坏部底体部外面%回転ヘラ削り、他はヨコナデ。脚部接合	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。 回転ヘラ削り逆時計回り。 全体に焼けヒズミ有り。
有蓋高 坏坏部	116	口径 16.1 受部径13.6 残高 4.1	たちあがりは内傾してのび、後直立する。端部は丸い。受部は厚く、水平にのびる。坏部はやや浅く、底部平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏部外面%回転ヘラ削り。内面中央ナデ。他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回
有蓋高 坏坏部	117	口径 20.7 受部高23.4 残高 5.4	たちあがりは内傾してのび、端部は内傾する段をもつ。受部は水平にのび、端部は丸い。体部は器壁厚く、底部は丸味をおびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底体部外面%回転ヘラ削り。内面中央部ナデ、他はヨコナデ。脚部は接合。接合面は坏部に同心円状の切り目を入れ、接合する。底部にスカシの切りこみ痕残る。	胎土、焼成とも良好。回転ヘラ削り逆時計回り。灰原出土。
有蓋高 坏坏部	118	口径 21.5 受部高23.9 残高 4.3	たちあがりは内傾してのび、端部は丸く仕上げる。受部は厚く、水平にのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底体部外面%回転ヘラ削り。内面中央部ナデ、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。灰原出土。
高坏脚 部	119	脚部径13.1 残高 4.0	下外方にのびる脚部の小破片 裾部は厚く、屈曲する。 2条の沈線をめぐらし、上下2段の文様体をつくり出したと考えられる。下段は1条の櫛描波状文を施し、長方形の	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面ヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。スカシは三方。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏脚部	120	脚部径 6.9 残高 4.8	スカシを切りこんでいる。 裾部付近で下外方へ大きく開く。 端部は丸い。 スカシは長方形1段。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面暗灰色
高坏脚部	121	脚部径 7.5 残高 5.9	裾部付近で外方へ大きく開く 端部は丸い。 スカシは長方形1段。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内面1部にしばり目、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面青灰色
高坏脚部	122	脚部径 8.8 残高 7.1	裾部付近で大きく外方へ開き 端部は丸い。 スカシは三方、長方形1段。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内面1部しばり目、他はヨコナデ、スカシ切りこみ面僅かに面取り。	胎土、焼成とも良好。内外面暗灰色
高坏脚部	123	底径 13.6 残高 1.9	脚部の小破片。下外方にのび 裾部でわずかに屈曲し、端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	
壺	124	口径 16.4 残高 12.1	口頸部は垂直ぎみにのび、端部は内傾するゆるい段をもつ 2条の沈線をはさんで、上下段に各1条の櫛描波状文を施す。体部は大半を欠損するが球体をなすと考えられる。	口頸部内外面ヨコナデ。 体部外面タタキ、内面ヨコナデ。	焼成不良 生焼け。 灰原出土
甕底部	125	残高 6.6	器壁厚く、丸底。 体部は球体をなすと考えられる。	外面タタキ、内面にはあて具痕が残る。	焼成不良 生焼け。 軟質。
小形甕	126	口径 13.4 器高 25.8 体部最大径 24.2	口頸部は上外方にのび、端部は丸く仕上げる。 体部は球体をなし、底部は厚い。	マキアゲ、口頸部内外面ヨコナデ。体部外面タタキ成形後カキ目調整、内面部分的にあて具痕残る。	焼成不良 内外面灰色。床面直上。
甕体部	127	体部最大径 25.0 残高 21.7	体部は球体をなし、やや肩が張る。 底部付近が最も厚い。 口頸部を欠く。	体部外面タタキの後沈線をめぐらす。口頸部付近はタタキをすり消す。内面上半ヨコナデ。	焼成良好 底部磨滅 灰原出土
甕体部	128	体部径 13.5 底径 10.2 残高 9.8	体部上半及び口縁部を欠く。 やや胴が張り、底部は平ら、ややあげ底。	体部上半ヨコナデ、下半手持ヘラ削り。内面ヨコナデ底部手持ヘラ削り。	胎土、焼成とも良好。内外面灰色。
聰	129	口径 15.4 残高 2.3	口頸部は上外方にのび、端部は丸く仕上げる。口頸部には1条の鈍い凸帯をめぐらし、上段には1条の櫛描波状文を施す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。内外面暗灰色



第19図 表土出土遺物

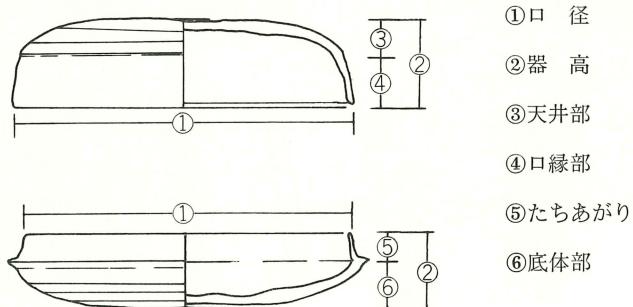
表土出土遺物（第19図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	130	口径 13,4 器高 3,1 口縁高 1,7	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は1条の沈線をめぐらして作り出す。 天井部は低く、中心部が焼けヒズミのための凹む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面%回転ヘラ削り。他はヨコナデ、ケズリは浅い。	胎土、焼成とも良好。 11号、9号窯付近出土の破片が接合。
坏	131	口径 12,2 器高 4,1 受部径14,0 たちあがり 高 1,7	たちあがりはわずかに内傾し、端部は丸く仕上げる。 受部は厚く、わずかに下方にのび端部は丸く仕上げる。 底部は中央を欠くが、ほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 体底部%回転ヘラ削り。他は内外面ヨコナデ。	焼成不良、軟質。内外面白灰色。 1号窯表土。
甕口縁部	132	口径 11,3 残高 3,6	口縁部は上外方にのび、外端面はわずかに凸面状となる。 口縁直下に1条の櫛描波状文を施す。	内外面ヨコナデ。	焼成不良、軟質。 表採。
甕口縁部	133	口径 13,9 残高 3,9	口縁部は上外方にのび、端部はやや肥厚する。	内外面ヨコナデ	焼成良好。 2号窯表土。
壺口縁部	134	口径 6,4 残高 3,3	口縁部は上外方にのび、端部は外傾する平面をなす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	焼成良好。 B群表土。
壺口縁部	135	口径 6,0 残高 5,0	口縁部は上外方へのび、端部で直立し、丸く仕上げる。 内外面に紬をかぶる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。 表採。
壺	136	口径 9,1 胴径 13,0 残高 12,7	口縁部は上外方にのび、端部は丸く仕上げる。 最大径は胴中央にある。 口縁部に2条、胴上半に1条の沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 胴下半～底部ヘラ削り、他はヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。 グリット表土
高坏脚部	137	径 3,2 残高 4,4	高坏脚部の接合部分破片。 スカシは長方形で、おそらく三方に開く。	外面カキ目、内面はシボリ痕がみられる。	焼成不良。 グリット表土
高坏脚部	138	残高 5,2	下外方にのびる脚部分。 スカシは長方形、三方に開く。	内外面ヨコナデだが、部分的にシボリ目が残る。	胎土、焼成良 4号窯表土。
高坏脚部	139	底径 10,5 残高 3,0	脚部小破片、裾部でわずかに屈曲し、端部は薄く仕上げる。 スカシは長方形、三方に開く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	焼成不良、 1～5号窯灰原。 内外面灰色。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高环脚部	140	底径 10,7 残高 4,1	下外方にのびる脚部は端部で肥厚する。 スカシは長方形で、4方に開く可能性がある。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	焼成不良。 1~5号窯灰原付近。
高环脚部	142	底径 14,4 残高 2,7	脚部小破片。 下外方にのび、裾部でわずかに屈曲する。端部は丸く仕上げる。 1条の櫛描波状文を施す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面ヨコナデ。	胎土、焼成とも良好。 1~5号窯表土。
蓋	141	つまみ径 3,5	つまみ中央部分は凹む。	わずかに残る天井部外面回転ヘラ削り、つまみ部分ヨコナデ。	グリット表土

上記した須恵器観察表中における各部位の名称及び計測値は、「陶邑」における表記方法にしたがっている。

また、削り、ナデ、叩き等の成形手法についても同様である。



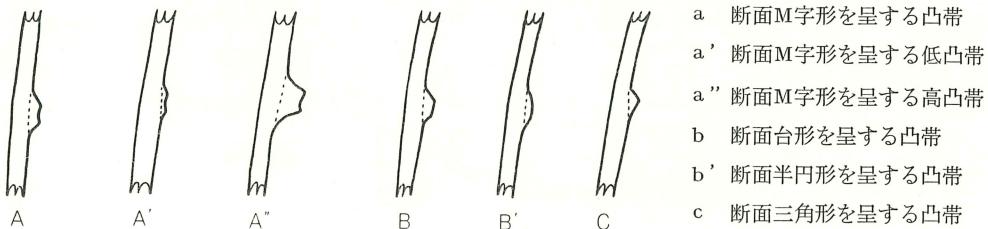
蓋・坏各部名称

埴輪凡例

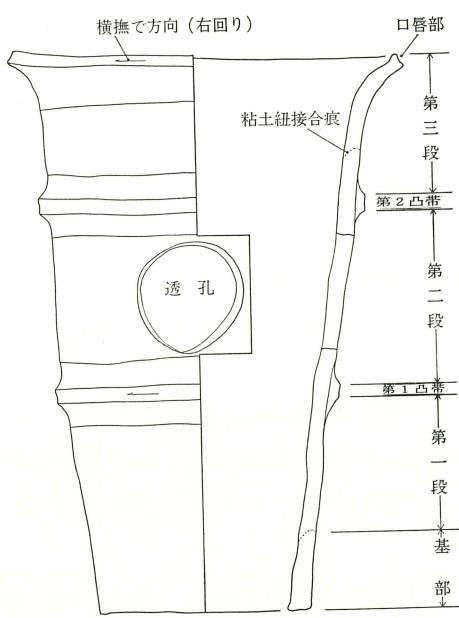
1. 当窯跡群出土の埴輪は、円筒埴輪と形象埴輪に大別されるが、この場合の円筒埴輪とは、普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪の総称である。
2. 円筒埴輪の観察記録は、表組化し、形象埴輪の記述方法と違えた。
3. 原則として、各々の遺構ごとに、円筒埴輪観察表、形象埴輪記述の順に記載した。

円筒埴輪

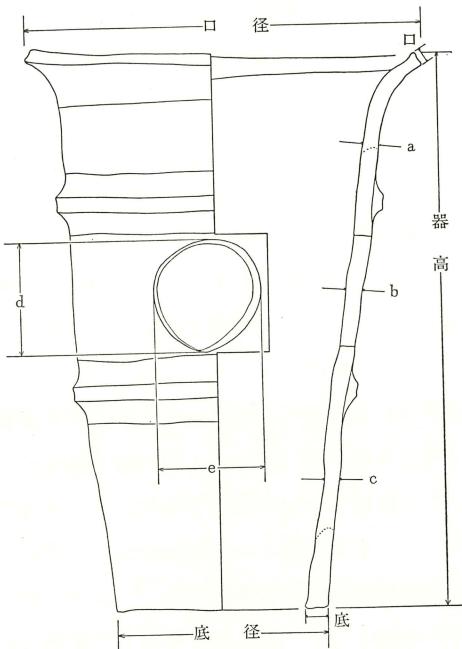
1. 円筒埴輪の観察基準は、①外形寸法（器高・器径・器厚）②器質（胎土・焼成・色調）③透孔の位置・形状④凸帯の位置・形状⑤外・内面調整⑥成形その他製作技法上の諸点である。
2. 観察表中の単位は、すべてcmである。
3. 器高は、残存高の場合には（）をつけた。
4. 器径は、口径の場合は口、底径の場合は底と数値の前に付し復元径の場合には（）をつけた。
5. 器厚は、口唇部および底面部の場合には、各々、口、底と付し、各段間の器厚は、図の通りである。
6. 胎土中、珪酸体と表現したのは、近年の研究によれば、海水性の海面動物とされているものに相当する（宇津川徹・上條朝宏「土器胎土中の動物珪酸体」『考古学ジャーナル』No.181・182 1981年）。
7. 透孔の大きさは、凡例図のd×eで表わし、復元径の場合には（）をつけた。
8. 凸帯欄は、凸帯の形状のタイプ（a～c）・寸法（凸帯高／凸帯幅）・横撫で調整の方向の順に示した。



9. 外面・内面調整欄中の矢印であるが、→印は工具の動いた方向を表わし、⇒印は、調整の前後関係を示す。また、刷毛調整は、方向・単位（本数／幅）の順に示し、単位の不明なものは、2cm幅内の刷毛本数を記した。
10. 斜刷毛調整で、工具の動きが不明なものは、矢印の代りに、右傾斜刷毛（右下り）・左傾斜刷毛（左下り）の表現を用いた。
11. 備考欄には、残存状況を示し、その他の製作技法上の諸見を記した。
12. 備考欄中、擬似黒斑とあるのは、いわゆる窯窓焼成により生ずる黒斑とは異なる。焼成時の火おもて、火うらといった火のめぐりにより生じたものと解する。
13. 底部拓影図の番号は、該当遺構の遺物図版中番号と一致する。



1. 凡例図 (部位名称)



2. 凡例図 (計測位置)

形象埴輪

1. 形象埴輪は、実測できるものはなるべく図示するよう努め、図示が困難なものは、写真図版とした。
2. 形象埴輪の記載にあたっては、『日本陶磁全集』3「土偶・埴輪」・森浩一編『馬』を参考にした。
3. 形象埴輪中の朱彩は  のスクリントーンで表わした。

2. 増輪窯跡と出土遺物

本窯跡群からは東西約32m、南北約22mの範囲から計17基の増輪窯跡が検出された。もちろん調査の対象となった地域はさらに広範囲に亘っており、各遺構の集中する部分の周辺や、支丘の先端部に至るまで、くまなく遺構確認のグリッドを設けて精査したが、他に該期の遺構は確認されなかった。したがって、約 700 m²の範囲から検出された17基の増輪窯跡と 3 軒の住居跡（工房跡）をもって、増輪生産に関するひとつのまとまりある遺構群と考えることができよう。しかし、他の諸窯跡でみられるような粘土採掘場、不良製品の捨場等の遺構は確認できなかった。したがって増輪生産に関するすべての関連遺構が確認された訳ではなく、そういう意味では、まとまりあるものとは言えないかもしれない。

確認された17基の窯跡は大部分のものが重複しており、単独で存在するものは2基だけである（7号、9号窯）。さらに、須恵器窯跡と同じように斜面に築かれているのは7号窯唯1基である。ただ床面の一部が確認されたにとどまる19号窯は、一部斜面にかかっていた可能性がある。他はすべて支丘の肩部から平坦面にかけて検出されている。

また増輪窯跡全体を概観すると、ふたつのグループに大別することができる。つまり、須恵器の6号窯を境にして、西と東に集中して構築されており、それぞれをひとつのグループとして区分した。西側をA群、東側をB群とする。両群には単独で構築されたものが東端に存在し、そのすぐ西側に5基～8基が群在する。

また、重複のはげしいところでは、各窯跡に伴う遺物を確実に抽出することはきわめて困難である。調査時はもちろん、整理作業の過程においても充分意をはらってきたが、どうしても帰属が不明な資料については、強引に各窯に帰属させることはさけ、A群又はB群出土とし、灰原に近いところのものは灰原出土とした。

（1）1号窯跡（第21図）

本窯跡群発見の端緒となった窯跡である。南側に隣接する5号窯跡によって焚口部及び燃焼部の一部が破壊されており、その全容は把握できない。しかし、側壁は焼成部から窯尻部にかけて2.20mほど残っており、焼土化した床面は2.85mまで確認できた。側壁はほぼ平行しており、残存する焼成部上位での幅は1.38mを測る。

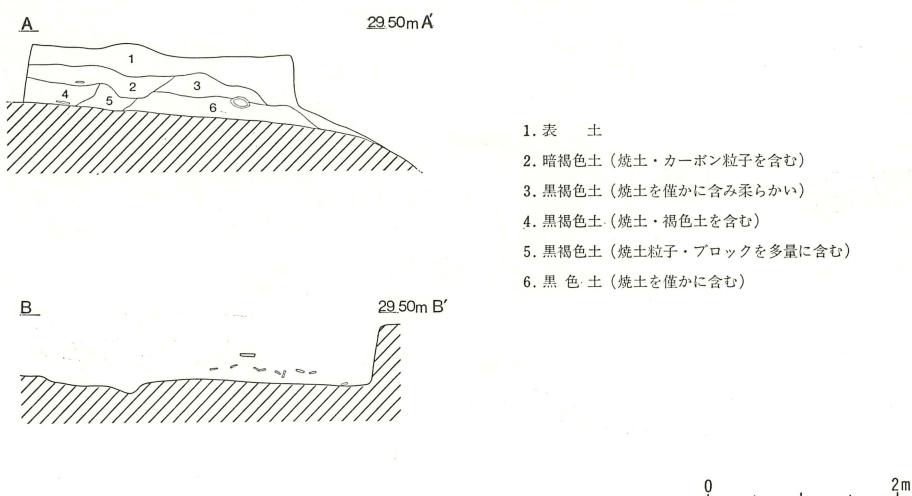
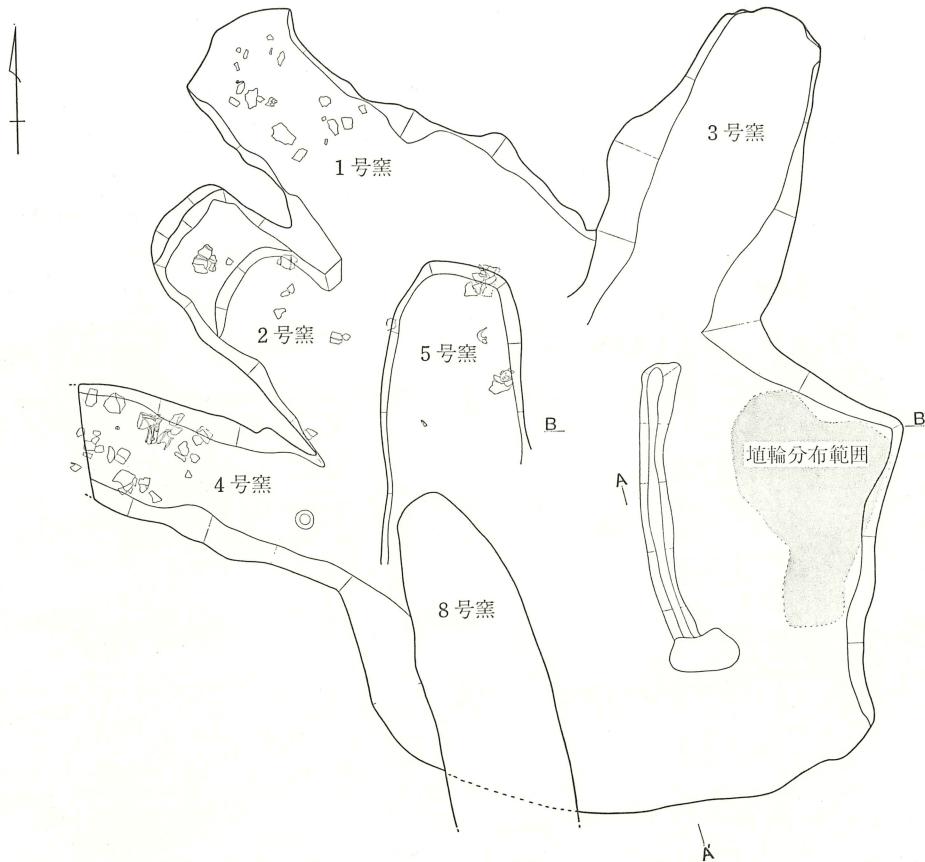
焼成部上位から窯尻部にかけての床面は約20度の傾斜をもち、よく焼けており堅くしまっている。燃焼部から焼成部中位にかけての床面は残存しないが、傾斜は緩やかであったと思われる。

ローム層を掘り込んで構築した、半地下式無段登窯である。

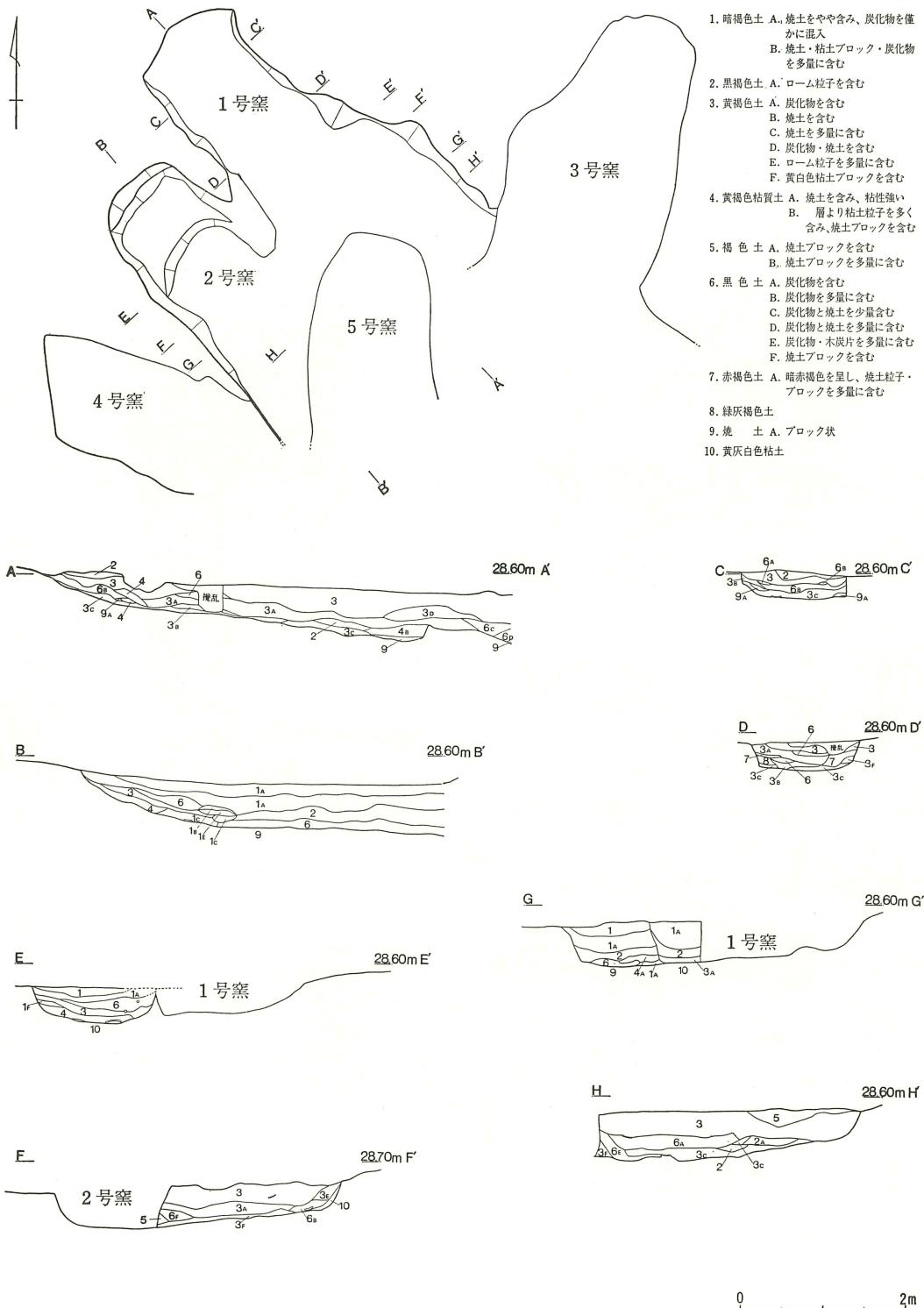
天井部は残されておらず、その痕跡も認められない。このような状況は他の増輪窯跡すべてに通じることである。天井部の架構については、須恵器窯跡にみるようなものを想定することは困難である。この天井の架構については後で触れる。

また、隣接する窯跡との重複関係であるが、右側壁から伸びるたち上りが3号窯跡に切られており、南に接する2号窯を切っている。さらに、焚口部に存在する5号窯跡が乗っている。

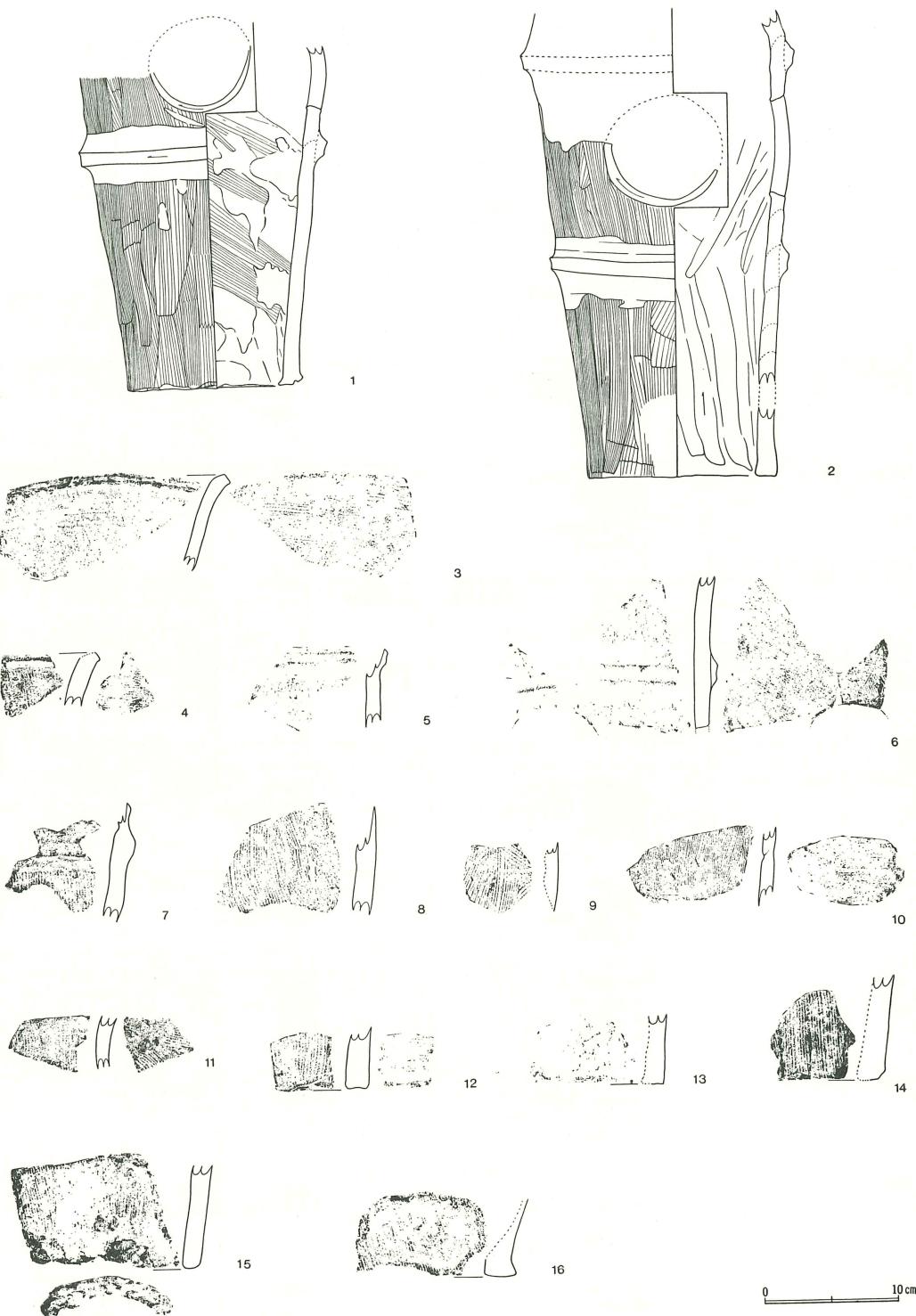
次に操業回数であるが、床面下精査の結果2回程度の操業と考えられ、短期間のうちに放棄されたものと思われる。主軸はN-39°-Wにとる。若干の円筒埴輪が出土している（第22図）。



第20図 1号～5号窯跡及び灰原



第21図 1号・2号窯跡



第22図 1号窯跡出土遺物

1号窯跡出土遺物(第22図)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
22図-1	(25.0)	底13.1	底1.8 b 1.1 c 1.1	胎：少量。パミス 角岩礫・晶石・珪 酸体 焼：良好・堅緻 色：淡褐色	第二段に円孔。 右回り穿孔後 布撫で。	A 0.6/3.2 右回り布横撫で	縦刷毛 13本/2.5cm	斜刷毛△方向 9本/1.7cm ⇒指揮え	残率60%。 底面に篠状圧痕あり。
22図-2	(29.6)	底(14.1)	底1.6 b 1.2 c 1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：淡褐色	第二段に円孔。 右回り穿孔後 指撫で。	A 0.6/3.3 右回り布横撫で	縦刷毛 11本/2.3cm	基部付近を、 布撫で⇒第一 段布撫で△方 向⇒第二段布 撫で△方向	残率70%。 朝顔形。
22図-3	(7.0)	—	口0.8 a 0.9	胎：少量。パミス 角岩礫・酸化鉄粒 焼：普通 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 4本/1cm ⇒横撫で	斜刷毛 4本/1cm ⇒横撫で	破片。 内・外とも磨耗 が著しい。
22図-4	(4.0)	—	口0.6 a 1.3	胎：少量。角岩礫 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：赤褐色	—	—	縦刷毛 5本/1cm ⇒横撫で	斜刷毛	破片。
22図-5	(5.9)	—	1.1	胎：少量。酸化鉄 粒・珪酸体 焼：良好 色：外面橙褐色・ 内面淡褐色	—	—	縦刷毛 5本/1cm	—	破片。 内面剥落。
22図-6	(11.1)	—	1.2	胎：少量。角岩礫 酸化鉄粒 焼：良好 色：淡褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A' 0.4/2.8 右回り指横撫で	縦刷毛 11本/2cm	右傾斜刷毛 11本/2cm	破片。
22図-7	(8.9)	—	1.2	胎：少量。パミス 角岩礫・酸化鉄粒 焼：普通 色：橙褐色	—	B 0.5/2.9	縦刷毛 9本/2cm	布撫で	破片。
22図-8	(8.2)	—	1.4	胎：微量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 10本/2cm	縦指撫で	破片。
22図-9	(5.1)	—	—	胎：微量。パミス 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：橙褐色	—	—	斜刷毛△縦刷 毛 12本/2cm	—	破片。
22図-10	(6.0)	—	1.0	胎：少量。パミス 角岩礫・晶石 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 17本/2cm	横刷毛 21本/2cm	
22図-11	(3.9)	—	1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：普通 色：淡褐色	—	—	縦刷毛 9本/2cm	右傾斜刷毛 10本/2cm	破片。
22図-12	(4.6)	—	底1.7	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 9本/2cm	横刷毛 9本/2cm	破片。
22図-13	(5.1)	—	—	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好・堅緻 色：淡褐色	—	—	縦刷毛 10本/2cm	—	破片。 内面剥落。

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
22図-14	(7.8)	—	—	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：普通 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 10本／2cm	—	破片。 内面剥落。
22図-15	(7.6)	—	底1.3	胎：少量。パミス 角岩礫 焼：普通 色：赤褐色	—	—	縦刷毛 10本／2cm	縦指撫で	破片。 底面に篠状圧痕あり。
22図-16	(5.7)	—	底2.3	胎：少量。パミス 角岩礫 焼：良好 色：淡褐色	—	—	縦刷毛 10本／2cm	—	破片。 内面剥落。

人物埴輪（図版41—1）

島田畠の破片である。撥形に前後に振り分けられ、中央で花結びにまとめられている。長さ14.2cm、幅13.4cm、器厚1.7cmを測る。胎土は酸化鉄粒・角岩礫等を少量含み、珪酸体の量がやや多い。焼成は非常に良好であり、橙褐色を呈する。

表面には、刷毛調整が施されているが、中央部は、撫で消されている。

韁形埴輪（図版41—2）

韁の矢柄の部分である。残存長5.8cm、幅7cm、器厚0.9cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は良好であり、赤褐色を呈する。

鎌の表現は無く、矢柄のみ5本線刻されている。

韁形埴輪は他に17号窯より矢視と思われる破片が出土している。

（2）2号窯跡（第21図）

1号窯跡の南に接して所在する。北側の壁は1号窯跡に切られており、1.70mほど残されているにすぎない。南側の壁は4号窯跡を切っており3.15mほど残っている。両壁は平行し、全体的に長方形を呈する。焼成部での幅は1.35mを測る。床面はよく焼けており、焚口部付近にある5号窯跡の周辺まで焼土が認められる。

床面の傾斜は、焚口部から焼成部にかけて15度前後であるが、焼成部上位から窯尻部にかけて急激に角度を増し40度となる。

天井部は残存せず、痕跡も認められない。

1号窯跡同様、ローム層を掘り込んだ半地下式無段登窯である。

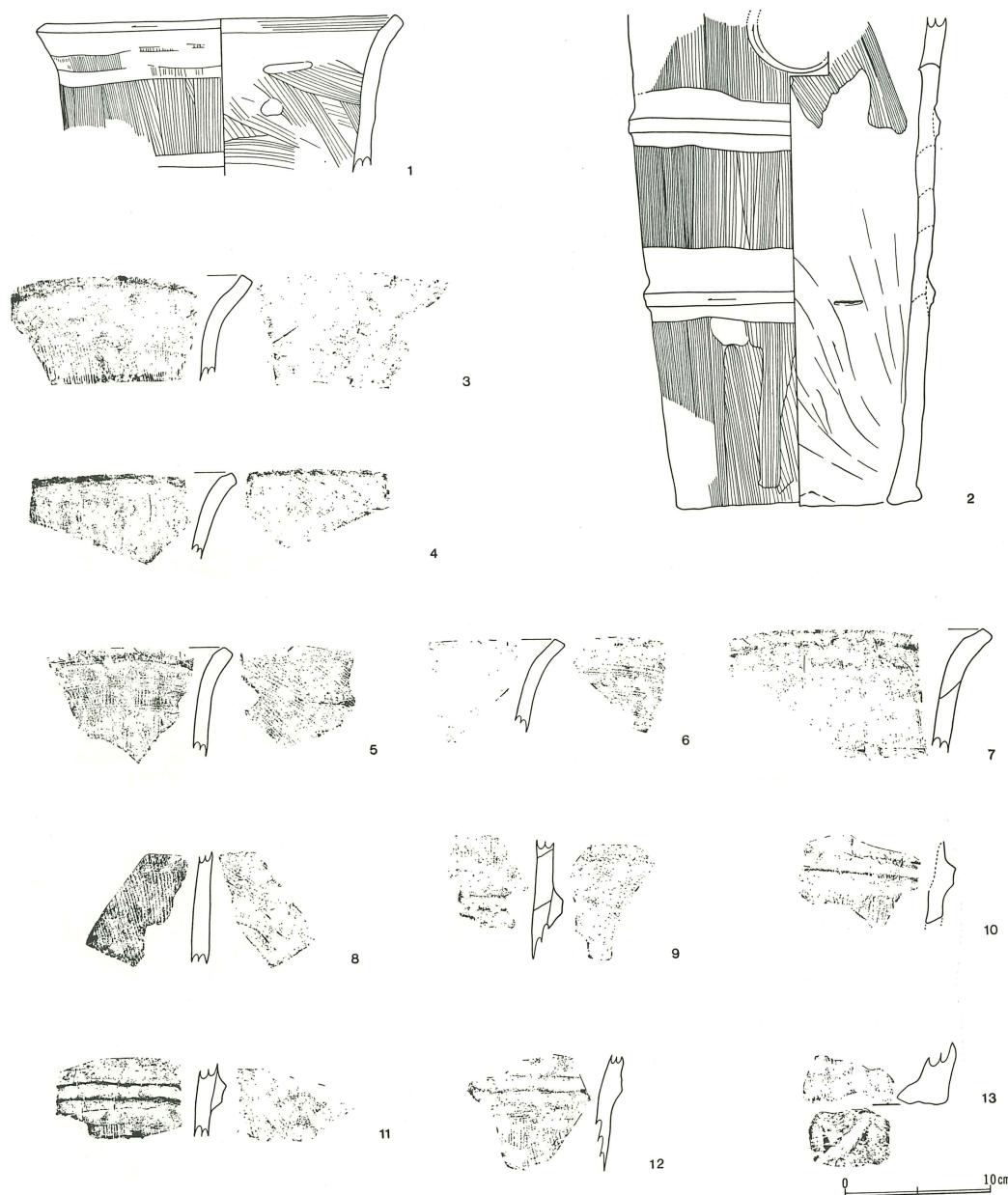
床面及び床面下精査の結果、少なくとも2回の操業が行われたことが確認された。

N—61°—Wに主軸をとる。円筒埴輪の破片が出土している。

2号窯跡出土遺物（第23図）

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
23図-1	(10.8)	口25.4	口1.1 a 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 7本／1.7cm ⇒口縁部右回り布横撫で	斜刷毛×方向 8本／2cm	残率60%。

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
23図-2	(34.0)	底(16.8)	底3.3 a 1.4 b 1.2 c 1.4	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・晶石・珪 酸体 焼：良好・堅緻 色：淡赤褐色	第三段に円孔。 右回り穿孔後 無調整。	1A 0.6/3.1 2A 0.5/2.7 右回り布横撫で	縦刷毛 9本/2cm	第二段まで布 撫で 第三段からは 斜刷毛へ方向 7本/2cm	残率40%。
23図-3	(7.3)	—	口0.9	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：淡褐色	—	—	縦刷毛 11本/2cm ⇒右回り指撫 で	斜刷毛 5本/1cm ⇒横刷毛	破片。
23図-4	(6.3)	—	口0.8	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：赤褐色	—	—	縦刷毛 11本/2cm ⇒右回り横撫 で	右傾斜刷毛 10本/2cm ⇒横撫で	破片。
23図-5	(7.5)	—	口0.9	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：赤褐色	—	—	縦刷毛 4本/1cm ⇒横撫で	右傾斜刷毛 11本/2cm ⇒横撫で	破片。
23図-6	(6.2)	—	口0.8	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：普通 色：赤褐色	—	—	縦刷毛⇒横撫 で	横刷毛 4本/1cm ⇒横撫で	破片。
23図-7	(8.4)	—	口0.9	胎：少量。酸化鉄 粒・角岩礫・珪酸 体 焼：良好 色：外面暗褐色・ 内面淡橙褐色	—	—	縦刷毛 10本/2cm ⇒横撫で	—	破片。 内面磨滅。
23図-8	(7.7)	—	1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 9本/2cm	右傾斜刷毛 9本/2cm ⇒撫で	破片。
23図-9	(8.1)	—	1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好・堅緻 色：暗灰褐色	—	A 0.8/2.9	縦刷毛 9本/2cm	右傾斜刷毛 5本/1cm ⇒部分的に指 撫で	破片。 須恵質。
23図-10	(5.6)	—	1.0	胎：微量。酸化鉄 粒・角岩礫 焼：良好・堅緻 色：淡橙褐色	凸帶下1.0cm で円孔の上端。 穿孔後指撫で。	A 0.6/2.8	縦刷毛 11本/2cm	—	破片。 内面剥落。
23図-11	(5.0)	—	1.0	胎：微量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：灰褐色	—	A 0.6/2.9 布横撫で	縦刷毛 6本/1cm	右傾斜刷毛 4本/1cm	破片。 須恵質。 内面に布痕残る。
23図-12	(8.0)	—	1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：茶褐色	—	C 0.5/2.2	縦刷毛 9本/2cm	撫で	破片。
23図-13	(4.2)	—	底3.6	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：淡橙褐色	—	—	縦刷毛 10本/2cm	指撫で	破片。 底面に篠状庄痕あ り。



第23図 2号窯跡出土遺物

大刀形埴輪（図版41—3）

勾金部分の破片である。残存長11.1cm、幅4.7cm、器厚1.4cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫等の砂粒を少量含む。焼成は非常に良好である。

残存部には、三輪玉の代りに、棒状粘土を縦に貼り付けている。

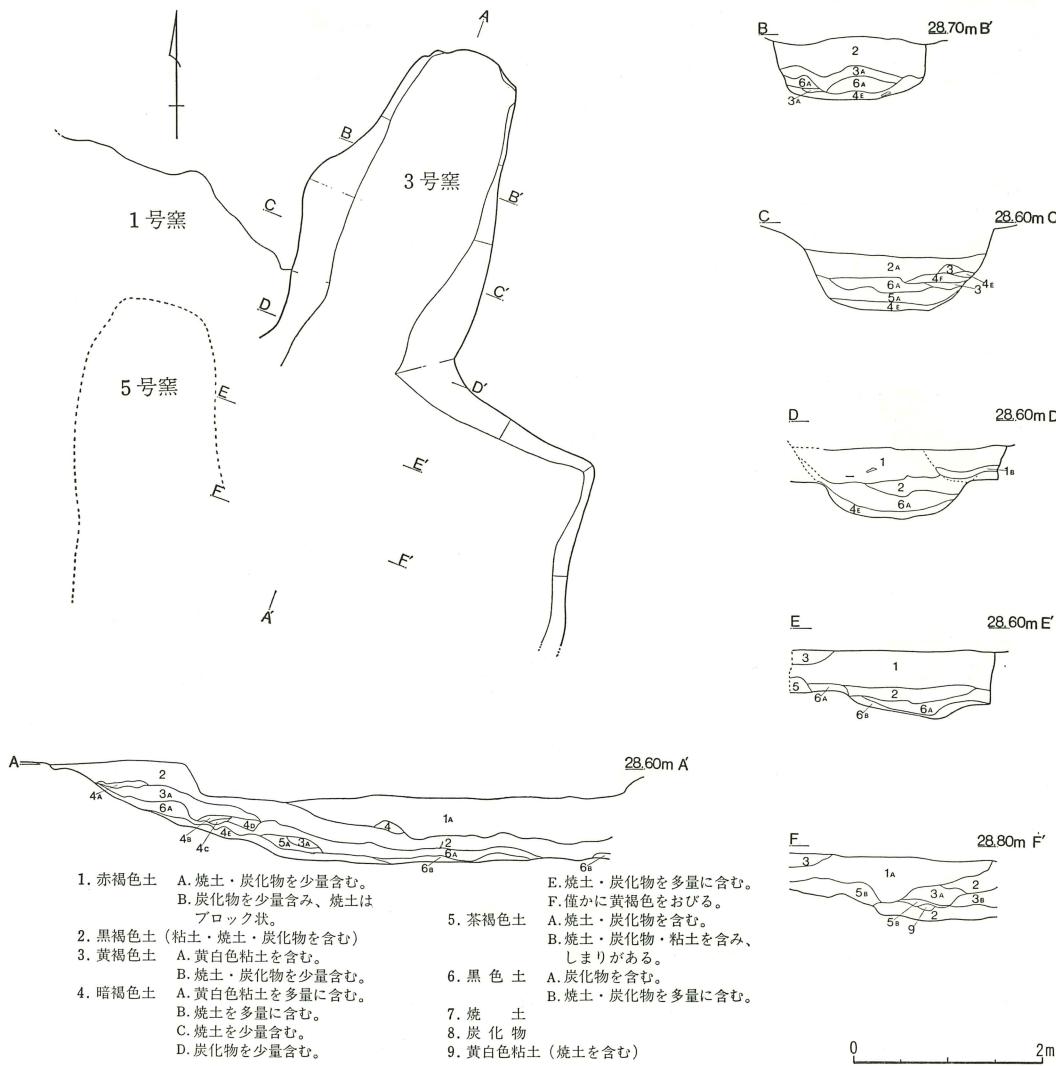
(3) 3号窯跡 (第24図)

5基群在する中で、最も東寄りに位置する。全長3.63m、最大幅は焼成部中位にあり1.55m、窯尻部ではやや幅を減じて1.05m、焚口部で1.42mを測る。全体に長方形に近いが、やや胴が張る形態を呈する。東側壁は、灰原を形成する堅穴状の遺構と接している。

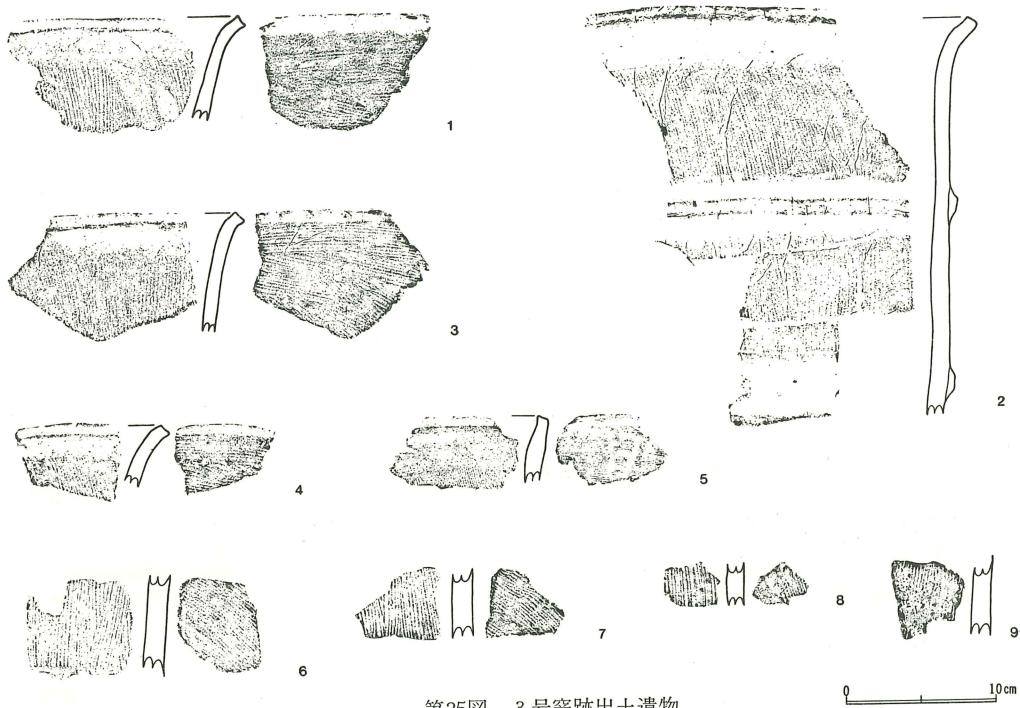
床面は堅くしまっており、補修は行われていない。比較的短期間の操業と考えられる。

また、焚口部から焼成部にかけては約15度の勾配をもち、煙道部付近になるとやや角度を減じて10度前後となる。

天井部は残っていない。前庭部付近にある5号窯跡を切っており、同窯跡よりも後出のものである。群在する5基のうち、最も新しいと考えられる。主軸はN-29°-Wにとる。



第24図 3号窯跡

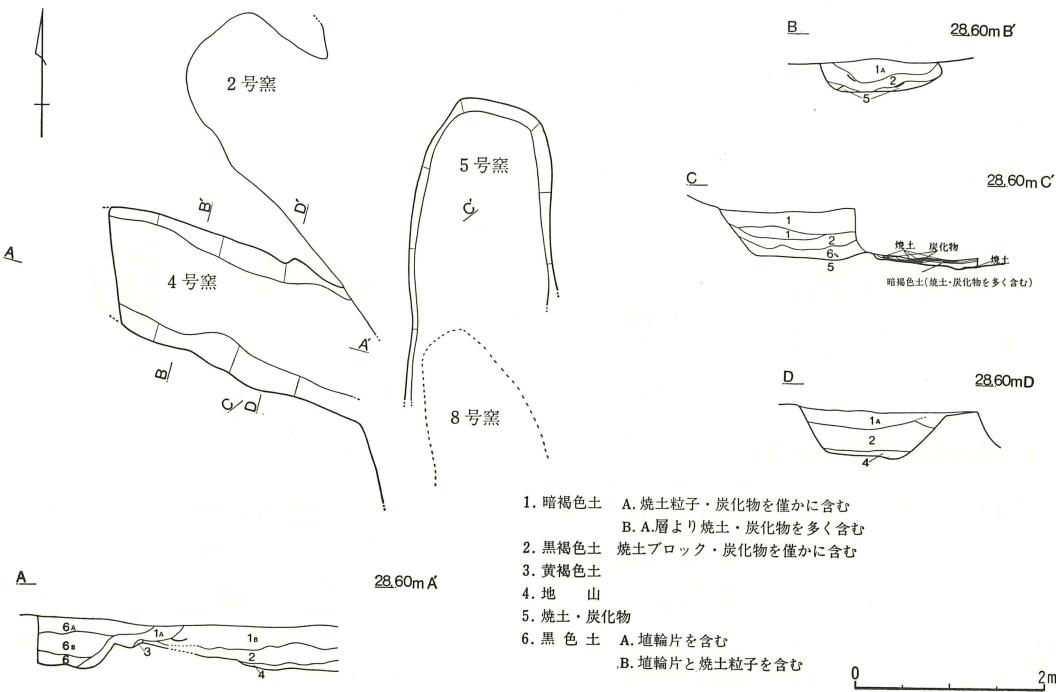


第25図 3号窯跡出土遺物

3号窯跡出土遺物(第25図)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
25図-1	(7.4)	—	口0.8	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：淡橙褐色	—	—	縦刷毛 9本／2cm ⇒横撫で	右傾斜刷毛 5本／2cm ⇒横刷毛⇒ 横撫で	破片。
25図-2	(26.4)	—	口0.8 a 1.0 b 1.1 c 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	凸帶下1.5cm で孔の上端。	上A 0.4／2.4 下A 0.5／2.5 指横撫で	縦刷毛 10本／2cm ⇒口縁部横撫 で	右傾斜刷毛 10本／2cm ⇒口縁部横撫 で	破片。
25図-3	(8.0)	—	口0.9	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：赤褐色	—	—	縦刷毛 9本／2cm ⇒右回り横撫 で	右傾斜刷毛 9本／2cm ⇒横刷毛⇒ 横撫で	破片。
25図-4	(4.1)	—	口0.9	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：赤褐色	—	—	縦刷毛 10本／2cm ⇒横撫で	右傾斜刷毛 5本／1cm ⇒横刷毛⇒ 横撫で	破片。
25図-5	(4.5)	—	口0.7	胎：やや多い。パ ミス・角岩礫 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 13本／2cm ⇒撫で	横刷毛 17本／2cm ⇒撫で	破片。
25図-6	(6.8)	—	1.3	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：淡橙褐色	—	—	縦刷毛 8本／2cm	右傾斜刷毛 10本／2cm	破片。
25図-7	(4.5)	—	1.3	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 10本／2cm	右傾斜刷毛 10本／2cm	破片。

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
25図-8	(3.0)	—	1.1	胎：少量。パミス 珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 5本／1cm	右傾斜刷毛 5本／1cm	破片。
25図-9	(5.4)	—	1.2	胎：少量。パミス 晶石・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 9本／2cm ⇒指撫で	縦指撫で	破片。



第26図 4号・5号窯跡

(4) 4号窯跡 (第26図)

2号窯跡の南に隣接している。窯尻部が後世の攪乱を受けており、末端部分が破壊されている。残存長2.50m、側壁はほぼ平行し、焼成部での幅は1.15mを測る。おそらく1号、2号窯跡と同じように長方形を呈すると考えられるが、他の窯跡に比して幅が狭い。

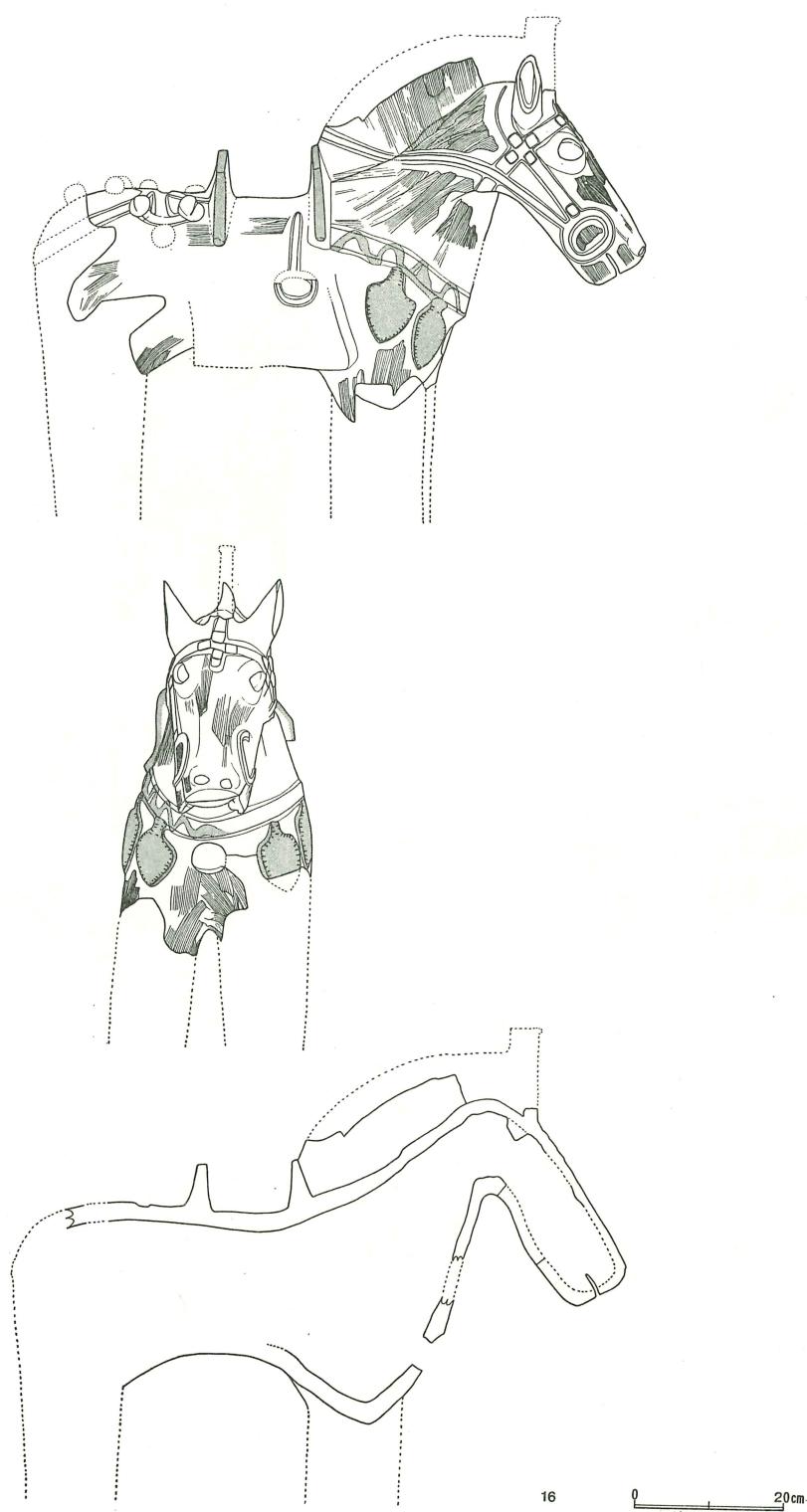
床面は、焚口部から焼成部にかけて堅緻であるが、破壊された煙道部付近はやや軟弱である。床面の勾配は比較的ゆるく、焚口部から焼成部中位にかけて約10度、焼成部上位から窯尻部にいたると15度となる。

北側に接する2号窯跡に切られている。5基群在する中で、最も古いと考えられる。他の窯跡と同様、ローム層を掘りこんだ、半地下式無段登窯である。遺物は焼成部から窯尻部にかけて、まとまって出土しており、馬形埴輪、円筒埴輪片等がみられる（第27～29図）。

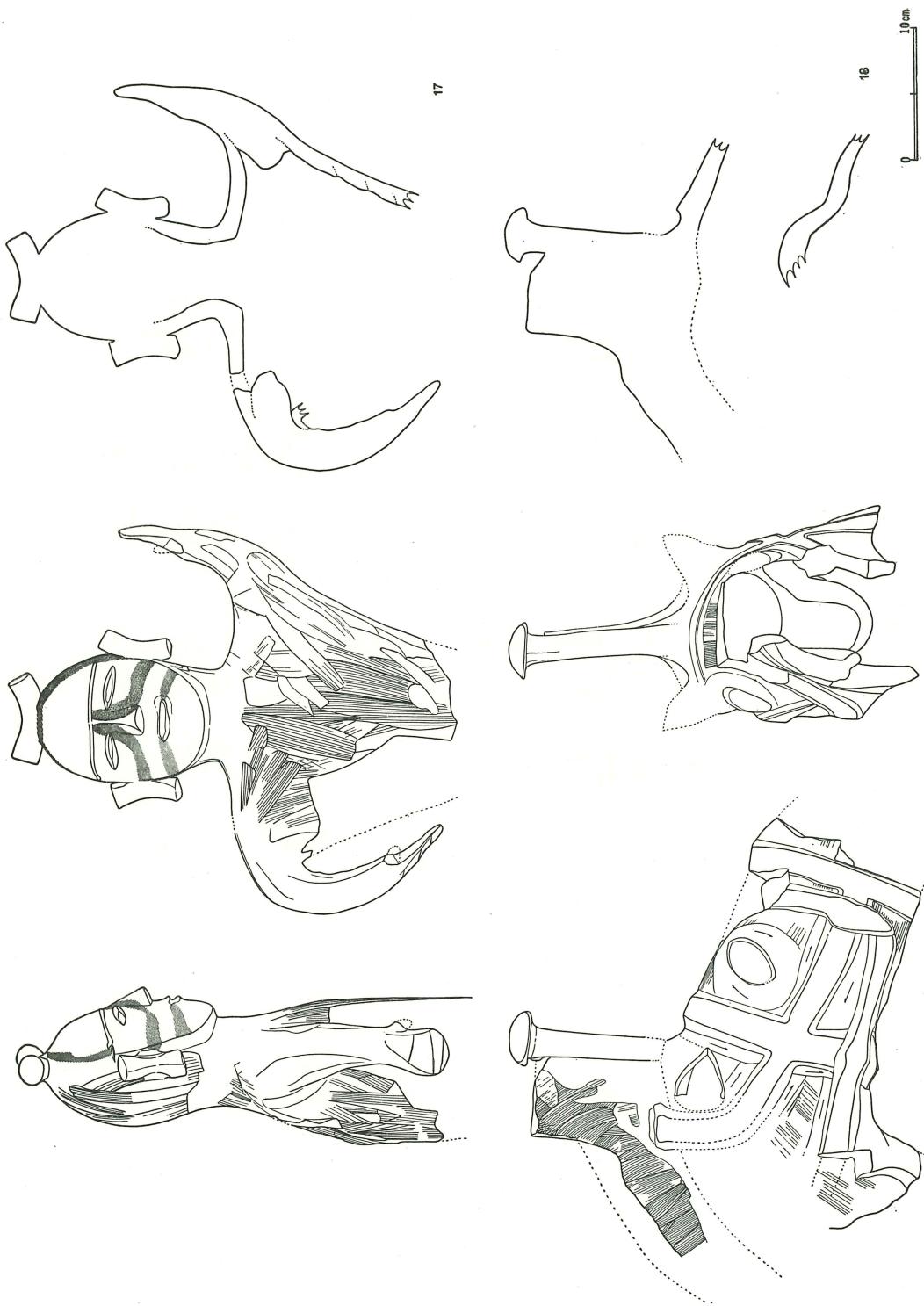
主軸をN-70°-Wにとる。



第27図 4号窯跡出土遺物 (1)



第28図 4号窯跡出土遺物 (2)



第29図 4号(18)・5号(17) 窯跡出土遺物

4号窯跡出土遺物(第27~29図)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
27図-1	(23.0)	底23.7	底1.7 1.3	胎：多量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好・堅緻 色：外面暗褐色・ 内面褐色	第一段に円孔 穿孔後指撫で。 方向不明。 4.9×(4.5)	A 0.6/2.9 右回り布横撫で	縦刷毛 9本/2cm	布撫で 基部付近は指 撫で	残率50%。
27図-2	(36.4)	底22.5	底1.4 1.3	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ スコリア粒・珪酸 体 焼：普通 色：赤褐色	第一段に円孔 右回り穿孔後 指撫で。	A 0.6/3.0 右回り指撫で。 凸帶下部に、中指 による回転時の刻 痕あり。	縦刷毛 13本/2.7cm	凸帶付近まで 布撫でへ方向 凸帶より上は 指撫で	残率50%。凸帶上 部に付属物の存在 を思わせる剥離痕 があり、形象埴輪 基部と考えられる。 底面に篠状圧痕。
27図-3	(13.0)	—	口0.9 a 1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：外面暗褐色・ 内面暗褐色	—	A 0.5/2.3 右回り布横撫で	縦刷毛 11本/2cm ⇒口縁部右回 り横撫で	右傾斜刷毛 11本/2cm ⇒口縁部横刷 毛⇒撫で	破片。
27図-4	(8.0)	—	口0.9	胎：やや多い。パ ミス・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：灰褐色	—	—	縦刷毛 9本/2cm ⇒右回り横撫 で	右傾斜刷毛 10本/2cm ⇒横刷毛⇒撫 で	破片。 須恵質。
27図-5	(4.1)	—	口0.9	胎：少量。パミス 角岩礫 焼：良好・堅緻 色：赤褐色	—	—	縦刷毛 10本/2cm ⇒撫で	右傾斜刷毛 10本/2cm ⇒撫で	破片。
27図-6	(33.5)	—	a 1.4 b 1.3 c 1.3	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	上段に円孔。 穿孔後指撫で。 方向不明。	1A' 0.3/1.9 2A' 0.3/2.6 3A' 0.4/2.2 右回り布横撫で	縦刷毛 9本/2cm	右傾斜刷毛 9本/2cm ⇒中段以下は 縦指撫で	破片。
27図-7	(6.9)	—	1.4	胎：少量。パミス 角岩礫・珪酸体 焼：普通 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 11本/2cm	縦指撫で	破片。
27図-8	(7.1)	—	1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：赤褐色	凸帶下3.5cm で孔の上端。	B' 0.9/3.7 右回り指横撫で	縦刷毛 9本/2cm	右傾斜指撫で	破片。 形象埴輪の基部と 思われる。
27図-9	(6.6)	—	1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体多い。 焼：普通 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 5本/1cm	布撫で	破片。
27図-10	(4.8)	—	1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：赤褐色	—	—	縦刷毛 5本/1cm	布撫で	破片。
27図-11	(4.4)	—	1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：普通 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 10本/2cm	布撫で	破片。
27図-12	(5.7)	—	—	胎：微量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 10本/2cm	—	破片。 内面剥落。

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
27図-13	(4.0)	—	—	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 10本／2cm	—	破片。 内面剥落。 底面に縦状圧痕あり。
27図-14	(6.1)	—	1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 9本／2cm	—	破片。 内面剥落。 底面に縦状圧痕あり。
27図-15	(7.2)	—	底0.9 b1.3	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 9本／2cm	指撫で。	破片。

馬形埴輪（第28図-16、図版42-1）

脚部と臀部を欠損している。頭部はたて髪を除き、ほぼ完形の状態で床面より出土した（図版8）。残存長75.7cm、残存高48cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は非常に良好で堅緻であり、橙褐色を呈する。

たて髪は上部を欠損しているが、およそ10～11cmほどに切り整えられていたと思われる。頭頂部で結ばれたたて髪は、差し込み式であり、孔部には差し込まれた枘部分が残っている。面繫は幅2.4cmの粘土紐を貼り付けている。辻金具には、1辺1.5～2cmの方形粘土板を十文字に配し、額に1ヵ所、両頬に1ヵ所貼り付け、さらに鏡板と面繫の接点に1個を貼付している。鏡板は素環であり、引手および手綱は、面繫装着後、幅1.3cmの粘土紐を貼り付けて表現している。胸繫は、幅3.5cmの粘土紐を貼り付け、計4個のハート形杏葉を垂下している。胸繫部には、波状文様に朱彩が施され、杏葉は、周縁部分に刺突文（刀子先端使用）を巡らせ、全面を朱彩している。鞍部は、前輪と後輪、鎧、障泥が表現されている。前輪と後輪は1ヶを欠く。いずれも海の部分は刷毛調整後、撫でを施し、山の部分を含め朱彩されている。鎧は幅1cmの粘土紐を貼り付けた輪鎧で、やや橢円形を呈する。棒状部は長さ11cmを測る。障泥は下辺を欠くが上辺17cm、推定下辺22cm、高さ16cmを測る。尻繫は、幅1.5～2cmの粘土紐で表現し、輪状を呈する雲珠に繋がっている。雲珠からは三方向に三鈴の鈴杏葉が下がり、3個の鈴が残存している。径は3～3.5cmで、2個は中央に線刻で孔を表わし、残り1個は、刀子で切り込んで孔を表現している。

目・鼻孔とも外面から穿孔され、その周囲に脹らみをもたせ、撫で調整を施す。口は刀子で正面から鏡板部分まで切り込まれ、耳は差し込み式である。尻尾は欠損しているが、おそらく差し込み式であったと思われる。

胴部の成形は、腹部に大形の粘土板を用い、この粘土板から各部位に合わせ、粘土帶を接合している。脚部は別個に製作したものを胴部に接合している。

頭部の成形は、まず頸部に粘土帶を積み上げて筒状の輪郭を作り、その正面は粘土板を貼付して塞ぐ。さらにこの円筒状の両側に粘土板を貼り付け、顔部を形作っている。正面部分は、両側の粘土板を貼付した後、板で押圧を加え平坦化している。その際、両側粘土と円筒部の間に粘土を加

え、肉付けと補強を行っている。

外面調整は、縦刷毛11本／2cm幅を施すが、顔面は撫で調整により消されている。内面は、丁寧な撫で調整を整している。

馬形埴輪（第29図-18、図版42-2）

口辺部を欠損する頭部破片である。残存長34cm、残存高31.4cmを測る。胎土は、パミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は非常に良好で堅緻である。色調は橙褐色を呈する。

たて髪は、推定高7～8cmの切り整えられた状態であったと思われ、先端部は径4.5cm、高さ11cmに結んで飾りとしている。面繋は幅2.3cmの粘土紐を貼り付けて表現し、辻金具は無い。引手および手綱は幅1.5～2cmの粘土紐で表わされる。しかし、左側侧面は、成形時に貼付した粘土板の高さが右側面に比べ、2cmほど短く、引手を表現する余地が無い。そのため左側は、引手および手綱の表現が省かれ、頬革だけが表わされている。

また右側面には鼻革と平行する幅1.6cmの粘土紐が貼付されており、これは引手と繋っている。

目は外面から穿孔されており、耳は差し込み用の孔が穿たれている。

頸部に粘土帯を積み上げて筒状にしその両側面に粘土板を貼付して、顔部を形作る。

外面は縦刷毛11本／2cm幅を施した後、撫で調整を施し、内面も撫で調整している。

(5) 5号窯跡（第26図）

1号、2号、4号各窯跡の焚口部及び前庭部に所在している。床面が部分的に検出されたもので、側壁は僅かに残されているにすぎない。

床面と考えられる焼土の残存状態から推定すると、全長3.00m強、側壁は平行し、幅1.40m前後の長方形を呈する埴輪窯跡と考えられる。これは、隣接する他の窯跡と比べ、規模、形態に差異はない。床面は8度前後の勾配をもつていると考えられる。もちろん、天井部はない。

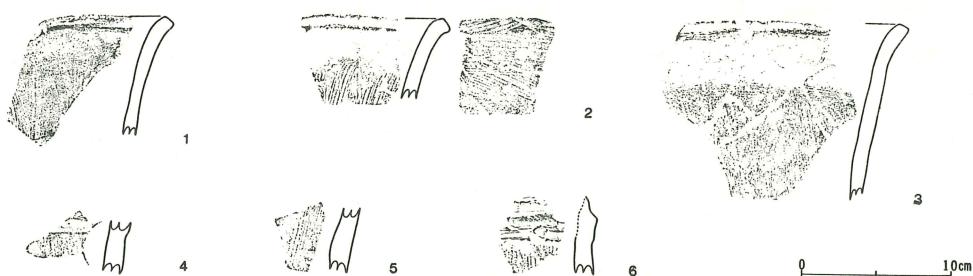
1号窯の焚口部を切っており、3号窯が上に乗っている。

南に隣接する8号窯との関係は前述した。

構造的には、他の窯跡と同様、ローム層を掘り込んだ半地下式無段登窯である。

遺物は少なく、焼成部付近から円筒埴輪片が若干出土しているにすぎない（第30図）。

主軸はN-1°-Wをとり、ほぼ南北をさす。



第30図 5号窯跡出土遺物

5号窯跡出土遺物(第29・30図)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
30図-1	(7.8)	—	口0.9	胎：少量。パミス 角岩礫 焼：普通 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 5本／1cm	右傾斜刷毛	破片。
30図-2	(5.3)	—	口1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好・堅致 色：赤褐色	—	—	縦刷毛 4本／2cm △横撫で	右傾斜刷毛 10本／2cm △横刷毛	破片。
30図-3	(11.8)	—	口0.9	胎：多量。パミス 酸化鉄粒 焼：普通 色：赤褐色	—	—	縦刷毛 5本／1cm	右傾斜刷毛 10本／2cm △口縁部横刷毛	破片。 磨耗著しい。
30図-4	(3.5)	—	1.3	胎：少量。パミス 酸化鉄粒。 焼：普通 色：外面淡橙褐色 内面橙褐色	凸帶下に円孔 端あり。 穿孔後指撫で。	—	縦刷毛 5本／1cm	縦指撫で	破片。
30図-5	(4.5)	—	1.4	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：普通 色：外面灰褐色・ 内面橙褐色	—	—	縦刷毛 5本／1cm	指撫で	破片。
30図-6	(5.7)	—	1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 多い。 焼：良好 色：橙褐色	—	C 0.4／2.4 右回り布横撫で	縦刷毛 10本／2cm	布撫で	破片。 凸帶上部に布目痕 あり。

人物埴輪(第29図-17、図版41-4)

床面から出土した『左手を挙げる男子埴輪』であり、発掘時、右手は胴部から約40cm北側に離れて検出された(第30図)。腰部以下を欠損し、残存高33.9cmを測る。顔部は、長さ13.5cm、幅9.6cmの面長な顔立ちであり、右手を曲げ気味に下ろし、左手は真っすぐ上に挙げている。

胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等をやや多く含み、特に珪酸体の量が目立つ。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。顔面には朱彩が施されている。

髪は短いくの字状の上げ義豆良で、頭頂部にも美豆良と同じ形成の結髪が貼付されている。目と口は刀子で切りぬかれ、目は木葉形を呈する。眉は幅0.2cmの粘土紐を直線的に貼り付け、鼻も粘土を貼付している。鼻すじは通っているが鼻孔の表現は無い。赤彩は八の字状に眉のつけ根から美豆良にかけてと、口の左右端を直線的に、さらに顔の輪郭にそって一周するかたちで施されている。

胴部の成形は、幅2.5cmの粘土紐積み上げであり、肩部まで巻き上げてから、中央の頸部部分を除き、巻き上げた粘土紐の前後を貼り合わせている。頭部は、開口させておいた頸部から、幅1.5cmの粘土紐を巻き上げ、頭頂部で絞り込み閉じている。さらに、顔面には粘土を貼付し、入念な撫でを施す。腕は、肩部に穴をあけ、柄のついた腕を差し込んでいる。手はミトン形で、手の平・甲とも扁平に押し潰されており、平の部分には、押しあてた板の痕跡が認められる。欠損してはいるが指の表現は親指のみで、他の4本は省略されている。

外面は、刷毛調整が施されるが、頸部周辺は丁寧な撫でにより消されている。内面は、頭部・胴

部とも撫でおよび撫でつけが施されているが、雑な調整であり、粘土紐の痕跡が明瞭に残っている。

(6) 1号～5号窯跡灰原（第20図）

A群6基の窯跡のうち、7号窯跡を除く5基については前述したとおりである。この「八ツ手」状に群在する窯跡の灰原については、その都度簡単に触れてきた。ここでは、それらをまとめることとする。

当初、3号窯跡の周辺を精査してゆく過程で、同窯跡の東側壁に接して堅穴状の落ち込みが確認された。この落ち込みがコーナーを持っていることから住居跡と判断し、7号住居跡と命名して調査をすすめた。東側のコーナー付近はローム層を垂直に掘り込んでいるのに対し、西側のプランは明確にしえなかった。これは、埴輪窯跡の構築の際に破壊されたものと考えた。しかし、その後調査をすすめてゆくと覆土中に焼土を挟んで2枚の灰層が認められた。また遺構内から出土する遺物がすべて埴輪であり、さらに床面に柱穴はおろか、他に生活の痕跡を示すものがまったく認められないこと等から、この堅穴状の遺構は5基の窯に関する灰原を画するものであると断定した。したがって、この堅穴状に掘り込まれた遺構の内側は、1号～5号窯の灰原さらには不良製品の捨場と考えることができる（写真図版10、11）。この遺構は、東側では上記した堅穴状の落ち込みによって画されておりその境は明瞭であるが、西及び南側は明確に画するものがない。ただ、4号窯跡の南側、8号窯に接した部分に浅い掘り込みが認められ、これが灰原を画するたち上りと考えられる。また、8号窯の項でも触れたが、同窯跡の焼成部から煙道部にかけてロームを張って、堅穴状遺構の床面と同レベルにして、一定の空間をつくり出している。この窯体内に張られた床面上にも2枚の灰層が認められる。この灰層の限界をみると、斜面と肩部の境でとまっており斜面下には及んでいない。したがって灰層の南側の限界は平坦面の末端部と考えることができる。このことは、8号窯の上層断面図をみれば明白である。

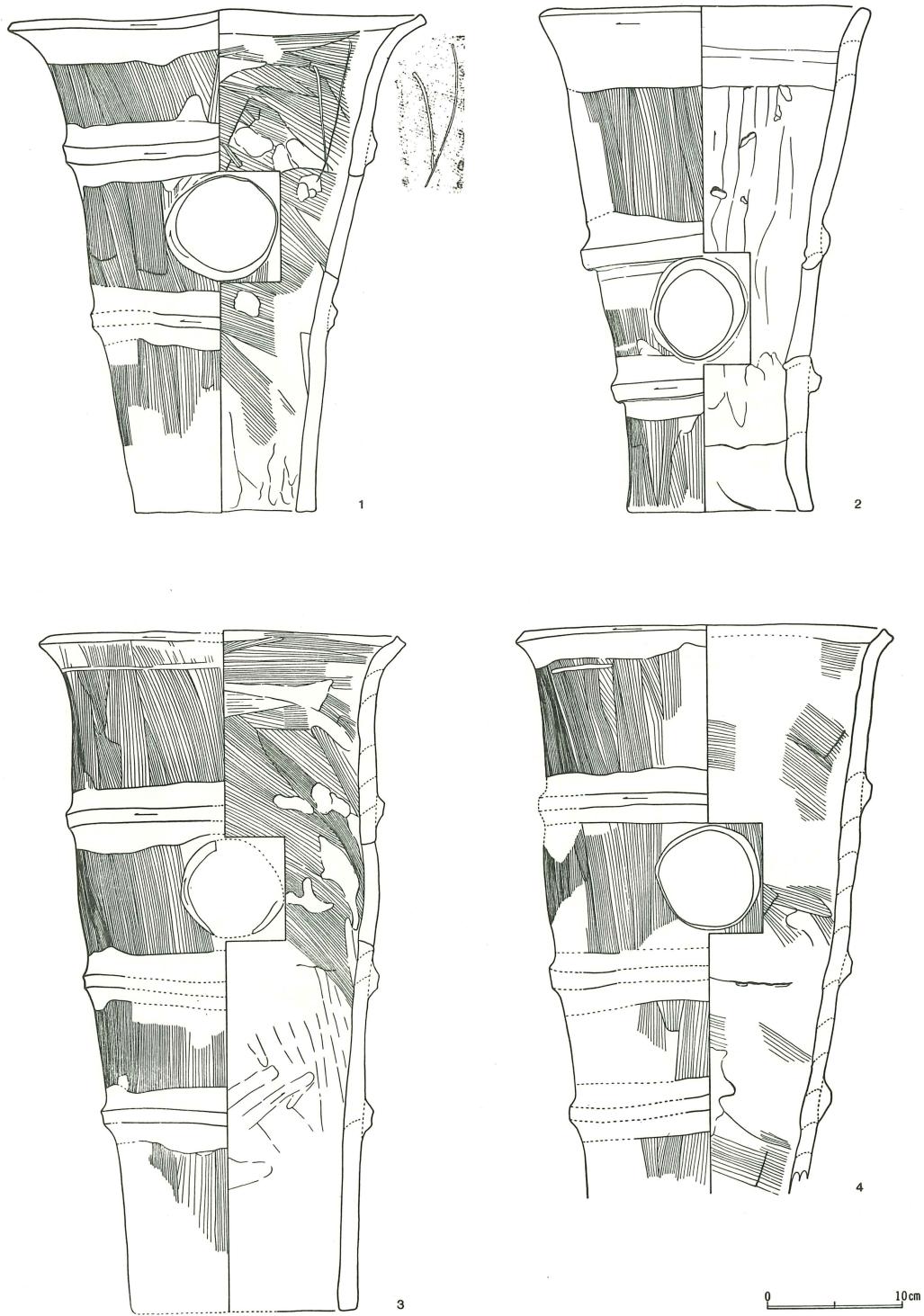
なお、この堅穴状遺構の成立時期であるが、最初の窯が操業された時点で、すでに用意されていたものと考えられる。それは、3号窯跡がこのたち上がりを切っている点、5基中でも古い段階の4号、1号、2号窯跡の焚口部が東に向いて一列に並び、灰をかき出すと考えられる部分に一定の空間を作出している点等を考慮に入れたものである。焼成後の灰は、焚口部の延長上にかき出されると考えられる。当該灰原の西・南側は窯本体に近く、東側ほど灰の量は多くない。したがって、南側は窪地として残されている8号窯埋めもどし、東側の床面と同じレベルにロームを張っただけで事足りたのであろう。

また、窯の構築順序、廃棄された灰、不良製品のあり方等から、最初の窯が構築された段階ですでに、隣接して次の窯を築く準備があったとも考えることができる。当初から狭い場所内に、数基の窯を構築する計画が立てられていたのであろう。このように考えてゆくと、5基の窯跡と堅穴状の遺構とは一体のものであり、お互いに有機的に関連づけられ、自己完結的なひとつのまとまりと考えることができる。

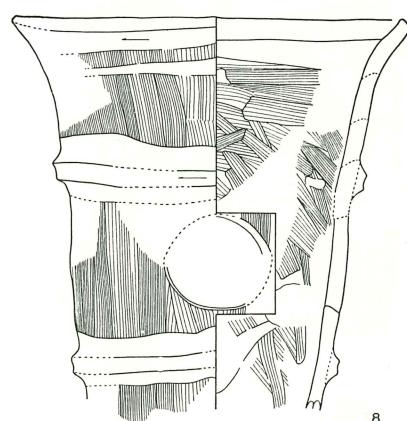
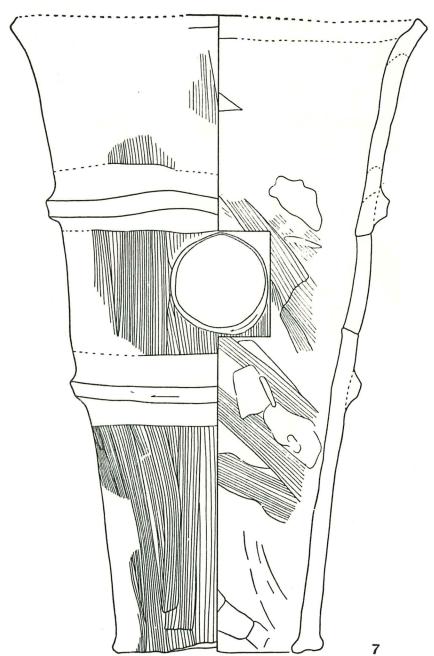
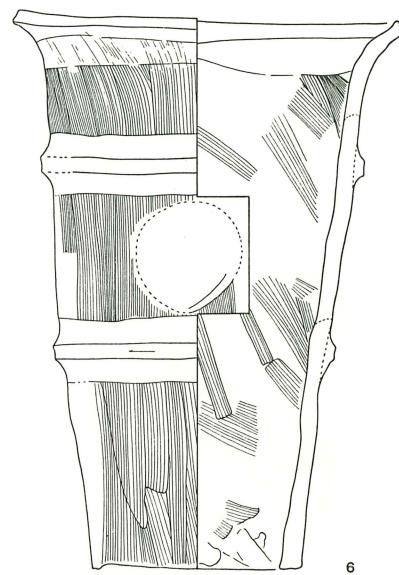
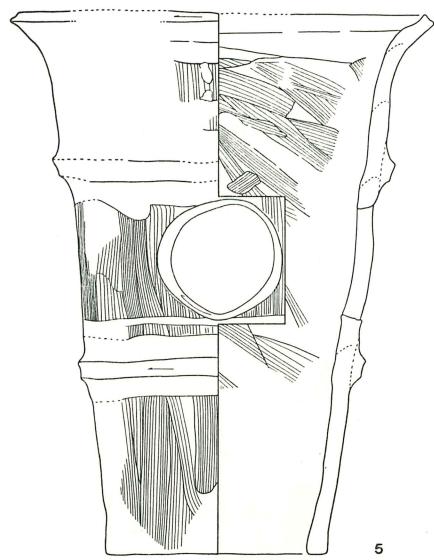
次に出土遺物についてみてみよう。東側のコーナー付近に円筒埴輪が集中して出土し、8号窯跡の東側に人物埴輪が2個体出土している。

なお、1号～5号窯跡の新旧関係を示すと次のようになる。

(古) 4号→2号→1号→5号→3号(新)

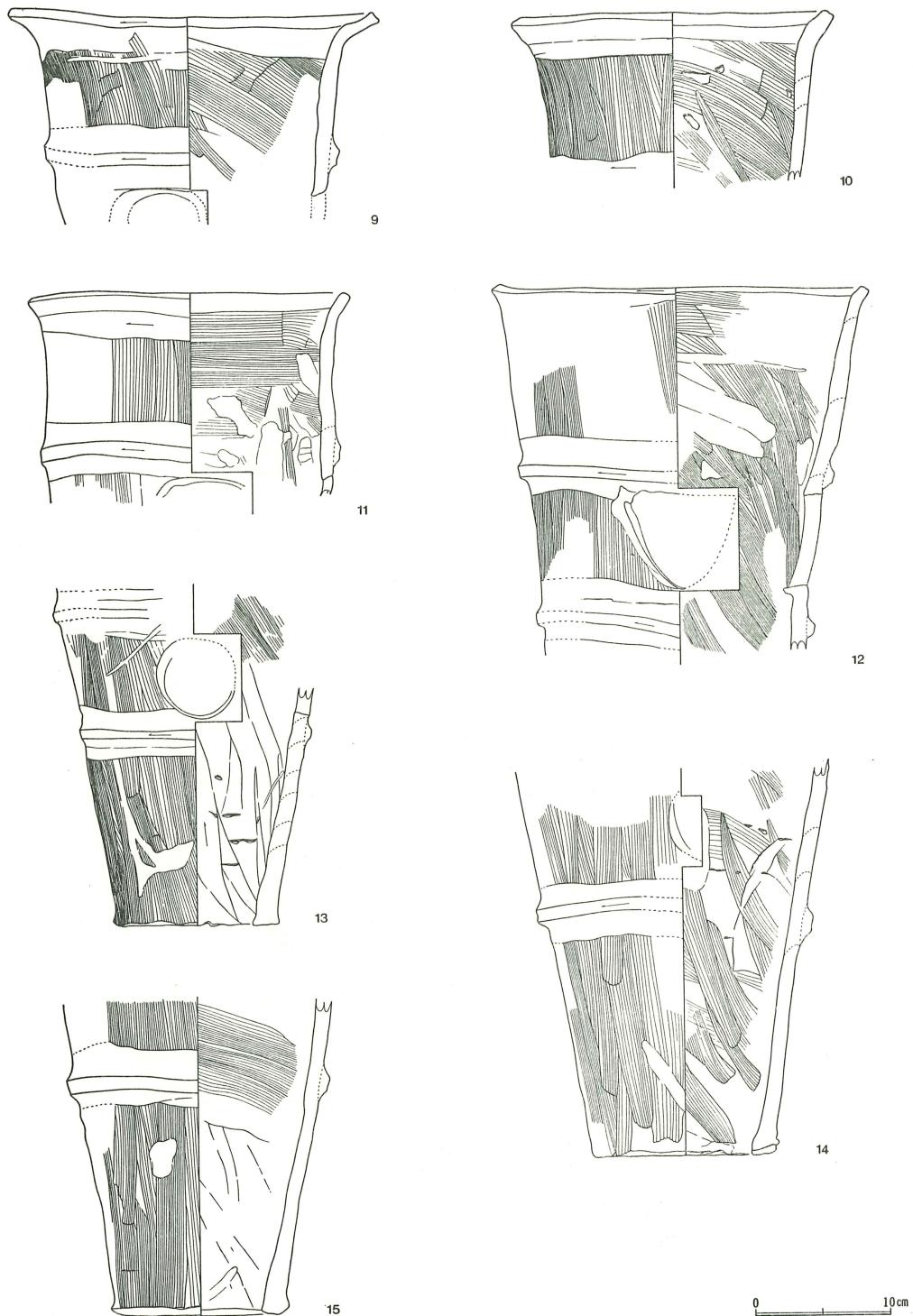


第31図 1号～5号窯跡灰原出土遺物(1)



0 10 cm

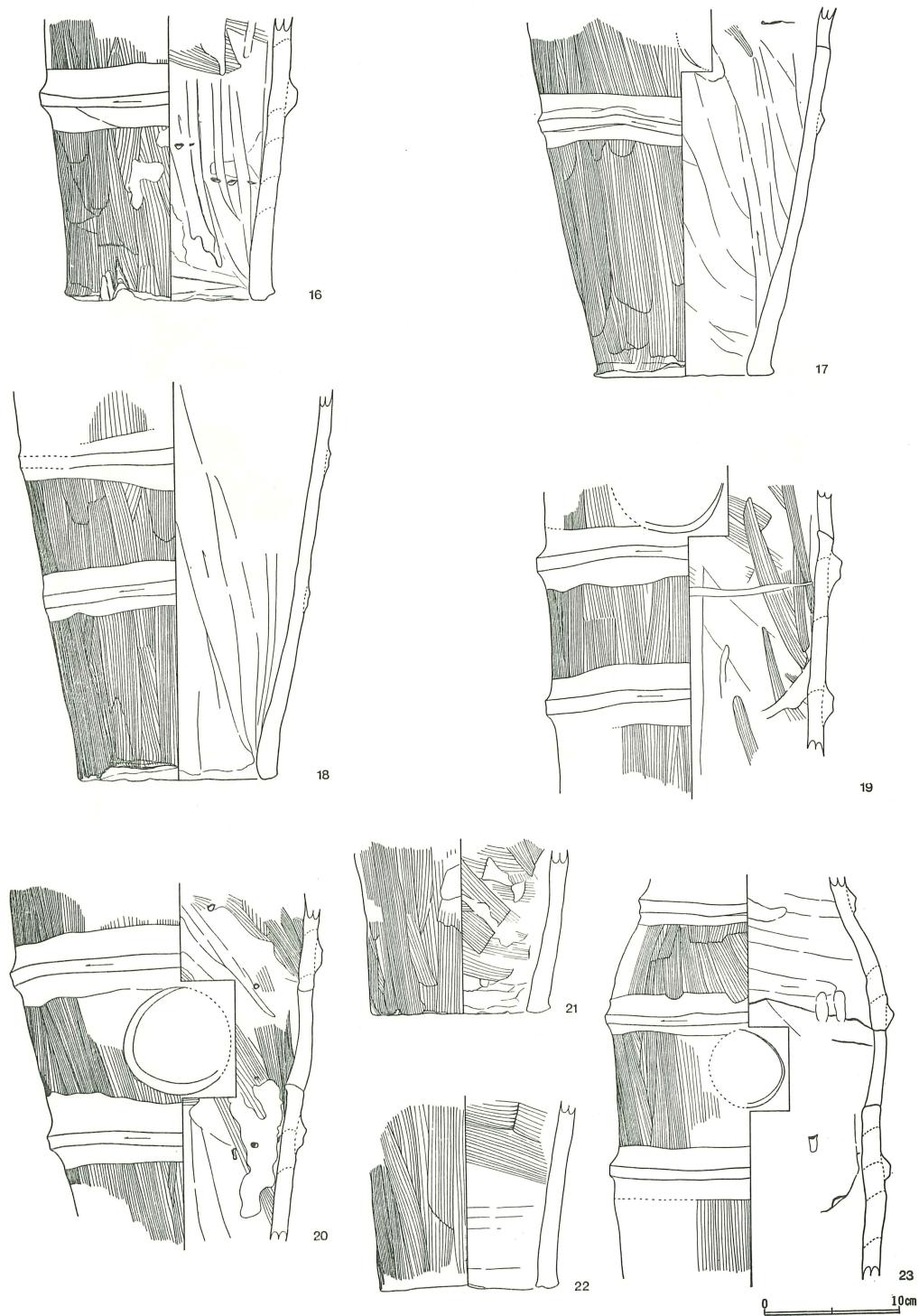
第32図 1号～5号窯跡灰原出土遺物 (2)



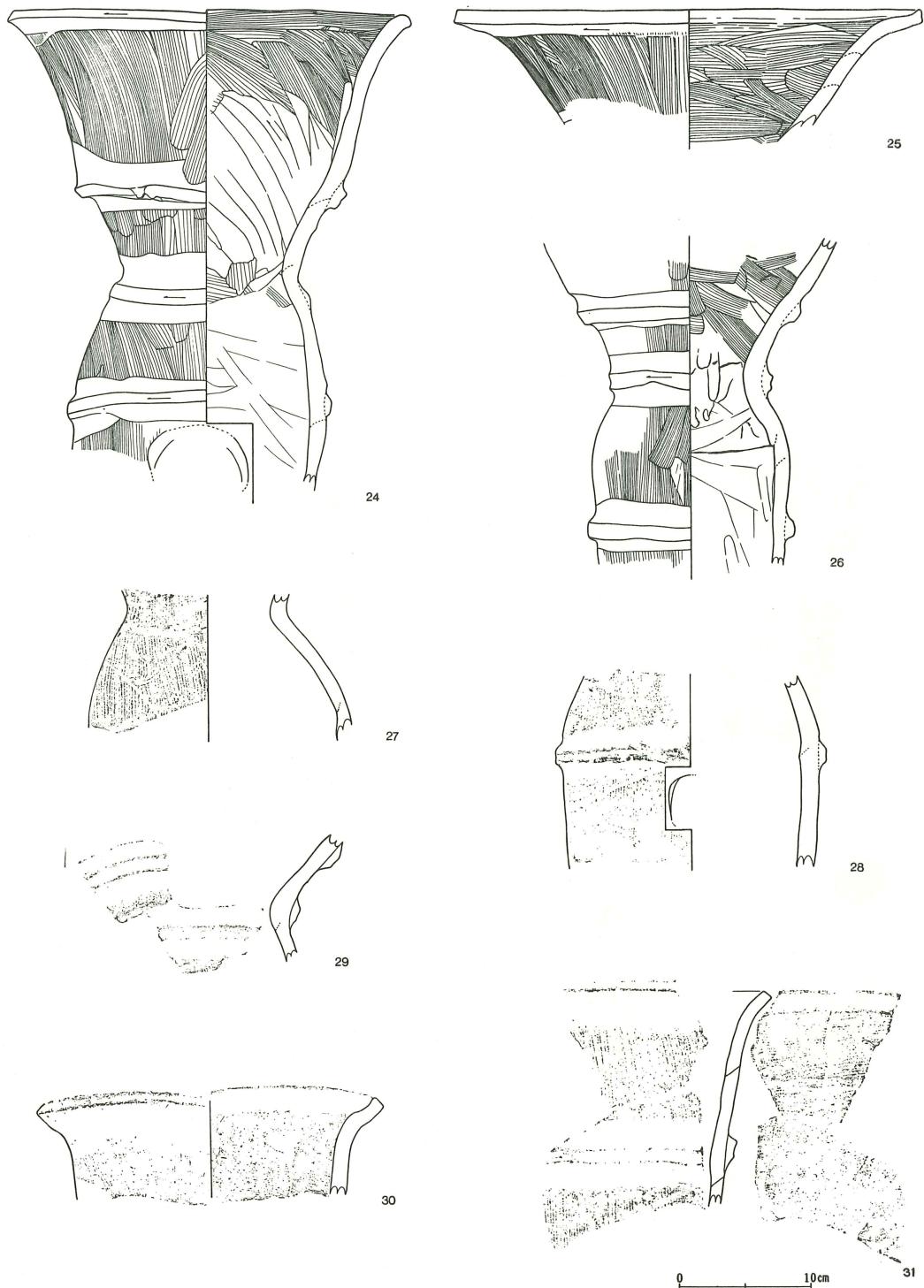
第33図 1号～5号窯跡灰原出土遺物(3)

1号～5号窯灰原出土遺物(第31～40図)

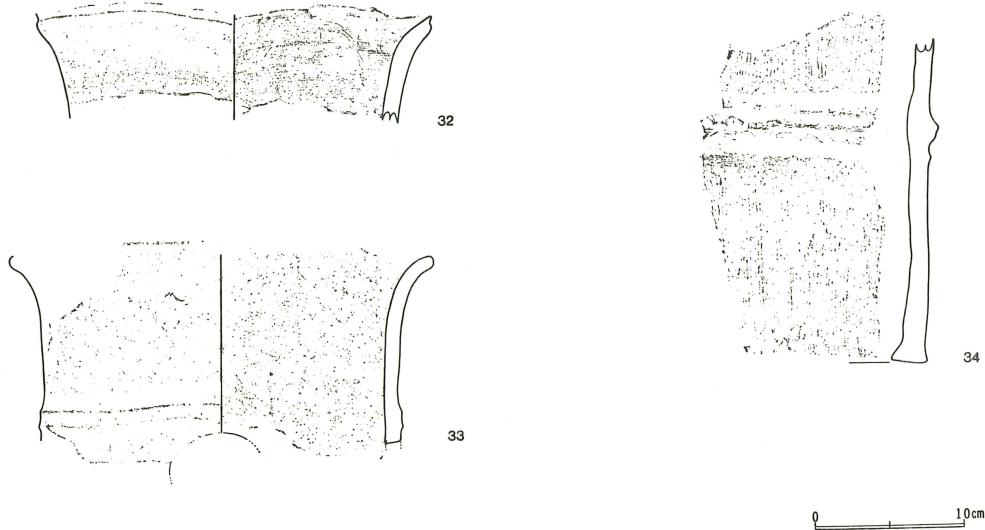
図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
31図-1	37.2	口27.2 底13.5	口0.8 a 1.0 b 1.0 c 1.4	胎：少量。パミス 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：淡褐色	第二段に円孔。 右回り穿孔後 撫で。 7.9×8.3	1A 0.5/2.8 2A 0.6/3.4 右回り布横撫で	縦刷毛 14本/2.5cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方向 17本/3.7cm 基部付近布撫 で	残率50%。 口縁部内面に筆記 号。
31図-2	37.4	口24.7 底(14.0)	口1.1 a 1.4 b 1.5 c 1.5 底1.0	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：普通 色：淡褐色	第二段に円孔。 穿孔後指撫で。 7.5×6.7	1B 0.9/2.5 2B 0.6/2.7 右回り布横撫で 凸帯下部の撫でが 弱い。	縦刷毛 8本/1.8cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	縦指撫で ⇒口縁部右回 り布横撫で	残率60%。 基部は6cm幅の粘 土板を右回りに接 合。
31図-3	50.2	口26.0 底(16.5)	口0.9 a 1.3 b 1.2 c 1.1 d 1.2 底1.2	胎：やや多い。ス ユリア粒・酸化鉄 粒・角岩礫・晶石 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：暗褐色	第三段に円孔、 右回り穿孔後 指撫で。 (7.3)×(7.6)	1A 0.6/3.1 2A 0.6/3.1 3A 0.5/2.8 右回り布横撫で	縦刷毛 13本/3cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方向 9本/2.4cm 第一段・第二 段までは、刷 毛調整後、右 傾斜布刷毛	残率50%。 2～3cm幅の粘土 紐巻き上げ。
31図-4	(42.1)	口28.1	口1.0 a 1.2 b 1.2 c 1.3 d 1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好・堅緻 色：外面 橙褐色 (一部黒灰色)・内 面暗褐色	第三段に円孔。 穿孔後指撫で。 7.7×7.6	1A 0.8/3.6 2A 0.6/2.8 3A 0.7/3.2 右回り布横撫で	縦刷毛 10本/1.9cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方向 22本/4.2cm ⇒一部布撫で	残率40%。
32図-5	36.0	口(27.8) 底15.0	口0.9 a 1.3 b 1.2 c 1.0 底1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 晶石・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：淡褐色	第二段に円孔。 右回り穿孔後 指撫で。 8.0×8.4	1A 0.6/3.6 2A 0.6/3.5 右回り布横撫で	縦刷毛 14本/3cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方向 12本/2.2cm ⇒口縁部布撫 で	残率60%。
32図-6	36.5	口(25.5) 底(11.5)	口1.0 a 1.0 b 1.2 c 1.0 底1.6	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：外面灰色・内 面橙褐色	第二段に円孔。	1A 0.6/4.4 2A 0.6/3.2 右回り布横撫で	布撫で ⇒縦刷毛 11本/2.7cm	基部付近布撫 で ⇒斜刷毛↖方 向 12本/2cm	残率40%。 須惠質。
32図-7	42.1	口(27.0) 底(14.2)	口1.0 a 1.0 b 1.1 c 1.1 底2.1	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：暗褐色	第二段に円孔 右回り穿孔後 指撫で。	1A 0.7/3.0 2A 0.7/2.9 右回り布横撫で	縦刷毛 8本/2.4cm ⇒口縁部布横 撫で	布撫で ⇒斜刷毛↖方 向 9本/2.1cm	残率50%。
32図-8	(26.0)	口25.0	口0.9 a 1.1 b 1.1 c 0.9	胎：少量。酸化鉄 粒・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：外面黒灰色・ 内面淡褐色	上から二段目 に円孔。 右回り穿孔後 指撫で。	1A 0.6/2.9 2A 0.5/2.6 右回り布横撫で	縦刷毛 11本/2cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方 向 8本/2.1cm ⇒口縁部横刷 毛↖方 向 ⇒布横ナデ	残率40%。 須惠質。
33図-9	(14.3)	口26.7	口0.9 a 1.2 b 0.9	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・晶石 焼：良好・堅緻 色：淡褐色	凸带下1.7cm で円孔上端。	A 0.6/3.2 右回り布横撫で	縦刷毛 11本/2.8cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方 向 16本/3.2cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	残率50%。
33図-10	(12.5)	口23.9	口0.9 a 1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：普通 色：淡褐色（一部 暗褐色）	——	——	縦刷毛 7本/1.8cm ⇒口縁部指横 撫で	斜刷毛↖方 向 8本/2.3cm ⇒口縁部指横 撫で	残率70%。
33図-11	(15.7)	口(23.9)	口0.7 a 1.0	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：良好 色：外面淡褐色・ 内面橙褐色	凸带下1.1cm で円孔上端。 穿孔後指撫で。	A 0.4/2.5 右回り布横撫で	縦刷毛 12本/2cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方 向 9本/1.5cm ⇒口縁部横刷 毛 ⇒布横撫で 一部指撫で	残率30%。
33図-12	(26.8)	口(28.0)	口0.8 a 1.2 b 1.1 c 1.2	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：普通 色：淡褐色（一部 暗褐色）	上から二段目 に逆三角形透？ 左回りに穿孔 後、外のみ 指撫で。	1B 0.6/1.4 2B 0.7/2.3 右回り布横撫で	縦刷毛 9本/1.8cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方 向 18本/2.1cm 口縁部付近は 14本/2.5cm	残率60%。 透孔は、カマボコ 形に近い。



第34図 1号～5号窯跡灰原出土遺物(4)



第35図 1号～5号窯跡灰原出土遺物 (5)



第36図 1号～5号窯跡灰原出土遺物(6)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
33図-13	(25.0)	底(12.4)	底2.0 c 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・ 焼：良好・堅緻 色：暗赤褐色	第一段に円孔。 穿孔後指撫無。	B' 0.4/2.5 右回り布横撫で	縦刷毛 10本/2.3cm	第一段は布撫 で↖方向（一部巻き上げ痕 残す）。 第二段から斜 刷毛↖方向 9本/1.9cm	残率50%。 基部は5cm幅の粘 土板。 1.9cm幅の粘土紐 による巻き上げ。
33図-14	(29.0)	底13.7	底2.0 b 1.2 c 1.2	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・晶石・珪 酸体 焼：良好・堅緻 色：暗赤褐色	第二段に円孔。	A 0.7/3.2 右回り布横撫で	縦刷毛 10本/2cm	布撫で ⇒斜刷毛↖方 9本/1.9cm 基部は刷毛調 整後、布撫で	残率60%。 基部は4cm幅の粘 土板を右回りに接 合。 底面に篠条圧痕 あり。
33図-15	(23.0)	底13.0	底2.1 c 1.1	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：淡赤褐色	—	A 0.7/3.0	縦刷毛 10本/2.3cm	斜刷毛↖方 第一段は、刷 毛調整後、布 撫で	残率60%。 基部粘土板右回り に接合。
34図-16	(20.9)	底(15.0)	底1.8 c 1.3	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：橙褐色	—	B 0.8/3.1 右回り布横撫で	縦刷毛 13本/2.4cm	横刷毛 9本/2cm ⇒布撫で↖方 向	残率50%。 底面に篠状圧痕 あり。
34図-17	(26.4)	底(13.5)	底1.9 c 1.0	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・晶石 焼：良好・堅緻 色：橙褐色	第二段に円孔。	C 0.4/2.2	縦刷毛 10本/2.3cm 右回りに施す。	第二段は斜刷 毛↖方 ⇒第一段布撫 で↖方	残率30%。
34図-18	(28.7)	底14.9	底1.3 b 0.9 c 0.9	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・金雲母・ 珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	1A' 0.2/2.3 2A' 0.2/2.5 右回り布横撫で	縦刷毛 9本/2.3cm	右傾斜布撫で	残率70%。 底面に篠状圧痕 あり。
34図-19	(22.2)	—	b 1.0 c 1.1 d 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：暗褐色	上段凸帯上1 cmで円孔下端。	1A 0.8/3.5 2A 0.9/4.0 右回り布横撫で	縦刷毛 10本/2cm 右回りに施す。	斜刷毛↖方 8本/1.9cm 7本/0.9cm ⇒一部布撫で	残率50%。